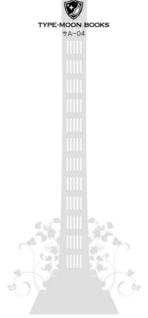




## ロード・エルメロイⅡ世の事件簿



「case.魔眼蒐集列車(上)」



Lord El-Alelloi

# ロード・ エルメロイ II 世の 事件簿



### 目次 Contents

『序章』 005

『第一章』 017

『第二章』 065

『第三章』 153

『第四章』 213

『幕間』 257

『あとがき』 266

#### ロード・エルメロイII世の

#### 事件簿

4 「case. 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン(上)」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時 に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

#### 目次 Contents

序章

第一章

第二章

第三章

第四章

幕間

あとがき



#### 「―あれは、私が世界を周遊していた頃のことだ」

その夜は、珍しく師匠が上機嫌で、手に銀の杯を持っていた。

なんでもギリシャはマケドニア地方にちなんだ酒らしく、特別なときにだけその栓が開けられるのだと、古株の生徒から聞いたことがあった。

師匠のアパートだった。

ゴミや書籍やゲーム機で相変わらず雑然とした部屋の中、そこだけはややマシなソファに埋まって、師匠は杯を傾けている。

弟子のひとり──スヴィン・グラシュエートが典位プライドに昇格した祝いだった。

エルメロイ教室は、時計塔でも優秀な生徒を次々輩出しているらしく、そんな話になるたび、師匠は嬉しさと寂しさと悔しさと苦しさを、まぜこぜにした表情を浮かべるのだ。

自らがけして到達しえない場所へ飛び立った、小鳥を見つめるみ たいに。

ただ、このときの師匠は珍しく、憂いの色が薄かった。

十代の典位プライド就任というのがエルメロイ教室ですら滅多に見ない慶事だったからか、それとも現役生徒では最も古株の──時計塔においては師匠が一から育てたと言っても良いスヴィンだったからか、はたまたもっと別の理由かは分からない。

そのせいか、ドルイド・ストリートそばのアパートへ戻ってから、もう一度師匠は杯と酒さか壜びんを取り出したのだ。

そして、もっと珍しいことには、自分から昔の話を始めたのであった。

「当時は日本でのいざこざが終わったものの、まっすぐ時計塔に戻るには体裁が悪くてね。残ったわずかな金を遣って、あちこちを 巡っていたんだ。おおよそはインドからペルシャを辿って、マケド ニアへと向かう旅だったよ。それまで日本どころか、イギリスの外に出たこともなかった私には、見るもの聞くものすべてが珍しくてたまらなかった。……ああいや、日本にいる間はひたすら騒がしかったから、そもそもひとり旅自体が珍しかったのかもしれない」

ほんのりと首からこめかみにかけてのラインを赤らめながら、師 匠が語る。

紅潮した肌を、時々長い黒髪が覆うのを見て、ふと拙せつも質問していた。

「あの......誰もついてないなら、髪はどうなさったんですか? 毎日ご自分で?」

「はは、当時は短いものだったんだよ」

淡く、師匠が苦笑する。

銀の杯を、くるりと回す。

芳醇な香りが、自分の鼻孔にも届いた。遥か遠く、地中海の海の 色を思った。季節と太陽の位置によって、その海はサファイアのよ うに青くも、ワインのように紅くも変わるのであった。

「まあ、旅にはその方がよかった。暑い国が多かったしな」

うなずいて、師匠は目を細めた。

「最初はおっかなびっくりだったがね。実際鞄ごと盗まれたりして、涙目になったもんだ。向こうのギャングと争いになって、ろくに使い物にならない魔術で逃げ出さなきゃならなくなったりね。ああ、まがりなりにも時計塔でやっていけると思えるようになったのは、あのときやたらと死にそうな目にあったからかもな」

どんな風だったのだろう。

髪の短い師匠も、涙目になるところも、自分には想像できない。 だけど、この人が最初からこうだったかと言えば、それはきっと違 うと思うのだ。

どうしても、この人の在り方は幾多の懊おう悩のうや葛藤と無縁にならない。君主ロードの実績をいくら重ねても、拭え去りはしな

い何か。本来は屈辱や劣等感として、人の内側を貪るようなものな のに、そうしたものたちが師匠を支えてもいる。

まるで、土台を失敗したジェンガのようだ。

ふらふらといつでも倒れてしまいそうなのに、途中に入った邪魔な積み木がつっかえて奇跡的なバランスを保っている。

「うん、ギリシャも悪くなかった。あそこの気候はいつも乾いていてね。彼らの文化の多くやこの酒が海を偲ばせるのは、彼らがいつも恋いこがれていたからだろう。地中海が近かったからというだけじゃなくて、水という本質を愛していたから」

ソファに埋もれたまま、酒気がゆるゆると漂った。いつもなら葉 巻の煙のはずなのに、こんなちょっとした違いで、ひどく非日常な 感じがする。

「何の話だっけか。……ああ、ギリシャでのことか。私が初めて人にものを教えるなんてだいそれたことをしたのはあそこが初めてでね。いくつかゆかりの地を訪ねていく途中で、地元の管理人セカンドオーナーに挨拶なんてしたんだが、向こうじゃ時計塔出身の魔術師なんて珍しいからって、何人かの子息に教えることになってしまった。ふん、教室というにもささやかすぎる規模で、ろくなテキストもなかったがね」

「それで、時計塔の講師に?」

訊き返すと、師匠は小さくため息をついた。

「つい、そういうのも悪くないんじゃないかと思ったんだよ。実際、講師になるなんてずっと先のことだろうと考えていたのに、時計塔に戻ってからはいろいろ巻き込まれて、なし崩しで始めることになってしまったがね」

ぐい、とまた杯を傾ける。

香りからすると、それなりの強さのはずなのだけど、今日の師匠 は間をおかずに酒壜から継ぎ足した。

「……少し、飲み過ぎじゃないですか」

「レディ。私は酒に強くはないがこれぐらいは問題ないとも。だい

たい、さっきのパーティだと、ライネスの方が十倍は飲んでただろう」

「ライネスさんは少々強すぎると思いますので.....」

英国では、保護者同伴なら五歳からOKとはいえ、あの強さはただごとではない。本人の言によると、酒の強さは社交界でのたちまわりに重要なファクターだということだった。とはいえエルメロイ教室が勢ぞろいした中、賭けに乗ってきた連中をまとめてノックアウトして高笑いしていたのは……やっぱりあれも、少しは酔っていたのだろうか。

とりあえず、師匠からはそっと壜を取り上げた。

「む」

「……明日に差し支えると思いますので、その一杯で最後に」

「むう」

表情こそだだをこねる子供みたいだったが、あきらめたように杯 の方だけを確保する。

それから、ふと、こんなことを口にしたのだ。

「先代も、十代で典位プライドに達していたそうだ」

はっ、と自分は息を止めた。

先代というのが誰のことか、すぐに分かったからだ。

第四次聖杯戦争──願いを叶えるという聖杯を求めて、七人の魔術師と英霊が争いあった極東での事件。その中で、師匠とも対立していたという、先代のロード・エルメロイ。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

「先代が神童という名を不動にしたのが、そのことだった。当時の エルメロイ派にはアーチボルト以外にも有力派閥があったが、おし のけて源流刻印の移植を受けることとなったのは、結局のところ先 生の見ていた景色こそが魔術師にとっての理想だと、誰もが認めざ るを得なかったからだろう」 かつて、師匠は先代について、こんなことを口にした。

― 『あれほどの才が無為に喪うしなわれたことも、あの人の見ていた景色を結局私には一度も共有できなかったことも、ただただ悲しかった』

ふたりは、けして良好な仲ではなかったという。

多くの優秀な魔術師がそうであるように、先代も人格者とはほど遠かったそうだし、平々凡々たる生徒ししょうのことなど、そもそも眼中にも入ってなかった。まさかその生徒がロード・エルメロイII世を名乗ることになるなんて、どちらも欠片も考えなかったはずだ……と、ライネスは意地悪そうに笑っていた。

それでも。

先代の背中は、きっと瞼まぶたに残っているのだろう。魔術師としての理想が誰かと言われれば、最初に思い浮かべてしまうぐらい には。

「ああ……やっと……」

語尾が胡う乱ろんになっていき、酒気を帯びた吐息が部屋に溶けた。

「やっとひとり……私の生徒が……そちらに……」

そこで、言葉が途切れる。

がっくりとうなだれたまま、師匠はソファで眠り込んでいた。酒をこぼさずに、きちんと杯をテーブルに戻していたことは褒めてもいいのかもしれない。

Г......

自分は、しばらく動かなかった。

うなだれた横顔を見つめて、そっとその頰に触れた。

いつも睡眠時間を削っているためか、少しこけていた。生徒や教室のためだけでなく、いまだに己のための修練も欠かしていないのであった。血統も才能も足りないことを自覚しながら、この人はいまだに何ひとつ諦めていやしない。

「イッヒヒヒ! いまなら襲い放題だぜ! なんなら唇のひとつで も奪ってみるか!」

いつものようにくだらない軽口を振りまくアッドを、とりあえず 力ずくで黙らせる。

毛布をかけて、自分は近くの床に座り込んだ。寮に帰らなきゃいけないのだけど、今日ぐらいはいいだろうと、自分に言い訳する。今から帰ったら、朝にこの人の髪の毛を梳かす時間には、きっと起きられなくなるから。

自分の毛布を抱え込み、へばりついた葉巻臭さに閉口しつつ、傾いた師匠の顔を眺めた。

眉間に皺が寄っていたので、ついもう一度触れてしまった。

頑張って伸ばそうとしたけれど、深く刻まれた皺はいくらか浅くなるだけで、消えてくれはしなかった。

ひとつひとつ、こうやって、この人は重ねていくのだろう。痛みから逃げることもせず、劣等感から逃げることもできず、愚直なぐらいに、いいや愚かさのままに顔をあげて。その覚悟と悔しさの分だけ皺を深くしていって。

「......それでも、会いたいんですか?」

起きていたら言えないことを、言ってしまった。

前の事件の最後、あの聖遺物を手にしていた師匠の背中を思い出していた。あんな風に誰かを想って一生を費やしていくのは、どんな気持ちなのだろう。

(.....せめて)

速やかに襲ってきた眠気の中で、思う。

せめて、自分も助けになれたらいいのに。

あんな風に誰かを想う人の助けになれたなら、生まれて初めて自分を誇らしく思えるのではないかと、そんなことを考えてしまった。

#### 一多分。

予感があったのだ。

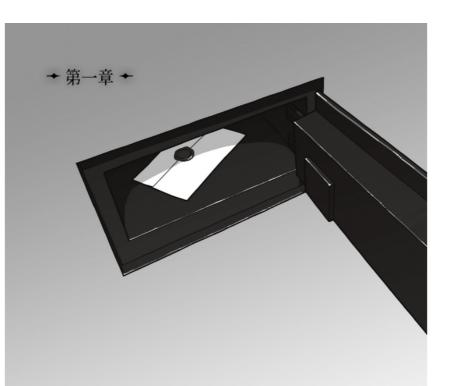
ロンドンに来てから、すでに四ヶ月と少しが経っていた。

師匠が自分を招いた理由。

時計塔からの人員が選出されたという、極東の第五次聖杯戦争。

いくつもの要素がもつれあいつつも、ひとつの未来に収束しようとしている。

きっとこれは、そのことにはっきりと気づいてしまった──あるいはついに気づかされてしまった──そんな事件だ。



冬が来た、と寮を出たときに思った。

もう十一月も末。実感するにはいささか遅かったかもしれないが、なにしろ故郷以外で初めてまともに過ごしたのが、この数ヶ月なのだ。行きつ戻りつしていた寒さが、ようやっとひとところに落ち着いたというか、石と煉瓦の街に腰を下ろした感じがあった。

ほう、と息を吐き出すと、白く曇る。

自然史博物館では特設のアイススケートリンクもつくられている そうで、少しだけ心を惹かれたが、さすがにそんな暇はない。寮管 理人のクリシュナに押しつけられた手袋を使って、自分は玄関の外 に出た。

アスファルトを踏み、バス停へと向かう。

名物の、赤一色に塗りたくられた二階建て車両。

最近導入された連結バスも、親子カンガルーみたいで可愛いと思うのだけど、古い車両にも趣がある。その分輸送力が足りないので、時間によっては結構な混み具合なのだけど、それももう慣れたものであった。

まだ、これだけ多くの人々が生きているという事実に違和感はあるけれども。

ほんの少しは、自分も変わったのかと思う。

以前なら、満員のバスというだけで忌避していたはずだ。

ロンドンについたばかりの頃など、そもそもおびただしい数の人間に耐えられず、早朝から現地に歩いていた。おかげで師匠のスケジュールに合わせることができず、何かと周囲に助けてもらってい

たのを思い出して、かあっと頰が熱くなってしまう。

あれだけ奔放なフラットにせよ、普段はこちらの姿を見かけただけで鼻息を荒くして威嚇してくるスヴィンにせよ、何くれとなく自分の世話を焼いてくれているのは間違いない。だから、もしも自分がわずかでも前向きになれてるなら、きっと彼らのおかげだろう。

郊外で、バスを降りる。

通りに向かって歩を進めると、つんと鼻につく、冷たい香りを嗅いだ。

それが、一般人には感じられない魔術師の結界のひとつだと、今の自分は知っている。視覚の幻惑はもちろんのこと、こうした嗅覚や聴覚、はては触覚や味覚にも訴えかける結界も世界には存在するのだと、師匠の講義で教わったことがあった。

同時に、結界を破るコツは瞑想メディテーションであると。

結界を構築するさまざまな要素に惑わされず、自分が今どこにいるのか、自分がどんな姿勢をとっているのかを正確に把握することが基本だと。その講義を思い出しながら呼吸を整え、ほとんど周囲を意識することなく、自分は通りを抜けていく。

やがて、すうと視界が開けた。

近代的なミラービルと古式ゆかしい建物が折り重なった、まるでパッチワークみたいな街並み。遠くプラハの黄金小路ほどの趣は遠いにせよ、確かに魔術の色を感じさせる静かな通りストリート。

つまるところは、現ノ代ー魔リ術ッ科ジが擁する学術都市──世に 言うエルメロイ教室の総本山、スラーであった。

(都市というには、ささやかすぎる気もするけど)

つい、唇をほころばせてしまう。

この四日ほどはロンドン本部で泊まり込みの集中講義だったので、なおさらにそんな気持ちが募った。向こうは押しも押されもせぬ時計塔の心臓部—三大貴族がひとつ、トランベリオが擁する第一科ミスティールを中心とした、現代魔術師の総本山なのだから、比較するほうが可哀想なのだが。

(......師匠、髪は梳かせたかな? 朝は寝坊しなかったかな?)

近づくと、途端に不安が胸をつく。

昔はひとりでもできたはずなのだが、とにかく面倒くさがるのも師匠であった。というか、他人に頼り始めると簡単に堕落して、できるものもできなくなるっぽい。案外ひとりでなんでもできるよう、放置しているのが内弟子として正しい態度なのかもしれない。

考えつつ、蔦つたの絡まる坂道から十字路を直進して、本部の学 術棟へと入る。

ここだけは妙に力の入ったホールから階段をあがり、廊下を曲 がったところで、自分は知り合いの姿を発見した。

「ライネスさん?」

「<del>---</del>おや、グレイ」

と、金髪に青い帽子をかぶった少女が振り返った。

しげしげとこちらを眺めて、楽しそうに赤い瞳を煌きらめかせ た。

「うんうん。今日もいいね。こんな季節だと、冬の国からやってき た妖精みたいだ」

「……そ、その」

返す言葉に困って、うつむいてしまう。

つい指を絡めてしまったこちらへの視線が、なおさら愉しそうな のは気のせいだろうか。

しばらくにやにやとした笑みを貼り付けていたが、不意にライネスがすうと窓の方を向いた。

「悪いが、少し待ってくれないか」

窓越しに見つめていたのは、講義中の師匠であった。

教室のすぐそばだったのだ。魔術の講義とはいえ、このあたりの 施設はおおよその大学と変わりない。実験の失敗や魔術師同士の抗 争に備えてやたらと頑丈なつくりになってるとか、一応中の下ほどの霊脈レイラインを引き込んでいるとかは聞いてるのだが、魔術師ならざる自分には時々肌がびりびりするぐらいである。

ちょうど、講義が終了したらしかった。

わいわいがやがやと群がったり、ひとりで講義のおさらいを始めたり、めいめいに好き勝手な生徒たち。一部は熱心に師匠に群がり、師匠も面倒くさそうな態度ながらいくつかの質問にきちんと答えた後、こちらの出口へと向かってきた。

「……ライネス」

と、その足が止まって、眉間の皺が深くなる。

いつものスーツに赤いネクタイ。きちんと髪も梳かしている。葉巻をくわえていないのは講義直後だからで、不機嫌そうな佇まいは紛れもなく、見慣れた師匠のそれだ。

なのに、

(.....あれ?)

なんとなく、自分は瞬きしてしまった。

違和感、だろうか。目の下にかすかなくまがあるだけじゃなく て、もっと深いところで何かが掛け違っているような。

「ご機嫌うるわしゅう兄上」

「今日は何の用だ」

「用がなければ来てはいけないのかな? 可憐な可憐な君の義妹いもうとだよ?」

「もちろん、用がなければ来て欲しくないに決まってるだろうが」

「これはひどい。傷ついて枕を濡らしたあげく、乙女の心の賠償金 を請求するぞ」

欠片も傷ついた風もなく、赤い瞳の少女が軽口を叩く。

ほかの生徒たちも、彼女が相手となると気後れするらしく、遠巻

きにひそひそと耳打ちしあっていた。なにしろライネス・エルメロイ・アーチゾルテがエルメロイ派の事実上のトップ―栄えあるロード・エルメロイII世の後ろ盾ということは知れ渡っている。彼女に睨まれても厚遇されても、時計塔の権力抗争パワーゲームへ組み込まれることとなり、人生が行き詰まるのは明白だろう。このへんの事情を綺麗に無視するのは、フラットとスヴィンを含むわずか数名きりであった。

それから、ライネスは少し小声になって、窓越しのひとりに顎を しゃくったのだ。

「それより、ひとつ気になったのだが……あれはどういうことかな。我が兄よ」

「ん? 先月迎え入れた子弟だが。カウレス・フォルヴェッジという」

ライネスが指した──あまり風采のあがらない、眼鏡をかけた少年 に視線を移す。

もっとも、おおよそは問題児ばかりのエルメロイ教室では、そう した風貌がかえって浮き上がって見えたりもする。

なにやら陶器の壺をいじって、あれこれ試行錯誤していた。あまり手際よくは見えないが、とにかく真摯に打ち込んでいることは明白だった。人によっては、そういう態度や横顔こそが好ましいと言うかもしれない。

しかし、

「そんなことじゃない」

と、ライネスはきっぱり否定した。

白い指がすうと細かく動いた。

「なぜ、その子弟とやらがあのアトラムが使っていた原始電池を 持ってるんだ、と訊いてるのだが?」

「あ.....」

と、思わず自分も眼を剝いた。

よくよく見れば、カウレスが触れている陶器の壺は、双貌塔イゼルマの事件で争っていた魔術師──アトラム・ガリアスタが使った原始電池に酷似しているではないか。

「何故もなにも」

と、師匠がかぶりを振る。

「フラットのやつが前の事件のときに術式を解析してたんだ。ついでに時計塔に問い合わせてみたら、特許を取った形跡はなかったから、私の方で理論化させてもらった。で、たまたま相性の良さそうな生徒がいたので試しに教えてみた。ほら、何もおかしなことはないだろう?」

「どこがだ!」

くぐもったライネスの叫びは、さすがの自分にも理解できた。

魔術師にとって、魔術の秘奥とは自らの命にも匹敵する代物だ。 特許を取っていないのはその技術が大したことないからではなく、 特許に出してしまえば魔術師間に伝わってしまうからである。つま りは少々の利権など問題にもならないほど、秘匿そのものが大切だ からだ。

......師匠がたいていの魔術師に歓迎されない理由を、改めて得心する。

確かに、師匠は、魔術師としては大したことがない。

たまたまフラットが術式を解析するなんて偶然がなければ、ひとりで模倣することはできなかっただろう。そもそも、そんな考えも起こさなかったかもしれない。だが、いくつかの条件が突破されれば、突然この師匠はいっそ冒ぼう瀆とく的なほどの成果を上げてしまう。

魔術の複製となれば……ある意味で、それは魔術の破壊にほかならない。

「時々、我が兄は大変君主ロードらしくなるな」

大きくため息をついて、ライネスが片目をつむる。

「だいたい、あの石油王、何が気に入ったのか、週に一度ほどは兄 のところに顔を出してるんだろうが 」

「ああ、どういう風向きか分からんが、しょっちゅうやってきては、今度はこんな呪体を買っただのこんな礼装を仕入れただの話してくるな。まあ、自慢はするがバラしても問題ないぐらいのラインのものばかりだが」

自分も、一度出くわして、あやうくアッドを取り出しかけたことがある。

はたして、あの中東の香りを漂わせた魔術師は、極めて横柄かつ 高慢な態度ながら「時に君の主人は好物とかあるのかな。できたら 賄賂になりそうなものがいいんだが」などと、ぬけぬけと聞いてき たのだった。ひょっとすると師匠を気に入ったついでに、自分も友 人の持ち物ぐらいに認識したのかもしれない。昔の貴族は同じ貴族 以外を人間と思わなかったとか聞いたことがあるし。

こほん、と師匠が言い訳めいた咳払いをする。

「一応、私も気にして、現ノ代**ー**魔リ術ッ科ジ以外では扱わせてないぞ」

「されてたまるか!」

二度目の叫びは、真摯な響きがこもっていた。

普段と立場が逆なだけになお切実で、こんな風に少女は続けたのである。

「……いつか後ろから刺されても、私は知らないからな」

ぶるり、と背筋が震えた。

すでに何度かの事件で失われた命と接していただけに、想像した 光景はあまりに鮮明で──つい、よけいな言葉が自分の口から転まろ び出た。

「そのときは、拙が、守りますから」

「おや」

ライネスと、師匠がこちらを振り向く。

それで、自分が何を言ったのか気づいて、かあっと頰と耳が熱くなった。指先までびりびりして、心臓を吐き出してしまいそうだった。

そんな自分に、ライネスが軽く肩をすくめる。

「内弟子だけが健気なことだ。兄も一割ぐらいは分けてもらえ」

「……感謝はしてる」

と、ぶっきらぼうな声が聞こえた。

到底視線を合わせることはできなかった。思い上がりにもほどが ある自分の発言を笑われなかっただけで、どれだけ助かったこと か。

「で、肝心の用なんだが―」

ライネスが持ちかけたとき、別の声があがったのだ。

「あっれれ! ライネスちゃん!」

(.....え?)

と、一瞬疑問符が頭をよぎった。

知る限り、ライネスのことをちゃん付けで呼ぶ生徒はフラットだけである。なのに、その声は女性のものだったからだ。

振り返ると、あまりに派手な星形の眼帯が視界に入った。

歳の頃は十六かそこら。染めたと思しいピンク色の髪で、服装はこれぞロリータというのだろうか。フリルのたっぷりついた真っ白なドレスを纏った姿は、魔術師というよりもアイドルか何かのように映った。

「おお、噂の内弟子ちゃんも! 初めて会ったねえ!」

と、眼帯少女は朗らかにこちらの手を握ってきた。

とにかく、圧倒的なテンションに押し切られて、かくかくとうなずいてしまう。

「……あ、あなた、は?」

「んっふふふ! 訊かれて語るもおこがましいが、近頃流行はやりの魔眼女子! エルメロイ教室に咲く花一輪、イヴェット・L レーマンちゃんとはあたしのことですよ!」

びしっ、と自分の眼帯あたりに、横ピースサインを掲げて見せる。

「もともと鉱石科キシュアなんですけど、今回やっと申請が認められて、エルメロイ教室にも通うことになりました! どうぞよろしく!」

「は……はい。グレイ、です。よろしく」

「ほほう、雰囲気とぴったりなお名前! 内弟子がいるとは聞いてたんだけど、いやあ先生ってばライネスちゃんといいあたしといいこの子といい、結構なハーレム展開じゃないの! 時計塔で抱かれたい男ナンバー1の座も近いですねこれは! あ、ちなみに現在は同率四位ですよ!」

「……誰だ、そんなアンケート取ってるのは」

ますます皺を深くして、師匠が唸るように呟く。

「おっとっと、こいつは女子の秘密です。たとえ先生にだっておいそれとは明かせませんね! あ、今度個人的なアバンチュールレッスンにつきあってくださるなら、その限りでもなかったりしますがいかが」

「すまないが、次の準備がある。ライネスも話は後で聞こう。──グレイ、行くぞ」

踵を返した師匠が、足早に廊下を進む。

取り残されたイヴェットたちに一礼して、あわてて自分もその後を追ったのだった。

師匠の私室へと入って、後ろ手に扉を閉めると、自分はぱちぱちと瞬きした。

アパートとは打って変わって整然とした部屋である。これまで何度も入っていて、手前には自分が靴磨きをする際の靴棚や用具の一式も置いてある。用具の方は、この前寮で斡旋してもらった掃除バイトの給金で、新しくしていた。

なのに、

(.....?)

やはり、何か違和感があったのだ。

数日前の記憶と照らし合わせると、それはちょっとした埃や、本 や携帯ゲーム機の位置の違いだった。師匠が紛失した資料を捜して 部屋中を漁るのは、アパートだと茶飯事なのだけど、このスラーの 私室では珍しい。

くわえて、本棚の書籍も一冊一冊きちんと仕舞いなおされてるのが、まるでそうした跡を取り繕ってるようで......

(.....ううん)

思考をひとまず閉じ込め、せめて空気を和ませようと口を開いた。

「パワフルな人でしたね」

さきほどのイヴェットを思い出して、微笑する。

フラットとはまた違った意味で、あまりに個性的で圧倒された。 もちろんエルメロイ教室は変わり者ぞろいなのだが、あれならかな り上位に食い込むのではと思う。

対して、師匠は小さく鼻を鳴らして、こう返したのである。

「それはパワフルだろうさ。なにしろ初対面の自己紹介で、メルアステアのスパイですからよろしくなんて、朗らかに言ってくるほどだ」

r——э! 」

衝撃で、息が詰まった。

時計塔にいくつかの派閥があるのは聞いていた。いわくバルトメロイ率いる貴族主義と、トランベリオ率いる民主主義。そして中立主義の筆頭として、その代名詞になっているのがメルアステア派ではなかったか。

「え、スパイって、それじゃ」

「ああ。要するに牽制だよ。こっちに隠すほどの情報はないが、向こうも一応のポーズを取っておく意味はある。そうでなくても、メルアステア派は現ノ代ー魔リ術ッ科ジとのパイプをつくっておきたいみたいだしな」

「.....あ<sub>ı</sub>

イゼルマでの事件を思い出す。

あの場にいたロード・バリュエレータ――三大貴族の一角をなす老女は、師匠を高く評価していた。それは同時に、一応貴族主義であるエルメロイを自分たちの派閥に引き抜けないかという工作でもあるのだと、ライネスが話していたものだった。

だったら、メルアステア派も同様に考えておかしくないのではないか。

「まあ、こちらを引き抜くほどのつもりはないだろう。よくもわる くも日和見主義のメルアステア派に、そこまでの度胸はない。だか ら、スパイだなんて自白して牽制してるのさ」

「……そういえば、イゼルマのときもスパイだって言ってた魔術師がいましたね」

「後でバレるより、さっさと自白して情報交換に徹するのは常套手 段のひとつだからな。この場合スパイというより外交官が近いか。 自白はイヴェットの独断かもしれんが、バレてもかまわないぐらい はロード・メルアステアも含んでるだろう。

なにしろ、彼女が籍を置いてる鉱石科キシュアはもともとエルメロイが運営していた科だ。先代が死んだいざこざの間にメルアステアが乗っ取って、追い落としたわけでね。当時はすぐこちらが消えると踏んでいたんだろうが、なんだかんだで生き延びてしまった以上、全面戦争にならない程度には懐柔したいはずだ」

「......そういう、ものですか」

自信なげに、うなずく。

正直、半分も理解できた気はしなかった。時計塔で繰り広げられる権謀術数は、自分の頭には複雑すぎる。確かに、現代魔術科になる以前、エルメロイ派は別のところを担当していたとは聞いていたが......

.....ただ、今はもっと気になることがあった。

可能な限り早く、スケジュールの整理などいつもの作業を終わらせてから、意を決して口を開く。

「……師匠、どうかしたんですか?」

「何がだね」

資料に目を通しながら、師匠が言った。

とりつくしまもない態度だったけど、今回だけは、もう一歩踏み 込む。

「どこか、焦ってらっしゃるような」

正直な気持ちを、口にした。

さきほどの、アトラムの原始電池だって、いつもの師匠ならもう少し穏やかにいなしていたように思う。あんな風にどこか吹っ切った態度は……ほんのわずかだけど、自分の知っている人と違っていた。

それこそ、勝手な思いこみかもしれないけれど。

「時計塔本部での講義も休まれてましたし、こちらでも時間を縮小されてるようです。何か気にかかることでもありましたか」

Г......

返事はなかった。

私室には外の音がほとんど届かず、沈黙は鼓膜に痛いほどだっ た。

「……ひょっとして、第五次聖杯戦争が、近いからですか」

「違う!」

びくり、と肩が震えた。かろうじて表情には出なかったと思う。 単に驚いた結果を顔に出すよりも早く、自分が固まってしまっただ けのことだ。

しばらく喉が熱くて言葉が出なくて、それでも必死に頭を下げた。

「すいません」

やっぱり、踏み込みすぎた。

もっと慎重であるべきなのに、つい浮かれてしまって。

この場なら、自分にもできることがあるかもしれないなんて、思 い上がって。

「じゃあ、陽が落ちてから戻ります」

踵を返して、ノブを握る。

そのとき、

「.....待ってくれ」

と、呼び止められたのだ。

「師匠……?」

Г.....

返事は、ない。

呼び止めておいてと怒るより、その静寂にこそ自分は戦慄した。

師匠はいつもと変わらない──変わらないのに、あまりにも沈鬱だった。

それは、自分が関わったいくつかの事件においてさえ、ついぞ見ることのなかった、まるで貌かおの肌を削いだかのような表情であったのだ。

「すまなかった。正直に言う」

と、師匠は口にした。

耳を塞ぎたい衝動にかられ、それをやっとのことで自分は堪えた。そんなにも重たいものは抱えられないという予感が胸をつき、それでもこの人の言葉だけは受け止めたいという欲求が釣り合った形。

天秤はどちらにも傾ききらぬまま、自分の耳にこんな声が届いた のだ。

「私にとって、最も大切なものを盗まれた」

鋭い刃に、心臓を貫かれた気分だった。

師匠の言葉がどのような事象を指しているか、否が応でも察して しまった。耳を塞いでいればよかったという自分が、悪魔のように 微笑んでいた。

「それ、は……」

「とある英霊の聖遺物だ」

何のことかなど、問うまでもなかった。

この人をこの人たらしめている、最も重要なパーツ。イゼルマの 事件において、弟子であるフラットやスヴィンを助けるため、賭け の対象として持ち出された品。

膝から頽くずおれてしまいそうだった。

だけど、それは自分なんかじゃなくて師匠の方だと思うことで、 やっと堪えられた。

「な、んで……」

師匠が立ち上がり、くるりと壁の方を向いた。

「普段はロンドンの時計塔本部で保管してるんだが、先月のイゼルマの一件から場所をこちらに移していた。ああ、例の聖杯戦争も近くなってきた以上、なるべく身近なところで管理しておきたくてな」

書籍の何冊かをどけて、本棚の裏を露出させてから、師匠は手の 平をあてて至極短い呪文を唱えた。

かちん、と音がした。

裏板ごと壁の一部が開いたその裏は、隠し金庫になっていた。

内弟子である自分も知らなかった仕掛けに、つい瞬きしてしま う。

「現ノ代-魔リ術ッ科ジ付きの隠し金庫だ。私の魔術で錠をかけたところで心許ないからな。……その分、強度は極めて高い。たとえほかの君主ロードであろうとも、相当な準備がなければ開けられまい」

手をあててもう一度呪文を唱え、さらに懐から取り出した小さな 鍵を差し込む。

物理的なそれと魔術的なそれの、双方の錠をかけていたのだろう。

はたして、内側には一枚の封筒が置かれていた。

「……だが、数日前確認した際には聖遺物はなく、代わりにこの封 筒が置かれていた」

無言で、師匠が差し出す。

受け取ると、どうやら何かの招待状らしかった。

自分が一見するだけでも、それが古式の礼にかなったものである ことは推察できた。

薄く梳いた水晶のごとき紙片に、真紅の封ふう蠟ろうが捺おされている。車輪と眼球をモチーフにした印章は、以前師匠に教えられた天使の姿を想起させた。ただ、この場合は天使に関連しているのではなく、おそらく歴史ある魔術の象徴が、自然と似てくるというだけのことだろう。

内側に入った書状もそのままで、読んでいいものかどうか視線で 窺うと、師匠は小さくうなずいた。

おおよそは、思ったとおりの内容だった。

自分たちの宴に招待するので万障を繰り合わせて出席いただきたいといったことが、流れるような達筆の筆記体で書かれており、最後にこんな署名が記されていたのだ。

『魔眼蒐集列車・支配人代行より』

「これ、は……」

初めて見る名前の不吉さに息を吞むと、師匠が低く囁いた。

「一魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン。その名の通り、ありとあらゆる魔眼を蒐集して、ヨーロッパの森を走り続けるとかいう代物でな。年に一度、これぞという魔眼をお披露目して、オークションを行うんだ」

「オークション?」

その言葉の馴染まなさに、つい眉をひそめてしまう。

「あの……オークションというのはつまり、魔眼をコレクションしたい方というのはそんなにいらっしゃるんですか?」

「もちろん、純粋な研究対象として求める向きもあるがね。あの魔 眼蒐集列車レール・ツェッペリンにはもっと特別な意味がある」 ゆっくりと、師匠が椅子に身を埋めた。

根深い疲労が、いまにも溢れかえってしまいそうだった。

「特別なって、どういうことです?」

「移植だよ」

と、師匠は己の瞳を指して見せた。

それでも、頭の悪い自分にはすぐに理解できなかった。

何度か瞬きして、数秒も遅れてからやっと、

「.....移植?!」

と、声が漏れたのだ。

「ああ、文字通りの移植だ。元来魔眼というのは本人に根付いているもので、摘出するだけでも至難の業だが、あの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンはその例外だ。科学的な免疫機構やさまざまな問題を無視して、摘出どころか、魔眼の移植なんて離れ業を確実にやってのける」

Г......

茫然としたまま、つい沈黙してしまった。

一体それは、どれほどの異常か。

確か、魔眼とは魔術師にとって垂すい涎ぜんの的だ。不完全でもてあましてるライネスでさえ、魔眼を持つというだけで、師匠がひどく羨ましそうにしていたのを覚えている。それはつまるところ、魔術回路と同じく――先天的な才能だからこそではないのか。

師匠も、大きく息をついた。

懐のケースから葉巻を取り出し、机に置いてあったシガーカッターで、先端を切り落とす。至極ゆっくりと、マッチの火を擦り付けるようにして炙り、静かに吸い込む。

重く、濃い煙が周囲を漂った。

「……ひとつ、講義をしておこう」

低く、囁いたのだ。

香りで気持ちを切り替えたのか、その声はいつもの落ち着きを取り戻していた。

あるいは師匠にとっての葉巻は、ある種の仮面を兼ねているのか もしれない。その香りと煙とで、本来の自分を覆い隠すために。

「見ることは、人間の歴史で最初の魔術だ。それは、人間の五感でも、視覚が最も多くの情報を処理するからだ。ゆえに、多くの土地において邪視イーヴル・アイは怖れられ、同時に自然界にあるいくつかの神秘的な現象も瞳として解釈された」

「自然界の現象、ですか?」

「たとえば、太陽と月だ」

うなずいて、師匠が天井を指さす。

「いずれも天の瞳として言い伝えられることが多い。エジプトにおけるホルスの目は極めて有名なシンボルだが、その右目は太陽、左目は月に譬たとえられた。人々はこれらの天の瞳によって常に見張られており、罪を犯せば罰せられると信じていたんだ。太陽神が司法の性質を持つことが多いのはこのためだ。実際、太陽は大いなる恵みをもたらすのと同時に、旱ひでりなどの災いをもたらしてきたわけだからな。

後に、これらはキリスト教の三位一体と結びつき、全能なる神の 瞳─-いわゆるプロビデンスの目にもつながっていく。ふん、この過程で、いわゆるフリーメーソンの陰謀論なんかもくっついてしまったわけだがね」

師匠の言葉が、辺縁のオカルト事情も拾っていくことに、おかしなことだけど、少しリラックスしてしまった。この人が講師たらんとすることが、自分にとっては日常のひとつに組み込まれてしまっているようだった。

「こうした自然現象では、ほかにも台風の目なんかが一般的だろう。ああ、台風の目を囲む雲をEyewallと呼んだりするのは君も知ってるな」

「あ.....はい」

と、自分もうなずいた。

「つまり、嵐とはそれ自体がひとつの瞳なんだ。これを受けて、風や嵐にちなんだ神格は隻眼であることが多い。ケルト神話はフォモール族の王であるバロールや、北欧神話のオーディンなんかが代表例だな」

どちらも、さすがに名前ぐらいは知っている。

邪眼の王バロールに、隻眼の魔術神オーディン。かたや一瞥で軍隊すら壊滅させる死の瞳を持ち、かたや片目を代償として万能の知識を得たとされる神霊であった。

「さらに、大地にも瞳がある」

と、師匠が床を指さした。

「大地に、瞳?」

「火山の火口だよ。夜の闇に赤く光る瞳は、邪視のイメージと強く重なった。嵐の神ほどの数はないが、大地にまつわる女神にはこうした象徴性を付与されることがある。ギリシャ神話のゴルゴン―とりわけメドゥーサなんかはこの例だろう」

煙を吐き出す。

部屋にたゆたう灰色の煙に、ふと火山のそれを思った。もくもくと吐き出される火山ガスに硫黄の異臭、その中で赤々と光る溶岩を、古い時代の人々は大地の魔眼と信じて、怖れたのだろうか。

天と嵐と大地。

それぞれに、それぞれの魔眼。

だとすれば、確かに自分たちはずっと見張られて生きてきたのだ。

「あるいは、現代科学が発見したブラックホールも、こうした自然 現象の瞳と言えるだろうな。古代の語り部が存在を知っていたわけ ではなかろうが、概念的に言えばインド神話のシヴァの化身、大マ いハなーる力虚ー無ラとしての側面はブラックホールに極めて近しい。欧州原子核研究機構CERNでは、同じシヴァの化身であるナタラージャを飾っているぐらいでね。いわく素粒子の振る舞いをナタラージャの踊りとかけているそうだが、これはつまり、同じシヴァの側面にマクロな魔眼としてのブラックホールと、その内側におけるミクロな魔力の振る舞いを見出しているわけだ」

「は、はあ……」

内容の半分も分からなかったが、途轍もなく壮大な話だということだけは理解できた。

遠く、宙そらの瞳。

自分たちの手など届かない遥か彼方、そこにも観測する者はいて。魔術も科学も少しでもその有り様に近づこうとしているのだと。

「……さて、ここまで述べた上で、時計塔で言う魔眼にはいくつかのランクがある。ごく簡易なものであれば、制作できる造形師だって存在している。もちろんそれだって高価だし、確実に成功するわけでもないが」

椅子にもたれかかったまま、師匠は言葉を続ける。

「だが、真正の魔眼──生来の魔眼でもとりわけ強大なノウブルカラーを確実に移植してのける場所は、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンをおいてほかにない。その希少さと移植手術の成功率を鑑みれば、あのバルトメロイやトランベリオですら二の足を踏むぐらいだからな。ああ、今の話の後なら分かるだろう。強大な魔眼を移植するというのは、ある意味で嵐やマグマを切り離し、他人の身体に封じ込めるようなものだ」

ずいぶん遠回りに、話が戻ってきた。

だけどそれで、魔眼の移植がどういう異常なのか、やっと身にしみた。単に離れ業というよりもずっと恐ろしい、冷たい畏れがぞくぞくと身体の芯から広がっていくかのようであった。

「もっとも、一度だけ、そのオークションが台無しにされたことが あるというがな。なんでも、あの蒼あお崎ざき橙とう子こと使い魔 にやられたとか。それ以来、北欧に限らず、ヨーロッパのあちこち に出没するようになったそうだ」

突然出てきた名前に、自分も面食らった。

双貌塔イゼルマで出会った──ある意味で犯人ともつながっていた ──あまりにも異端過ぎる、冠位グランドの魔術師。

「……あの人、なら」

「確かにな」

師匠も、思い出したくなさそうに顔をしかめた。

「逆にいえば、あの冠位グランドの魔術師でもなければ手に負えない場所だ。時計塔の魔術師ですら、この招待状を実際に見たものが何人いるか。……そんなものを、どうしてあれの代わりに置いていったのか」

ぎり、と歯の軋む音が聞こえた。

奥歯が割れそうなほどに不吉な、強い意志のこもった音だった。 瞳の奥に、これほどの熱情がどこに眠っていたのかと思うほど、熾 烈な炎が燃えていた。

「だが、行くしかあるまい。今は、ほかに打てる手がない」

決意を押し固めるかのように、言う。

「グレイ」

短く。

師匠は─ロード・エルメロイII世は、自分に向かってこう依頼したのだ。

「私と、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンへ行ってもらえるか」

## 「―ん、なるほど」

チョコをつまみながら、ライネスが小さくうなずいた。

品のよい間接光の下、美しい金髪が揺れる。

あの翌日、彼女が贔屓にしている菓子店の個室だった。

もともとお店の中でも食べられるようイートインを採用してる菓子店だが、常連にだけは特別な個室を貸し出しているらしい。師匠のことについて相談したいと持ちかけたら、彼女からこの場所を指定してきたのだった。やたらと豪奢な調度や銀食器は、正直自分には落ち着かないのだが、そうも言っていられない。

ひとまず、盗まれたのが聖遺物であるという核心は避けて、師匠からの依頼を話したところだった。

だが、そのことにはすぐ触れず、ライネスはテーブルのケーキへ フォークを伸ばした。

並べられた菓子のいずれもが、煌めく宝石みたいだった。優美な花や水晶を模した砂糖細工。艶めくイチゴと狐色に焼かれたメレンゲ、はたまた七重に色分けされたムースの層。甘いクリームの香りもあいまって、人によっては今この場所こそが地上の天国だと断言するかもしれない。



「うん。なんといってもジェノワーズがしっとりと麗しい。生地がしっかりしてるから、瑞々しい桃のコンフィチュールを存分に味わえる。紅茶にわざわざ香り華やかなヌワラエリヤを出しておいて、かつ互いに邪魔させない手際も憎らしいところだな」

紅茶を飲んだ後、しばしライネスはご満悦そうに瞼を閉じてから、こちらにもそっと水を向ける。

「グレイは食べないのかな?」

「も、もちろん、いただきます」

あわてて近い位置にあった、比較的平凡そうな焼き菓子を手に取り、口に放り込む。

ر د—\_\_\_

前にチョコを貰ったときもそうだったが、あまりの美味で舌が びっくりしてしまう。

これだけ緊張してれば味が分からなくなりそうなのに、それでも訴えかけてくる繊細な甘味と口どけの柔らかさ。舌の上でふわりと溶ける感触なんてまるで極上の絹シルクがほどけるかのようで、ぎりぎりまで甘いのに、けして甘さに溺れきらないほどの瀬戸際を見極められている。

「.....は、あ」

「どうかした?」

「い……いえ。その、美味しくて。というか、美味しすぎて」

つい、ぶるぶると身体が震えてしまった。

あまりに美味しいとじたばたしたくなるのだと、初めて知った。 今にもタップを踏みそうな足を止めるだけで精一杯だ。つい二、三 回爪先が床を打ってしまって、赤らんだこちらの顔を、にやにやと ライネスが見つめた。

「君のその素直さは美点だね。ご馳走する方が愉しくなってしま う。いや本当は、もう少し屈辱の涙とかこぼしてくれた方が私好み なんだが。ほら、女の子の涙とか定番だけど、何度味わってもいい もんだろう?」

くくつ、と少女が喉を鳴らす。

この人のこういう言い方は、いかにも時計塔の住人だと思わされる。とはいえ嫌な気分にはならなかった。そんな自分が、少しだけ不思議ではあるのだけど。

もう一口、もう一口と続きをつまむ手がとまらず、合間にジャム付きのスコーンや紅茶も飲んでしまって……ほうとため息をついたところで、ライネスが切り出した。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは、時計塔でもほとんどの魔 術師は噂しか聞いたことのない存在だ」

「.....はい,

小さく、うなずく。

美味に酔い痴れていたとはいえ、その名前は緊張を取り戻すのに 十分すぎた。

「兄と君が招かれたのだとしたら、ひとつ忠告しておこう。招待客 には二種類いるはずだから、その違いには気を配った方がいい」

「二種類?」

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに招待された中には、買い主 と売り主がいるはずだからさ」

「あー」

オークションということは、売り手もいるはずだという当然のことに、やっと自分は気がついた。

「魔眼の移植をするということは、つまり摘出もするということだ。自分の魔眼を扱いきれない人間にとって、ある意味で魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは救いの主でもある。何分魔眼という器官は複雑すぎて、よほどの魔術師でも十全には使いこなせなかったりするしね」

自分の瞼に触れて、ライネスが言う。

彼女もまた、魔眼の持ち主だからだ。

「ちょっと失礼」

手元の鞄から目薬を取り出し、眼球に雫を落としてから、少女は目元を押さえた。

刺激が強いのか、唇までへの字にした彼女に、ふと訊いてみる。

「ライネスさんも、その目が余計だと思ったことがあるんですか」

「いいや? さして取り柄のない私にしてみれば、これは貴重な武器だからね。少々扱いづらくても手放す気はないさ。あの兄の羨ましそうな顔を見るのにも使えるしね」

くつくつと、少女が肩を揺らした。

もう二、三度瞬きしてから、青みを取り戻した瞳で口を開く。

「──後、もうひとりをどうするかだね」

「もうひとり?」

「ああ。あそこの招待状はふたりだけ同伴者が許されたはずだ。君 と、もうひとり。兄は誰を連れていくつもりだろうね」

「……やはり、エルメロイ教室の生徒になるでしょうか」

ちなみに、フラットは実家の方で何か問題が起こったらしく、急遽モナコへと戻っている。また、スヴィンは昇格したてで、全体基礎科ミスティールでのさまざまな儀式を受けねばならないらしい。もちろん、エルメロイ教室で師匠に心酔している人物はほかにもいるが、やはり最初に思いつくのはあのふたりであった。

「ふむ。あのふたりに続くとなると、おそらくペンテル姉妹かローランド・ペルジンスキーあたりになってくるだろうが……そもそも、あの兄は自分の事情に生徒たちを関わらせたがらないしね」

物憂げに新たなチョコを口にしながら、ライネスが名前を口にする。

その三人は、自分も覚えていた。

師匠の高弟で、時計塔でも名を馳せている魔術師たちだ。とりわけペンテル姉妹は、エキセントリックな性格と双子ならではの絶妙な魔力同調がエルメロイ教室でも目立っていて──ついでに師匠を困らせていたのが、印象に残っている。

「それは……師匠が決めることですから」

「それはそうか。で、まだ心配事があるのかな?」

「.....あの」

それ以上を言いかねて、口ごもってしまった。

しかし、今度はライネスから切り出したのである。

「どうせ君がさきほどから伏せてる札は、件くだんの聖遺物だろう」

r——э! 」

「やれやれ図星か。さしずめ、さっきの招待状は聖遺物が盗まれた ところにでも置かれていたんじゃないのかね」

「……どう、して」

こちらも、黙っていた自分の配慮は無意味で、頰が熱くなる。穴 を掘ってうずくまってしまいたいほどだ。

対するライネスはあくまで落ち着き払った様子で、紅茶を飲んで、言葉を付け加える。

「私だって、あの兄の態度を見れば、なにかあったなってぐらいは分かる。なにしろここ七年ほどは一蓮托生なんだから、嫌でも相手の内情には詳しくなってくるさ。まして、あの兄が私にも秘密で眼を血走らせてるとなると、ちょっとほかに思いつかない」

簡単な推理だよとでも言いたげに、肩をすくめる。

それから、もうひとつ付け加えた。

「……君が悩んでいるのは、たとえばその聖遺物をメルアステア派

のスパイが盗んだか、じゃないかな」

「ライネスさん」

思わず名を呼ぶと、ふんとライネスは鼻を鳴らして腕組みした。

「イヴェットだろ。あれがメルアステア派のスパイですからなんて 告白したとき、私もすぐそばにいたんだよ」

言われてみれば、メルアステア派の目的が師匠の言うとおりの牽制なら、君主ロードの後ろ盾であるライネスにも話しておかなければ意味がないわけだ。打ち明けるかどうか悩んでいた自分が馬鹿らしくなる。

「まあ、彼女のレーマン家も含めて一筋縄ではいかない相手だが ね。今回は除外していいんじゃないかと思うよ」

「そう、なんですか」

「例の聖遺物、私も一度だけ目にしたことがあるのさ。学術的には ともかく、それこそ聖杯戦争にでも参加するつもりでなければ、魔 術師には意味の薄い代物だ。前のジークフリートの聖遺物みたい に、それ自体が竜の血を浴びた第一級品の呪体というわけじゃない んだからな」

英霊を呼び出すための触媒は、その多くが生前にゆかりのある品だという。

ゆかりの品が、そのまま魔術的に強大な呪体だという場合もあるが、単に古いだけの遺品でもおかしくない。師匠がしまっていた聖遺物は、どうやら後者にあたるらしかった。

「それに、メルアステア派がそこまでして兄に喧嘩を売る理由はないよ。もともと、三つの派閥では最も力が弱いんだ。下手にバランスを崩したら不利なのはあそこだ」

「.....なるほど」

ほっ、と脱力する。手がかりを失ったのは残念だが、師匠の生徒 にそんな裏切り者がいるとは思いたくなかったので、どちらかとい えば安堵に近かった。 そんな自分に目を細めて、ふとライネスが言葉を続けた。

「君は、あまり時計塔向きじゃないな」

「え?」

「なんでもないよ。……是非そのままの君であってほしいというだけだ。日頃胃を痛めている我が兄の慰めになるだろうからね。うん、愉しみというのは、相手を生かさず殺さず扱うのが肝だ。ここで頓死されても困る。お、この新作もいけるな。チーズにレモンの酸味をきかせてるのか」

極めて物騒なことを言いながら、少女は愉しげにフォークを動か している。

「あの、ライネスさんも師匠に用事があったんですよね?」

「ああ。だけど、私の用事も似たようなものだったからね……そうか。兄上がね」

しみじみと呟いて、ライネスはケーキを口にした。

片目をつむっているのは、さきほどのこちらの話を反芻しているらしかった。

「ひとつ謎解きをしておくとね。こちらの用事は、調律師からだったんだ」

「調律師?」

「ああ。あの兄の数少ない、古い友人さ。今となっては兄を名前で呼ぶのは、あれぐらいだし」

「え?」

師匠の名前。

ロード・エルメロイII世というあだ名ではなく、本来のそれ。

しかし、その名前で呼ぶことを、師匠は誰にも許していないの に。

「あれだって勝手に呼んでるだけだがね。いや、意固地に呼び方を

変えないと言うべきか。まあ、この前話したところ、どうも様子がおかしいぞとご注進をいただいたのさ。いわく、眉間の皺がずれてるせいで、こっちもバイオリンの調子がおかしくなるとかなんとかね。さすが、あの兄が極東に旅立つ際、金を用立てただけはあるというかなんというか」

「そんな人が……」

「この前の件で、創造科バリュエに顔を出したときつかまってね。まったく自分で言えばよかろうに、これだから男どもは度し難い」

そこも詳しく訊きたかったが、今は別のことがどうしても気に掛かっていた。

「どんな、英霊だったんでしょうか」

「ん?」

片眉をあげたライネスに、思い切って尋ねたのだ。

「ずっと聞いてなかったですが……第四次聖杯戦争で、師匠ととも にいた英霊がどんな方か、ライネスさんはご存じなんですか」

その問いに、あっけなく、一言で少女は答えた。

「イスカンダル」

またの名を、アレキサンダー大王。

その英雄は、当然自分も知っていた。現代に至るまでの欧州の基軸を打ち立てたカール大帝シャルルマーニュとならび、最も有名な英雄と言ってもいいだろう。

その出身はマケドニアから始まる。

大学者アリストテレスより薫陶を受けたイスカンダルは、二十歳にして王位を受け継ぐと、亡き父の遺志に従ってペルシャ東征へと打って出た。生来の凄まじいカリスマ性と軍略によって十万の軍勢

を率いたダレイオス三世を破り、ついには和睦の申し出を引き出し たのだが、なお彼は止まらなかった。

はたして、そこから先の旅路は夢のようだ。

砂漠の国エジプトを征服し、ファラオと認められて、さらに東 へ。

仇敵ダレイオス三世と再び激突し、バビロンもペルセポリスも略奪して、さらに東へ。

幾多の兵士を、王を、軍神を、ついにはマハラジャさえも従え て、取り憑かれたようにただひたすら東へ東へと。

何を、見ようとしたのか。

何を、得ようとしたのか。

世界制覇という言葉に最も近づいた大王の思惑など、自分には想像もつかない。

聖杯戦争という儀式が、人類史の幾多の英雄を呼び出すものとは 聞いていたが、師匠とタッグを組んだのがそんな相手だったとは。

## (あ.....)

ふと、思った。

師匠の秘蔵の酒が、マケドニアに由来していたのはそういうことなのだろうかと。

「いやまったく、おとぎ話にもほどがある。かの聖杯戦争は七騎の 英霊を喚よびだして戦わせ、勝ち残ったマスターと英霊にはなんで も願いの叶う聖杯が与えられるとかいう馬鹿げた儀式だったそうだ が、よもやイスカンダルとはね」

呆れたように、ライネスが言う。

「とにかく、居並ぶ英霊たちの中でも、その力は隔絶していたそうだ。……なんでも、彼の宝具はふたつあったらしくてね。ひとつは、かのゴルディオンの神殿に奉納されていたという戦車・神威の車輪ゴルディアス・ホイール。もしくはその戦車を使った蹂じゅう

躙りん走法かな? 」

時計塔の調査でも、英霊のステータスそのものを見たわけじゃないからね、と少女が注釈する。おそらく、師匠を君主ロードに据えるにあたって、彼女はその手のデータを検分し尽くしたのだろう。

「そして、もうひとつの宝具こそが凄まじい。かのイスカンダルは、生前の部下たちを召喚することができたらしくてね。ああ、一度は本当に世界を征服しかかったという伝説の軍隊そのものさ。先代のロード・エルメロイの遺体と一緒に、時計塔へ提出された資料だと、固有結界の中に生み出された兵士は数万人を超えたとか」

正直、想像を絶していた。

自分の所持するアッドも―かつてアーサー王が振るっていたという宝具・最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドを封印している。その威力たるや、現代の魔術師が扱う神秘とは比較にもならない。未熟そのものな自分でも、あの剝ア離ド城ラを一撃で半壊させたほどだ。

だが、いくら強大な英霊や宝具でも、かほどの数の暴力を覆せるのだろうか。

「......それでも、師匠は、第四次聖杯戦争で勝ち残ったわけじゃないですよね」

「第四次聖杯戦争には、もっと上の化け物がいたということだろう さ。まったくとんでもない世界だよ。仮にも君主ロードという地位 にありながら参戦した先代もそうだが、二回も飛び込もうなんてい う我が兄の気持ちはさっぱり分からないね」

こちらの考えを読み取ったのか、先回りしてライネスは苦笑した。

目の前のケーキも食べ終わっており、最後に澄んだ色の紅茶を飲み干してから、彼女は立ち上がった。

「君らが、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに行ってる間、こちらはこちらで件の聖遺物を捜しておこう。それと、こちらを持ちたまえ」

「これは?」

つい、瞬きしてしまう。

少女の白い手がテーブルに置いたのは、一枚の黒いクレジットカードと携帯電話だったのだ。

「聖遺物を取り返すための手段だとしても、オークションに参加するなら、実弾がいるだろう? どうせ、あの兄はギリギリまで受け取らないだろうからな。私に見つからないよう、あちこち金の無心をしてたみたいだが、ご苦労なことだよ。ここ最近の活躍ぶりもあって、お人好しなノーリッジ卿なんかはいくらか出したみたいだけどな」

「ライネスさん……!」

声が上擦ってしまった。

対する少女は顎もとに曲げた人差し指をあてて、悪戯っぽく囁いた。

「くくく。なにせ徐々に返済されつつある借金を、一気に増額する チャンスなのでね。できる限り、我が兄がせっぱ詰まったところで 渡してくれたまえ。ああ、携帯電話の方は君へのサービスだから好 きに使ってほしい。少なくとも、オークションの前後は外部とも通 信できるようにしてるはずだよ」

頼もしいのか、邪悪なのか。

魔術薬によって蒼く変じた瞳を輝かせ、ライネス・エルメロイ・ アーチゾルテは優美に微笑したのであった。





その夜は、ひどく霧が濃かった。

少し欠けた満月も、わずかな銀光を雲に滲ませているのみ。とっぷりと更けた今は人の行き交う気配もなく、凍りつくような静寂が 闇を侵していた。

あれから三日後。

招待状で指定された場所は、古い郊外の駅だった。

何度かの路線変更に取り残され、とっくに駅としての機能は放棄されている。当然、構内も閉鎖されているのだが、まだ『駅』としてのカタチだけは保っていた。もちろん入り口は封鎖されていたが、師匠は気にせず柵を乗り越え、構内へと踏み込んでいく。

ただ、自分は立ち止まってしまった。

単なる廃駅の入り口が、しかし今日に限ってはまるで煉れん獄ごくにでも続くような──迂闊に踏み込むものを嚙み砕かんとする、巨大な怪物の顎に見えた。

「師匠」

「大丈夫だ」

短く、師匠が言った。

その言葉に励まされ、自分も柵を乗り越える。

「あの」

もうひとり、背後から声があがったのだ。

たちまち、それは夜の闇より盛り上がって、眼鏡をかけた少年の 形を取った。 「ありがとうございます! 俺を連れてきてくださって!」

カウレス・フォルヴェッジ。

先に、師匠からアトラムの原始電池を教えられていた生徒だ。確か十八歳と聞いたのだが、顔にそばかすがあるせいか、意外と子供っぽく映る。

「連れてくるも何も、押しかけてきたのはお前だろう」

師匠が冷ややかに、息をついた。

すると、指摘されたカウレスはうなだれて、肩を落としたのだ。

「……立ち聞きしたのは、申し訳なかったです」

「責めてはいない。もともとはフラットがやった仕掛けなんだしな」

あの原始電池は、フラットが解析した術式を師匠が協力して再現したものなのだが、その際、かの少年は師匠に対する盗聴魔術を仕込んでいたらしい。ただし、仕掛けた後にその術式を忘れて、たまたま発見したカウレスが自分と師匠の会話を聞いてしまったとのことだった。

そこまでやっておいて、本人は忘却したあげくに里帰りしてしまっているあたり、いかにも『天才馬鹿』と称されるあの少年らしいと評するべきかどうか。

「近くにいようがいなかろうが、あいつはトラブルを振りまいてい くな」

忌々しげに、眉間に皺を寄せる。

そんなところだけが、いつもの師匠らしかった。ごくごく小さく スラングで毒づいたような気もしたが、こちらは聞かなかったこと にしておく。

「すいません。それでも、俺、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン というのはどうしても聞き逃せなくて」

申し訳なさそうに、カウレスが言う。

昨今の自分の周囲では、謝罪は胸を張ってたり、欠片も悪びれて なかったりだったので、ある意味これも新鮮な反応ではあった。

だから、かもしれない。

「……どうして、そんなに?」

つい、自分から訊いてしまった。

すると、カウレスは困ったように頰を搔いたのだ。

「俺は、ずっと自分は魔術師になんかなれないって思ってましたか ら」

「魔術師に?」

「姉の方が優秀すぎたんですよ。俺はずっとスペアだったんです。 身体に問題を抱えていた姉が、万が一倒れた場合のスペア」

自嘲気味な台詞だった。

なのに、弟の瞳に宿っているのは、言葉面に沿った悔しさと──おおよそ同量の、誇りに似た何かであった。

「でも、姉は結局家を継がなかった。時計塔に行っても必ず成功するって言われてたのに、その全部を断って出奔して……結局のところ、俺が魔術刻印を受け継ぐことになりました。はは、そうはいっても、姉はともかく、フォルヴェッジ家なんてもともと衰退一途の家系なんですが」

苦笑して、肩をすぼめる。

「だから、俺は少しでも学べるものがあるなら学んでみたい。魔眼の移植なんて金はないけれど、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンなんてものが本当にあるなら、この目で見てみたいんです」

はっきりと、少年は言い切った。

ただ学べるものがそこにあるのだから、学びたいのだと。

(.....意外と、魔術師らしい?)

そんな風にも、思った。

師匠がこの危うい局面で同道を断らなかったのも、溢れる熱意ゆえだろう。いや、ひょっとすると、その下敷きとなった劣等感こそが、師匠にとっては見捨てがたい要素だったのかもしれない。

......自分も、そうした部分には共感してしまうから。

「自己紹介は終わったか」

師匠が声をかける。

いつのまにか葉巻をだして、煙をくゆらせていたのは、こちらの会話が終わるのを待っていてくれたらしい。この人の妙に律儀なところは、本当にわかりにくい。

「そういえば」

と、自分は水を向けた。

「どうして、師匠も眼鏡なんです?」

「こっちは魔眼殺しだよ。急遽用意したので、ずいぶん足下を見られたがね」

くいと眼鏡の弦を持ち上げて、師匠が不機嫌そうに言う。確か、 魔眼殺しとは、魔眼用の対策礼装だったろうか。

「さすがに魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに何の用意もしないわけにはいくまい。一睨みで心臓を止められるならまだマシだが、ろくでもない『強制』や『契約』を結ばされたら、泣くに泣けないからな」

いくつかの魔眼は、儀式などの過程や段階をすっとばして、その 結果だけを対象に押しつけるらしい。師匠の眼鏡は、そうした魔術 への対策のようだ。

何にしても、眼鏡をかけた師匠というのは珍しくて、ついしげしげと見つめてしまった。

もっとも、師匠の方は足早に内側に踏み込んでしまったのだけど。

はたして、薄暗いホームには、散り散りにいくつかの人影が落ち

ていた。

(同じ.....招待客たち?)

どういう仕掛けか、廃棄されたはずの瓦が斯す灯とうがひとつ、 ふたつ光を投げかけている。

朧おぼろな光を覆うように薄く霧がたちこめ、整然と石造りの アーチが並ぶ中、大小の人影たちはめいめいに佇んでいた。その風 情自体が、まるで百年も昔の光景のようだった。当時の人々は膨大 な煙を吐きあげる機関車の姿に、一体何を思っていただろう。

そして、人影のひとつは、こちらを見つけて歩み寄ってきたのである。

「おひさしぶりです。ロード・エルメロイII世」

「……あなた、は……っ」

思わず、自分は息を止めた。

色鮮やかな花々を描かれた民族衣装──確か、友禅の振り袖という その服を、見まがうはずもない。眼鏡をかけた美貌も嫣えん然ぜん と、女は穏やかに微笑していた。

「.....なんとなく、お会いする気はしてましたが」

と、師匠が前置きする。

「あなたが来られるということは、法政科が魔眼蒐集列車レール・ ツェッペリンのオークションに一枚嚙むということですか」

「法政科……っ」

後ろで、カウレスも硬直する気配が伝わった。

無理もない。時計塔の十二の研究方針、十二科のいずれにも属さない―その外側から魔術協会を監視する第一原則執行局・法政科。 等しく神秘を追い求める魔術師たちと異なり、神秘を管理・統制する側のひとり。

化あだし野の菱ひし理り。

かつて、剝離城アドラで出会った彼女が、再び姿を現していたの だ。

「いえ、今日は個人的な向きでして」

かぶりを振って、菱理が言う。

とても信用できたものではない。前回の事件では、ある意味で犯人以上の黒幕がこの女ひ性とだったのだから。そうでなくとも、時計塔を運営する法政科は、ほかの魔術師たちと異なる思想と方向性を持つ。いきなり毒薬入りのワインでも差し出された気分だった。

しかし、今はそれを詮索している間もなかった。

もうひとつの澄んだ声が、廃棄されたホームに響いたからだ。

「──法政科の鼠のあげく、どこかの君主ロードまで来てると思ったら、噂の現ノ代ー魔リ術ッ科ジなの」

振り返り──少し、視線を下げる必要があった。

おそらくは十一歳、二歳といったところだろうか。小生意気につんと顎をしゃくり、あでやかな銀色の髪を指で梳いて、美しい少女は琥珀色の瞳でこちらを睨ねめつけていた。

「これは」

と、師匠が瞬きした。

葉巻をシガーケースへと入れて、丁重に頭を下げる。

「ご無沙汰していますレディ」

「ふうん。現ノ代ー魔リ術ッ科ジのお飾りでも、私の顔ぐらいは覚えてたわけ?」

幼さに似合わぬ毒舌で、少女は吐き捨てる。

正真正銘の事実なのだが、仮にも君主ロードである師匠に、真正 面からこんな暴言をつきつけられるものはそういない。

「.....こちらは?」

自分の囁きを聞き咎めて、銀髪の少女は胸に手をおき、名乗りを あげた。

「オルガマリーよ。オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア」

どこかで、聞いた響きだった。

師匠が言葉を添える。

「アニムスフィア。つまり天体科アニムスフィアの君主ロードの娘 だよ」

「君主ロードの娘……っ!」

叫びを堪えるのに、どれほど苦労したか。

法政科に、新たな君主ロードの娘。

もはやそれだけで、この場は異界と化したような心持ちがした。 正直立ちくらみに襲われずにいるのは、背後のカウレスがもっと衝撃を受けて、目を丸くしているからだ。魔眼蒐集列車レール・ ツェッペリンの威名は聞いていても、これほどの招待客が訪れると は思ってなかったに違いない。

「知ってるわよ。あなたは先代─ケイネス・エルメロイ・アーチボルトのすげかえで、無理やりエルメロイ派にねじ込まれた生け贄でしょ」

突然の刺々しい台詞にも、師匠はさして動揺した風はなかった。

「時計塔らしからぬ真っ直ぐな物言いですな。年若いアニムスフィアの一族が山から下りてくることも珍しいですが」

「別に。お互い、こんなことで時間を無駄にしても仕方ないもの。 で、あなたは狙いの魔眼があるわけ?」

きつい眼差しで、オルガマリーが問いかけたのだ。

こちらの感情など一切考慮しない態度に、さすがの化野菱理も 割って入ろうとはせず、ほんの少し愉しそうに目を細めたきりだっ た。 対する師匠は、真正面から受け止めず、

「……さて、どうでしょう」

と、言葉を濁した。

「ふん。あっても言うわけないわね。オークション前に情報を渡す わけないし」

「そうとも限りませんよ。互いに狙いの魔眼が違えば、負担を軽減 することも可能でしょう。あなたもそういう意図だったのでは?」

あくまで、師匠の対応は穏やかだった。

少し、不思議な気もした。いつもの師匠だと、喧嘩を買わないまでも、嫌みや皮肉を混ぜて返すことが多いのに、ほんの少し声音は柔らかかった。

つい自分が首を傾げたところで、

「一オルガマリー様」

と、新たな長身の人影が歩み寄ったのだ。

こちらはアップにした髪型に紫のコートを纏う、およそ二十代半ばほどの女性だった。腰にはしなやかな革の教鞭をたばさんでいるあたり、家庭教師かなにかなのだろうか。クラシックなスタイルに、鼈べっ甲こうの眼鏡がよく似合っていた。

(.....こっちも魔眼殺し?)

見た目では分からない。

そういえば、菱理の眼鏡にも同じ可能性があることに、やっと自分は気づいた。自分が鈍感なだけで、魔術師たちは多くの準備を整えている。彼らにとって、戦いは顔を合わせる前から始まって──あるいは終わっているのだろう。

そんな風に、ずっとずっと続けてきたのだろう。

「ロード・エルメロイII世様。化野菱理様ですね。オルガマリー様の付き人をしておりますトリシャ・フェローズと申します。──さ

あ、お嬢様」

「な、何よトリシャ」

「失礼いたしました。また改めて挨拶させてくださいませ」

そそくさと、トリシャとオルガマリーが身を翻す。

自分の眼を奪ったのは、その際にトリシャと名乗った女性のコートの裾から覗いた、何かアクセサリーじみた品であった。

(え?)

ぱちぱち、と瞬きする。

たまたま自分の角度だけ見えたのだろうが、あれは何か、そう、

(卑猥な.....形をしていたような)

フードの下で熱くなった頰を押さえ、ぶんぶんとかぶりを振る。

きっと気のせいだろう。というか自分には関係ないことだ。飲み 込んだ唾が気管に入って、むせてしまったが、なんとか平常心の顔 を保つ。

その隣で、カウレスが口を開いた。

「先生は、怒らないんですか」

「何をだね」

「いくら君主ロードの娘とはいっても、さっきの態度はひどいと思うんですが」

「ああ、あの程度で怒ってたらきりがないさ。いや、いっそあれぐらい分かりやすく敵意を示してくれる方が好感は持てるかもしれない。好意的にやってくる相手の方が、魔術師は恐ろしいよ」

「あら、誰のことです?」

菱理が微笑したが、こちらは取り合わず、師匠は言葉を継いだ。

「それに、私がお飾りなのは本当のことだ。長ずれば彼女もライネ

スも法政科に通うことになるだろうし、細かな訂正はライネスがすればいいさ,

「……っ、そうなんですか」

ちょっとびっくりして、自分も口を挟んでしまった。

「ああ、多くの君主ロードは一度法政科を通るものだからね。時計 塔を運営するという帝王学はあそこで学ぶものだ。そういう意味で は、仲良くやりたいものだが」

「ええ、もちろんです」

今度は菱理のうなずきに、師匠も嫌そうに会釈した。

ある意味、息が合っているのかもしれない。

「でも、あ口なーたドの言った通り、引きこもりのアニムスフィアが山を下りてくるのは珍しいですね。よほど目当ての魔眼でもあるのでしょうか?」

「さて。あそこなら、魔眼に金を出すぐらいはやるだろうが」

小さく、呟く。

ちらと視線をやった先には、オルガマリーのほか、まだいくつかの人影が群れていた。

ただ、はっきりとは見えない。ゆるゆるとたちこめた霧は、ホームをいよいよ白く染めており、目前の視界さえ危ういものとさせていた。

「濃くなってきましたね」

菱理が囁いた。

ロンドンは、よく霧の都市などと呼ばれる。

実際に、冬には濃い霧が発生することも多いのだが、しかし呼び 名の理由は別だ。

スモッグである。おおよそ十九世紀以降、産業革命に伴う石炭燃料の莫大な消費によって、煙や煤すすが霧と入り混じり、それこそ

数メートル先も定かならぬ濃さのスモッグで、大英帝国の首都を閉ざしたのだ。

だけど、今自分たちを取り囲んだのは、そんなものではなかった。

視界を閉ざすだけの濃密さはあれど、汚れや悪臭など欠片もない。ただひたすらに、純然たる白が広がっていく。そっと手を伸ばせば、天上の絹シルクを織れるのではないかというおとぎ話めいた幻想に、一時自分もとらわれた。

そして、やがて聞こえだしたではないか。

霧を揺り動かし、まるでオペラのごとくどよもす音が。

「汽笛が.....」

自分も呟いていた。

とうに廃棄されたはずの、古く懐かしい響き。腹の底までずんと届くそれは、現代の電車からは失われてしまったものだった。

光が、霧を割る。

優美な車輪が、線路の上に現れた。

濛もう々もうと煙を吐き出す機関部がそれに続き、やがては雄壮たる全体を露わとする。鈍色の機体はどこまでも凜々しく、霧の海を行く軍艦のようにすら見えた。遠い昔、たった一度神を呪ったがために永遠に海原を彷徨さまようことになったというフライング・ダッチマンの伝説さえ、その姿にかぶった。

あまりにも時代錯誤。

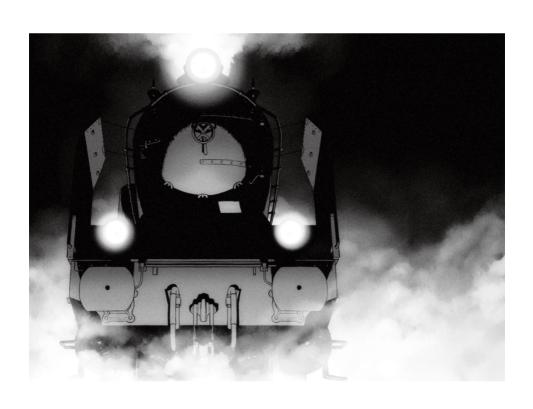
あまりにも荒唐無稽。

だが、だからこそ、この舞台に相応しい。

揃った魔術師たちも、必ずやそう思ったはずだ。

「……魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン……!」

こぼれた呻きが誰のものであったか、ついに自分には分からなかった。



ゆっくりと汽車は止まり、瀟しょう洒しゃに飾られた扉を開いた。

開き方ひとつにも主人の美意識が徹底されているのか、並んだ騎士が一礼するかのようだった。躊躇なく師匠は足を踏み出し、自分やカウレス、化野菱理もそれに続いた。

ふと、爽やかな果実の香りがした。

入った車両の中央には、大きなテーブルが置かれ、色とりどりのフルーツが積まれていたのである。近くの椅子に腰掛けた白い帽子の男性が、つややかな林檎に手を伸ばし、むしゃりと皮ごとかじりとる。

咀嚼してから、ぐるりとこちらを向いた。

「ああ、追加の招待客が来たのか!」

「……魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのスタッフじゃないな」
いぶかしげな師匠の言葉に、男性は大いにうなずく。

「もちろんだとも! というか、この姿を見て分からないかな?!」

リネンの洒落た白ジャケットをぽんと叩き、やたらと良い滑舌で 立ち上がる。

胸元に手刀をあてた独特の体勢に、カウレスがんんん、と首を傾げた。

「あれ、どこかで見たような……確かゾンビの……」

「イエス!」

少年の呟きに、男性が懐へ手を差し込んだ。

内側から出てきた拳銃をぐるぐると回転スピニング。呆気にとられたこちらを尻目に、左右の拳銃を回転させたまま交差させ、あるいは頭上に投げ放っては背中で受け取って、あまりにも自由自在に操りつつ、最後は目前でびしっと構えてポーズを取った。

「ジャ~ンマリオ! スピネッラの! ゾンビクッキング! 今日 もジャンマリオと一緒にゾンビ丸焦げの調理を楽しみましょう!」

決め台詞も鮮やかな、一流の芸人はだしのパフォーマンスであった。

ただし、大変申し訳ないことに、自分も師匠もまったくそのネタ が理解できなかったのだけど。

「あれ、ご存じない? ジャンマリオのゾンビクッキング」

「……残念だが、あまりバラエティは見ない」

師匠のテレビは事実上のゲーム専用機なのだった。

自分の部屋でもおおよそテレビは置物と化しており、天気予報以外ではたまにフラットに妙な映画を貸してもらったときぐらいしか電源を入れられない。

対して、カウレスだけがちょっと興奮した声で、口を開いたのである。

「ロンドンのマイナー放送局で、わりと人気の番組なんですよ。毎回凝った特撮のゾンビを二丁拳銃でバンバン撃ち倒しながら料理するってやつで。得意技はゾンビの頭をかちわったフライパンでそのまま三ポンドのステーキを焼く、ジャンマリオ・バスターですよ!」

ゾンビを倒しながらの必要が一体どこにあるのかと思うのだけ ど、多分そこにつっこむのは野暮なのだろう。なお自分の苦手分野 は肉体を持っていない部類なので、ゾンビはわりと平気だったりす る。

ともあれ、与えられた情報を受け止めきれず、ぽかんとしたまま 呟いていた。

「魔術師が、テレビに?」

「ないわけじゃない。植ユ物ミ科ナのアーシェロットなんかは、ずいぶん前からテレビメディアに手を回してるしな」

ぽかんとした自分に、師匠が言葉を添える。

本来こうした方面は法政科の役割なのだが、けして専売特許というわけではないらしかった。それぞれの派閥の中でも、自分たちの手で情報を制御したいという―本来の魔術師からすれば俗な思想は存在しており、結果として表社会のすぐ近くで、魔術師同士がやりあう状況も発生しているのだとか。

とはいえ、冠番組を持っている魔術師というのは、希少な存在に 違いない。

「……で、そちらの方は?」

師匠の視線が、テーブルの向こう側に移された。

そちらにはもうひとり、寡黙な人影も座っていたのだ。

優に、七十は越えていよう──黒色人種ネグロイドの老人だった。 眉のあたりに古い切り傷があるのが、老人にマフィアめいた印象を 与えてもいた。

葡萄の房からひとつふたつをもぎ取って口に入れて、

「カラボー・フランプトン。聖堂教会の者だ」

ぽつり、と囁いたのだ。

ジャンマリオを除く全員が、緊張を漲みなぎらせた。

聖堂教会は、その名の通り世界で最も多くの信者を持つ『普遍的な』宗教を基盤とした組織だが、魔術協会とは多くの面で反目し合っている。魔術協会が自らの手で神秘を管理しようとしているのに対して、聖堂教会は自分たち以外の神秘は残らず壊滅させようという立場だからだ。

カウレスが上着の懐へと手をいれ、微笑したままの菱理もまた一 歩後ずさり、距離を取った。

老人もまた、軽く拳を握り込んだ。

これまで数え切れぬほど殺し合ってきた歴史が、両者の間で渦巻いているかのようだった。普段魔術戦には参加しない師匠ですら、表情を堅く強ばらせた。

その緊張を、新たな声が打ち破ったのだ。

「──わわ! なんとエルメロイII世先生もいらっしゃってるなんて 感激!」

と、能天気にロリータ気味の少女が手を叩いたのである。

ただし、その相手は初対面ではなかった。

「じゃっじゃーん! エルメロイ教室愛人志望イヴェットちゃんですよう!」

「.....イヴェット.....」

今度こそ、師匠は堪えかねたように胃のあたりを押さえた。

「君も、招待状を……」

「その通り! ふふふ、ご存じのようにレーマン家は魔眼の大家ですからね! 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのオークションでは常連これ当たり前です! びしっ!」

最後の擬音までわざわざ口にして、横にしたピースサインでポーズを取る。

どこからつっこめばいいか分からないが、ともかく車内に充満していた殺意は緩和されたようだった。

カラボーと名乗った老人が拳をゆるめ、カウレスもゆっくりと手を下ろす。見守っていたジャンマリオも小さく口笛を吹いて、椅子に戻った。

「お、まさかカウレスくんもいるとは! 何々? 先生の腰巾着なの?」

「……い、いや、先生にお願いしたのは本当だけど」

「ほっほーう! んー、浮気はいけませんよ先生。あ、いや、衆道なら取り合いにならないからいい? 3 P はうまくできなかったらごめんなさいね?」

「.....ファック」

今度は聞かなかったふりもできぬスラングを唱え、師匠が顔を押さえた。

「というか愛人志望なんて設定どこからわいた」

「もちろんたった今! あたしの控えめでキュートな胸からです! あ、触ってみたくなりました? いいですよこのロリコンめ!」

「よし黙ってろお前。できたら、今そこの窓から飛び降りてくれ」

えへんとばかりに胸を張った少女をいさめて、師匠は視線を移した。

逸らした、のではなかった。

いつのまにか、車両の中央に痩せぎすの男が佇んでいたのである。

おそらくは魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのそれだろう黒い 制服を纏い、痩せぎすの男は銀の懐中時計を見下ろした。

「はい。今宵も定刻通りに運行できております。これも皆様のご協力あっての賜物です」

ざわめく魔術師たちをよそに、満足げにうなずく。

自分たちの後ろで、扉が閉まった。

汽笛とともに、蒸気機関がけたたましく鳴り響く。

至極ゆっくりと、徐々に勢いを増して、自分たちを乗せた小世界が走り出す。

そして、その速度に揺さぶられるように、痩せぎすは頭を下げ

た。

「当車の車掌、ロダンでございます。皆様歓談中のところ失礼いた しました」

かの有名な彫刻家と同じ名前を、口にする。

自分たちだけでなく、反対側の入り口から乗車したオルガマリーたちも、その男には気づいてなかったようだった。まるで、たった今列車の空気からしみだしたとでもいうように、不気味な車掌はこほんと咳払いした。

「当車は三泊四日で霧の国を一周して、ロンドンに戻ってくる予定です。その間、皆様にゆっくり魔眼コレクションをご覧いただき、三日目にお待ちかねのオークションを行います。落札された魔眼はすぐに移植されましても、お手元で保管いただいてもかまいません。ええ、移植にはたいした時間はかかりませんので、どうぞご安心を。逆に魔眼を出品される方は、明後日―三日目の夕方までに私どものもとまでおいでください。声をかけていただくのはこのロダンでもかまいませんし」

「──あたし、オークショナーをつとめさせていただくレアンドラで もかまいませんのよ」

隣に現れた、毛皮のコートを着た女が一礼した。

こちらも、なぜいままで気づかなかったというほどに目立つ相手 だった。

ベリーショートの髪型にすらりとしたモデル体型。しかも、眼のところをぐるぐると革で覆っているのだが、どのような仕掛けになってるのか、動作に不自由は見いだせない。いや、イゼルマの事件でも白はく銀ぎん姫きが盲目だったことを考えれば、この程度は驚くに値しないのかもしれない。

だが、だとしても。

動き始めた列車の中で、自分はなぜか恐ろしくてたまらなかった。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンと名付けられたこの車両に あって、自らの眼を封じたその女は、これからの旅路を暗示してい るような、そんな気がしてならなかった。

「今から、皆様を客室に案内したく思います。どうぞ、こちらへ」

そう言って、ロダンと名乗った車掌がもう一度会釈したのであった。

\*

案内された客室コンパートメントは、思いの外快適だった。

なにしろ、ひとつの客車につき三つしか客室をつくらないという 贅沢ぶりである。それでも車両自体の横幅には限度があるのだが、 シンプルな調度の配置が狭苦しさを感じさせない。ひとつの招待状 につきひとつの部屋がルールらしく、カウレスと師匠と自分とで三 人分のベッドを詰めているのだが、それでも何ら問題がないほど だった。

内側をぼうと照らすのは、瓦斯灯の光。

いかにも高級そうなソファに座って、自分はこめかみを押さえ た。

見とがめたカウレスが、口を開く。

「大丈夫です? グレイさん」

「……あ、はい。ちょっとたくさんの人に会いすぎて、頭が混乱してるというか」

実際、悲鳴をあげたくなる事態ではあった。

法政科の魔術師―化野菱理。

君主ロードの娘―オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィアと、その付き人のトリシャ・フェローズ。

テレビ番組に出ているとかいうおどけた魔術師──ジャンマリオ・スピネッラ。

聖堂教会に仕える老人─カラボー・フランプトン。

これに、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの車掌とオークショナー、あげくはエルメロイ教室のイヴェットまでもが加わって、自分の頭は完全に容量を超えてしまっていたのだ。いや人数だけなら、あの双貌塔のパーティの方が多かったが、今回はひとりひとりが師匠や自分と直接関わってきそうで、記憶しきれないまでも、無視することもできなかったのである。

こめかみのあたりをさすり、車窓を見やる。

窓の外は、濃い霧に満たされている。時折街の光が遠く滲み、ぼう、ぼうと現れては流れていく。古い見かけよりはずっと振動も少なく、蒸気機関の逞しい音が心地よかった。

その響きに混じって、

「……考えてみれば、イヴェットがここの常連なのは当然か」

スーツだけを壁に掛けつつ、師匠が囁いたのである。

「あの人の眼帯も、やっぱり魔眼と関係してるんですか?」

「半分は正解で、半分は間違いだな。そもそもあの下には生身の眼球はついてない」

師匠の言葉に、自分はぱちぱちと瞬きしてしまった。

どう訊き返していいのか分からなかった自分に、隣のカウレスが助け船を出してくれた。

「イヴェットさんは宝石を魔眼の代わりにしてるんです」

「宝石を?」

確かに、制作がどうとか師匠も話していた気がする。

「魔眼の複製はおおよそ低位の劣化品しかつくれないんですけど、 宝石の加工はその例外なんです。イヴェットさんはそういう加工の 魔術を得意としてきた家系で、限定的だけどノウブルカラーですら 再現するとか。……多分、より精巧に魔眼を再現するためのモデル として、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのオークションへ定期 的に参加してるんじゃないかな」

「……あ、なるほど」

そう言われれば、納得もいく。

むしろ、移植どうこうよりも、魔術師としては正攻法のアプローチではないだろうか。

「まあ、そういうことだ。生身の眼球を代償とする行為や宝石ならではの魔術的属性で、複製の限界を乗り越えてるんだろう。もちろん異物を身体に埋め込む以上拒絶反応はあるし、イヴェットが耐えられるのも何代にもわたった肉体改造あってのことだろう。総数でいえば、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで移植を受ける魔術師以上の希少例に違いあるまい」

カウレスの説明を、師匠が補足する。

魔眼女子とかいうあの素っ頓狂な自己紹介は、必ずしも的外れではなかったらしい。いずれにせよ、自分にはいささか難解すぎる世界の出来事であった。

しばし考えていると、

「だが、結局、支配人代行は現れなかったな」

と、師匠が呟いた。

招待状の署名が、それだった。

聖遺物を盗んだ者の手がかりを知るとすれば、その最有力といえる人物。

「じゃあ、その人は……」

「後で現れるつもりなのかもしれない。だいたい、ここへの招待状を置いていった意図さえ分からないんだ。この状況で思い煩っても 仕方あるまい」

言葉と裏腹に、師匠の眉間の皺はいつよりも深かった。

おそらく、今日ここで出会った人物のひとりひとりについて、犯

人との関連性やそのほかの可能性を考察していたに違いあるまい。 自らの武器がけして卓越した魔術などではないと知るゆえに、こう したときの師匠は悲愴なほどに頭脳を働かせている。

師匠の能力は、たとえば名探偵なんかで思い浮かべる霊感的な冴えではない。

むしろ、その正反対──地道な調査と積み重ねた知識という土台の上で、初めて人並み外れた洞察力を発揮するタイプだ。だからこそ、このような事件の場では、師匠の頭が休まるときなど一瞬たりとてないのだろう。

思い煩うなんて言葉が、生やさしいぐらいに。

何か言いたくて、しかし口べたな自分には慰めひとつ思いつかなかった。

「ともあれ、休めるうちに休んでおこう」

提案した師匠が、魔眼殺しの眼鏡を外して、そのままベッドに横たわる。

意外とすぐに、規則正しい寝息が聞こえてきて、少しだけ安心した。やはり疲れていたのだろう。そうでなくても、聖遺物が盗まれるなんてハプニングがあって、堪えていないはずがないのだ。

ただ、自分は眠れなくて、悶々とベッドに座ったままだった。

しばらく眠れないのなら、アッドを出しても良かったかもしれないが、今あれの騒がしい口上を聞く気にはなれなかった。

そんなとき、

「―グレイさんは、すごいな」

と、急にカウレスが切り出したのだ。

「どうして、突然」

「いや、俺はもう、ずっと浮き足立っちゃって。ドイツの片田舎から時計塔に来た段階で、いっぱいいっぱいだよ。あげく、もともと 北欧の伝説だった魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンにロンドンで 乗ることになるなんて」

なんでも、以前の魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは主に北欧 の森を走っていたそうだ。カウレスの出身がドイツなら、彼の方が 馴染みのある伝説だったのかもしれない。

話を聞きつけた少年が師匠に頼み込んだのも、そうした事情があったのだろう。

「そのわりに、結構余裕がありそうですけど。……さっきも、イヴェットさんが出てくる前、戦う覚悟を決めてたでしょう」

聖堂教会から来たという老人カラボーに対して、菱理はもちろんながら、カウレスも構えていたのを、自分は見落としてなかった。ああいうのは単純な魔術の技ぎ倆りょうだけでできるものではない。もっと純然とした心構えの為せる業だ。

すると、苦笑したカウレスは困ったように頭を搔いたのである。

「はは。余裕なんて全然ないよ。──でも、そうだな。姉さんが途中で魔術師やめるとか言い出したときは、結構修羅場になったから、その分経験を積めたのかも」

「乗る前に、言ってた話ですか?」

「ああ」

と、眼鏡の少年はうなずいた。

「子供の頃から史上最高の天才だとか評価され、将来を嘱望されて た姉さんが、突然魔術師をやめて魔術刻印まで放棄したんだよ。そ りゃあ一族も上を下への大騒ぎさ」

思い出したのか、かすかに目を細くする。

「なんせ、平凡きわまりない俺が当主になって、あげく姉さんのために用意されてた時計塔への留学まで、そのままこっちにスライドしたわけだろ。まわりが意気消沈するのも当然で、ひどいときには逆恨み――いや向こうからすれば正当な恨みか――で、殺されかかったりしたしさ。俺が死んだら、姉さんが戻ってくるかもと考えたんだろうけど」

「つ.....」

殺されかかった、という言葉はきっと何の誇張でもないんだろう。

魔術師がそれぐらいやるということは、この数ヶ月で骨身に染みている。人ひとりの命なんて、代々の宿願が果たされるならば、塵じん埃あいほどの価値も持ちはしない。

こっちが息を詰めたのを見て、カウレスはにわかに相好を崩し た。

「……ごめん、変な話だったよな」

「いいえ」

と、自分はかぶりを振った。

どうしても、気持ちがこもってしまった。

「いいえ、いいえ。……そういうのは、分かります」

自分の意思と関わりなく周囲が盛り上がる辛さは、よく知っている。

その期待に応えられない苦しさも、同じく。卑小な自分なんか捨てきって、かつての英雄になりきれれば、どれほど楽だろう。自分のことをこんなに未熟で無価値だと思っているのに、どうして簡単に捨ててしまえないんだろう。

不思議そうに、カウレスが首を傾げた。

「君は、師匠の内弟子なんだろう」

「でも、拙は魔術師じゃないですから」

「そっか」

それ以上は、カウレスは踏み込まなかった。

会話も途絶えて、部屋を列車のジョイント音が支配する。

不思議と、沈黙は辛くなかった。がたん、ごとんと心地よく聞こ

える音に身をゆだねて、どうしてだろうとぼんやり考えていた。

(.....ああ、そうか)

この人は、どこか師匠と似ているからだ。自分の平凡さに嘆き、 天才と讃えられる隣人との違いに苦しみ、だけどまだ何ひとつ諦め ていない。そんな在り方がどうしても胸に刺さる。最初から天才で ある人の飛翔よりも、ずっと強く、自分の芯に訴えかける。

だから、だろう。

「大丈夫です。あなたは強くなります。お姉さんよりも、きっと」 自然と、自分の口はこんな言葉を紡いでいた。

「だって、師匠が見いだしたんですから」

驚いた顔で、カウレスがこちらを見返していた。

「なにか?」

「......いや。グレイさん、先生のことは本当に信頼してるんだ」

微笑したカウレスの言葉に、自分は短く息を詰めた。

そんなの、考えたこともなかったから。

「そう、でしょうか」

「うん」

うなずいて、カウレスは部屋を見回す。

「……本当にあったんだな、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン。 姉さんなら、どうしてただろう」

最後の言葉が、部屋の薄闇にたゆたった。

もっとも、それ以上話を続けるつもりはないらしかった。毛布を たぐり寄せ、カウレスは枕元のランプを消した。

「おやすみ、グレイさん」

### 「.....おやすみなさい」

こちらも、もぞもぞと毛布を引き寄せた。

定期的な列車の振動が、身体の芯に凝り固まった何かをほどいて くれるようだった。部屋に残った師匠の葉巻の香りも、なぜか心を 落ち着かせてくれて──。やがて、そんな思考もゆっくりと薄闇に溶 けていった。

思いの外心地よく、その夜は眠りにつけたのであった。

朝になって、車窓から淡い光が射していた。

相変わらず列車は霧の中を走っているようだが、それでも太陽の有無ぐらいは分かるらしかった。備え付けの蛇口で顔を洗い、軽く身支度を整えると、隣のベッドでのたのたと起きあがる気配があった。

「師匠」

「.....もう、五分」

ぱたん、とまた倒れた。

やはり、疲れがたまっているのだろう。ここしばらくは、ろくに 眠れなかったはずなのだから。

とりあえず、眠ったままの師匠をカウレスに支えさせ、髪をセットする。多分逆でもいいのだけれど、あまり他人にやらせる気になれなかったからだ。……自分もここしばらくは師匠の髪をいじれなかったせいか、妙に安心してしまった。

「師匠、そろそろ朝食の時間ですが」

「……う、む。悪いがグレイ、先に行っててもらえるか」

「先にですか? でも……拙だけ食事したところで」

「今なら朝食でほぼ全員が食堂車に行ってるだろう。その間に調査 しておきたいが、誰も向こうに行ってないのは問題だろう」

なるほど、と思った。

寝ぼけ眼でもあれこれ考えているものだ。

「分かりました。でしたら、先に食堂車に行ってますから。カウレスさん、後よろしくお願いします」

「あ、はい!」

うなずいたカウレスに任せて、ひとまず髪のセットを終えて、ぽんと背を叩く。

客室を出ると、自分は列車の進行方向へと歩き始めた。

さすがに、一直線に並んだ列車では迷いようもない。剝離城にせよ、双貌塔にせよ、やたら敷地の広かったここしばらくの事件とは 大違いだ。

はたして、窓の外は白い霧と、その狭間に浮かぶ針葉樹の影に埋め尽くされていた。

(霧と、森だ.....)

ぼんやり、思う。

一体どれぐらいの昔から、この列車はこんな場所を走っているのだろう。

ひょっとしたら、この島国に人間が住むよりも前なのではないかと、そんなありえない妄想にとりつかれながら、自分はロビー室を 通り過ぎ食堂車の方へと歩を進める。

廊下の絨毯はまるで宮殿のごとく、踝くるぶし近くまで沈み込むのではないかと錯覚させるほどで、よけいな揺れというものを感じさせない。

やがて、食欲をかきたてるトーストの香りが鼻孔にしのびいった。

それにつられるみたいに、食堂車の扉を開くと、

「お、内弟子ちゃん。こっちこっち!」

イヴェットがぶんぶん手を振って、自分の隣の席をばんばん叩い ていたのだ。

時々思うが、この人はフラットと同タイプだ。案外、師匠の近く に集まりやすい性質なのかもしれない。 「どーせ先生は寝覚め悪いから、内弟子ちゃんが起こしても、もう 五分とかなんとか言ってたんじゃないの?」

「……よく、ご存じなんですね」

「そりゃ愛人志望だからね。あ、スパイだからでもいいよ!」

どこまで本気か分からない発言に、とりあえず曖昧に笑うしかなかった。

何より、今は遥かに物騒な代物が鎮座している。食堂車の中心に は透明な筒がおいてあり、その内側で溶液に浸された一対の眼球が 浮いていたのであった。

「こちらが、ノウブルカラー──炎焼の魔眼にございます」

確か、オークショナーのレアンドラといったか。

筒のすぐそばで、目の周囲を革で覆った女が、そんな風に説明した。

「ご存じかと思われますが、視界に入ったものを燃やす──自然発火現象スポンティニアス・コンバッションを引き起こす魔眼です。状態もよく、眼内魔術回路の質も上々でございます。ただ炎焼の魔眼によくあるように制御には癖があると思われます。詳細な情報や落札予想価格エスティメートなどは、お手元のカタログをご覧くださいませ」

テーブルには、焼きたてのトーストやジャムといった朝食と一緒に、硬質の冊子が載せられていた。つまり本番の下見ということだろう。

本当にオークションなんだ、と妙に感じ入ってしまった。

溶液漬けの眼球を前に食事というのはいかにも猟奇的なのだが、 見かけだけのグロテスクには耐性がある。以前それでライネスと一 緒にホラー映画を観たときには残念がられたのだけど、どんな反応 をすれば良かったのだろうか。

隣は気がとがめたので、斜め正面に座ると、気づいたスタッフが 自分の席にも食事を持ってきてくれた。 やたら無表情なところからすると、こちらも双貌塔イゼルマで見たようなホムンクルスか何かなのかもしれない。

ゆっくりと、オークショナーが説明を続けた。

「今回のオークションで出品される魔眼の内、まず本日は二点、明日も二点から四点ほどをお披露目する予定となっております。ご了承くださいませ」

「お披露目の数は、いつもどおりか」

イヴェットが、呟く。

よく分かっていない自分の顔に気づいてか、少女はつるりと眼帯 を撫でて、言葉を続けた。

「もともと、このオークションは先代の支配人がとびきりの魔眼を自慢するための口実なんだけどね。とびきりの──文字通りの目玉商品Eye Catcherは明日のお楽しみってわけ」

「自慢のために、こんなオークションを?」

思わず、呆然と呟いてしまった。

「そんなもんよ。もともとは、どこぞの死徒の道楽だったそうだも の。ロズィーアンとかいう家名だったかな」

ぞくり、と背筋を悪寒が走る。

死徒。

生きながら死ぬ者。死にながら生きる者。

生物としての在り方を根本からねじまげて、あるいは『吸血鬼』などと呼ばれる吸血種。つまるところ死徒とはそういう類の呼び名だった。死霊とは異なる―しかし、別のやり方で死を踏みにじる者。

イヴェットは、さして気にもしてない風に、言葉を続けた。

「あたしがオークションに参加しはじめたのは、支配人代行になってそこそこ経った後だから、詳しいことは知らないのよね。ほら、

互いの事情に深入りしないのが付き合いを長続きさせるコツで しょ。とりわけこういう業界では、

案外、正しいのかもしれない。

時計塔のように、いやでも一定以上の頻度で会わなければならぬ 関係と違い、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンへの乗車は年に一 度──いや常連といっても数年に一度程度かもしれない。

「まあ何回か来ると、ある程度は客の判別もつくようになるよ。た とえば、あれは売り主だろうね」

ひそひそ、とイヴェットが耳打ちする。

少女の視線が投げられているのは、寡黙な老人だった。

「カラボーさん、ですか」

聖堂教会の、寡黙な老人。

拳に刻まれた幾多の傷よりも、半ば伏せられた瞳の暗さが気に なった。

「聖堂教会にも魔術の使い手はいるけど、なんせ母体が母体なんで 洗礼詠唱以外は歓迎されないからね。だいたいあんな歳とってから 魔眼をいれても習熟している時間も体力もない。むしろ、制御でき なくなってきた魔眼を売りに来たと考えるのが順当だ」

「年齢で、変わるんですか」

「おやま」

自分の質問に、イヴェットが軽く目を見開いた。

「内弟子だけど魔術師じゃないとか聞いてたけど、本当に魔術には 疎いんだね君」

「す、すいません」

「いやいや、別に悪くないけどね。かえってそれぐらいの方が、内弟子にはふさわしいのかもしれない。うーん、アプローチを間違ったか」

腕組みして、イヴェットは勝手にうなずく。

それから、ゆっくりと口を開いた。

「魔眼はね。魔術師に付属した器官でありながら、それ自体が半ば独立した魔術回路なのよ。だからこそ摘出とか移植とかの話になるわけ。ん一、魔眼ごとに個々の能力があるのを考えると、血筋に関係なく適応できる特殊な魔術刻印と言った方が近いのかな」

そう言われると、魔眼の価値も納得できる。

魔術回路とは、確か魔術師が生まれ持った「魔力を生み出すための器官」だったはずだ。その質と量によって扱える魔力には天地の差が生じるため、どの家系も、一本でも多くの魔術回路を子供に持たせるべく、血道を上げるらしい。

疑似的にでもそれが増やせるのならば、多くの魔術師が犠牲を払うだろう。

「じゃあ、制御できなくなるというのは」

「うん。独立した魔術回路って言ったように、魔眼は単体で魔力を生み出して術式を起動できるの。一般の魔術回路に対してノウブルカラーが天体運営に近い……なんて表現されるのも同じ理由かな。だから、魔術師とは縁のない一般人でも、ごく稀に魔眼の使い手が現れるわけよ。ただし、魔眼が生み出す魔力と術式が必ずしもつりあうとは限らない。ひどい場合になると魔眼が勝手に術式を発動したあげく、魔術師本人の魔術回路からも精才気ドを強引に搾り取りだす。こうなると、まあ地獄だよ」

唇をとがらせて、眼帯少女は肩をすくめる。

「足りない分がわずかなら、若いときは生命力が旺盛だからしんどいぐらいですむかも。でも、歳をとるとね。ここならより低位の魔眼とか、ごく普通の眼球とかも提供してもらえるわけで、まあ売り得さ」

# 「.....それで」

小さくうなずくと、イヴェットはくるくると人差し指を回した。

「買う方はどこまで覚悟してるか分からないけどね。よっぽど魔力

の扱いに卓越してれば、逆に魔眼の魔術回路を自分のそれに上乗せだってできるし、こんな列車に乗る魔術師だったら自分だけは例外 だなんて思ってるものよ。くく、一代限りのサブとはいえ魔術回路 を上乗せできるなんてのはそりゃ美味しいだろうものね」

今度は、少女の視線は反対側の列に並んだテーブルへと吸い寄せられた。

銀色の髪の、まだ十一かそこらと思しい相手。

オルガマリー。

手元のカタログを見ながら、あれこれと付き人──眼鏡の才女、トリシャ・フェローズに話しかけている。君主ロードの娘である彼女なら、それこそ魔眼など制御できて当然と考えるだろうか。

あるいは、同じく反対側のテーブルに座った化野菱理なら?

いまも愉しげに白い帽子をくるくると回している、冠番組持ちの ジャンマリオ・スピネッラなら?

(.....ああ、だから)

それぞれの魔術師がそれぞれの思惑をもってオークションに臨ん でいるのだ、と腑に落ちた気分であった。

「やっと……分かってきました」

「ん。まあ、招待客がこれで全部とは限らないけど。オークション当日に乗り込んでくるヤツだって結構いるもんよ? ただ、本気で買いに来てる客はまず最初からいるわね。さっき言った目玉商品 Eye Catcherにだって、たいていの場合魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの方から招待状を出してるはずだし」

「え? それは魔眼を売ってくださいってことですか」

「そんな穏当なものか」

くつくつと、イヴェットが笑う。

「魔眼所有者ホルダーの間ではそこそこ有名なんだけどね。招待状 を無視しても、強引に拉致されたり、両目をくりぬかれた死体で見 つかったりだよ。うん。つまりは命が惜しかったら大人しく魔眼を差し出しなさいというメッセージなわけ。世界のすべての魔眼は私のものなんだからってぐらいの理屈」

一瞬、気が遠くなった。

どんな王様の理屈だろう。あんたの身体は私のものなんだから差し出せと、どういう思考から言い出せるのだろうか。

「まあ、さっき話したように魔眼を持て余してる相手にしてみれば、救い主だよ。世界で一番高く魔眼を買い上げてくれる場所には 違いないから」

トーストをぱくりとやって、イヴェットは食堂車の入り口を見 やった。

ぱあっとその顔が輝いた。

「いらっしゃい先生!」

と、入ってきたばかりの師匠に呼びかけたのだ。

「.....イヴェット」

「四人掛けだから、先生も座れますよ。ほらほらどうぞ! 可愛い 内弟子もいますし」

あ、と声に出そうになった。

自分を誘ったのは、つまり師匠を捕獲するための餌だったらし い。

師匠もそれは見透かしていたようだが、諦めた風に自分の隣に座った。少し申し訳ない気もするが、ひとりだけでここに座っていたならかなり辛いことになってたろうから、是非許していただきたい。

「レーマン家は付き人はつれてこなかったのか」

「ははは。実家にはいますけどね。慣れてないんですよああいう の。ほら、スパイは身軽じゃないと!」 くいくいと腕を振って、イヴェットがアピールする。

対する師匠は慣れない眼鏡の上から、そっと指で眉間を押さえたきりだった。

「どう、でしたか」

「とりあえず、スタッフにこちらへの招待状を出した相手について 尋ねてみた」

声をひそめつつ、師匠が見せたのは、あの金庫のところに置かれていた封筒であった。

「これは何人かに配っているフリー枠用の招待状ということだ。時 折新しい客を招くために、こうした招待状を出しているらしいな。 おかげで、向こうもこの招待状がもともと誰のものかは分からない らしい。......とりあえず、カウレスに留守をまかせてる」

残りは後で話そう、という風に師匠が目配せした。

そこで、動きがあった。

「もうひとつ、お見せしましょう」

と、オークショナーが口を開いたのだ。

続けて、無表情なスタッフが新たに透明な筒を運んできた。

「掠りゃく取しゅの魔眼」

と、オークショナーは内側に浮かぶ眼球を呼んだ。

途端、手にしていたカタログに新たなページが生まれたのだ。眼球の写真とことこまかな説明が浮かび上がるのに合わせて、オークショナーもまた言葉を続ける。

「名の通り、視界に入った者の生命力を直接奪う魔眼です。クラスとしては『黄金』に位置します。いささか古いものですが、保存状態については申し分ありません。ですが、魔眼の性質上、宿主に牙を剝く可能性もございます。過去ふたりの被移植者が三年内に瀕死にいたり、当スタッフの手で摘出されておりますので、入札される方は契約書の責任制限条項をよくご確認くださいませ」

淡々と流れる説明に対し、食堂車に広がる魔術師の呻きはさざ波 のようだった。

師匠も、胡乱な表情で口元を押さえた。

「……さすが、は、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンか」

「それほどの、ものなんですか」

「さっきの炎焼だけでも、大したものだったんだけどね」

対して、イヴェットは爛らん々らんと隻眼を輝かせていた。わけのわからないといった表情をしていたろう自分を見やり、くいくいと人差し指を動かしたのである。

「ほら、そこのオルガマリーさんとかも途端に顔色変わったで しょ? なんせ、黄金は通常のノウブルカラーのさらに上位だか ら」

「通常のノウブルカラーの、さらに上?」

「ひとつ間違えれば、封印指定ものだ」

と、師匠が引き取った。

その言葉に、自分も覚えがあったので、つい訊き返してしまっ た。

「封印指定って、前に橙子さんがなってたっていう?」

「ああ。時計塔の技術じゃ魔眼だけ確実に摘出できるとは限らないからな。本人ごと保管した方が楽というわけだ。二度と生まれないような魔眼は本人だけの財産ではなく、魔術協会すべての公共なものである、というわけだな」

片目をつむり、師匠が説明する。かすかに声音が堅いのは、そう した時計塔の行状を肯定しているわけではないからだろう。

ひどく真剣な面もちで、こう付け加える。

「さらに上には、『宝石』と呼ばれる位階の魔眼もあるそうだが、 そのへんになると、実在を疑われるレベルだな。あるいは一派を率 いる君主ロードならば密やかに持ち合わせているかもしれないが。 ……魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのオークションの面目躍 如、というところか」

「いやいや先生、あたしもまさか、ふたつめで黄金を持ってくるとは思わなかったですよ。これは期待がもてますね。それこそラストには宝石の魔眼が出る可能性だって.....」

そこまで、イヴェットが口にしたときだった。

「『虹』の魔眼は?」

と、声があがったのだ。

立ち上がった少女は、オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア。いまだ幼さすら残る年齢ながら、凜とした姿はほかの魔術師たちが霞むほどの覇気に満ちていた。

「なんでしょう」

「今言った通りよ」

と、少女はたたきつけた。

強気な瞳でオークショナーを睨みつけ、むしろ静かに言葉を紡 ぐ。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンであれば、伝説の最上位たる 虹の魔眼も管理しているんじゃないの? たとえば……極東に現れ たという直死の魔眼とか」

今度は、呻きではすまなかった。

がたん、と硬い音がして、誰かが席から立ち上がったのだ。

事もあろうに、それはかの法政科の魔術師──化野菱理であった。

(直死の魔眼?)

その名は分からない。だが、魔術師たちがそこよりも前──虹の魔眼という言葉に気を奪われているのは分かった。最上位。つまり / ウブルカラーどころではなく、実在が疑われているという宝石の魔

眼よりも、さらに上だと。

黄金。

宝石。

そして、虹。

名前だけで並みいる魔術師たちを怖れさせる、最上位の魔眼。

「本日この場では、お答えしかねます」

と、オークショナーは口にした。

ない、とは言わなかった。あくまで、本日この場では。

それこそ神メ話ドのゥ怪ー物サの瞳にでも睨まれたみたいに、周囲の魔術師たちは一様に硬直していた。──驚くべき事に、化野菱理さえも例外ではなく、ひどくぎこちなく席に戻ったのである。

異様な雰囲気に満たされた食堂車で、

「ふうん、ふうん」

イヴェットが、何度か囁いた。

その隻眼が常ならぬ光を宿していた。

「この場でアニムスフィアを見るのは初めてだったけど、なるほど何か目当てがあるのかな? だったらちょっと面白そう」

最後に、これは小さな声で呟いたのだ。

「……でも、本当に直死の魔眼なんてあるのかな? いや仮にあったとしても、それは本当に魔眼なのかな? どうかな?」

はたして、朝食を兼ねた下見会はそれで終わりだった。

誰もそれ以上の会話をすることはなく、三々五々と散っていった。いくつかの食事はカウレスのためにバスケットに包んでから、自分と師匠も廊下に出た。

食堂車と客車の間は、まるまるひとつの車両を利用したロビー室 が設けられている。

柔らかな絨毯も革張りのソファも何ひとつ変わらないのに、びりびりと皮膚を刺すような異質の恐怖があった。魔力や敵意でもない。しかし、溶液に浮かんだ魔眼を見た今では、この列車のすべてが不吉に感じられてならなかった。

息をするのも、どこか胸苦しい。

先を行く師匠の踵を追うようにして、ふと視線をあげた。

「カウレスさん」

廊下に、眼鏡の少年が立っていたのだ。

「先生。グレイさん。……顔色悪いけど、そっちは大変だった?」

「あっ、いえ、大丈夫です。ちょっと気分が悪くなっただけで」

お人好しそうな顔を見ると、ほっとした。

ただ、この少年はあまり時計塔向きではないかもしれないとも思った。魔術師に向いてはいても、彼のいるべき場所はもっと別にあるのではと、そんなことをとりとめなく。

「ならよかった」

こちらの返事に、少年は淡く表情をゆるめた。

それから、

「先生。これがさっき、扉の間に」

と、白い封筒を差し出したのである。

「手紙?」

「はい。すぐ扉を開けたんですが、そのときにはもう誰の姿も見あ たらなくて。すいません」

「いや、かまわん。そういう風に接触してきたということは、どうせ捕まってもいいように即席の使い魔か何かを使ってるだろう」

言って、封蠟を破る。

内側の手紙を開き、その手が硬直した。

『招待状に気づき、この場に来てくださったこと、光栄に思います』

と、冒頭は書かれていた。

そんな風に始める相手を、自分はひとりしか思いつかなかった。

「......師匠」

「ああ。例の盗人からだな」

ひどく冷たい面もちで、師匠がうなずく。内側に渦巻く制御できない感情を、可能な限り凍りつかせてしまおうとするようだった。

「まずは、ゆっくり吟味させてもらって―」

「一ロード・エルメロイII世」

麗らかな声が、自分たちを引き留めたのである。

振り返った先に、さきほど魔術師たちの注目を集めた少女が佇ん

でいた。

「ミス・アニムスフィア」

銀髪をかきあげ、天体科アニムスフィアの君主ロードの娘は、こちらを見据えていた。

どこか、猫に似ている、と自分は思った。同じお嬢様でも、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトとはその在り方が異なる。あの令嬢が大地の底で見いだされ時間をかけて磨き上げられた宝石とするなら、彼女は多くの貴族とともに歴史を見据えてきたアビシニァンのごとき趣があった。

「少し、話をさせていただいてかまわない?」

高慢な口調で、少女が言ってきたのだ。

「残念だが、あなたの眼鏡にかなうような話ができるかどうか。それに、情報交換は諦めたのでは」

「状況が変わったからよ。それに、この話は時計塔であなたが最も 適任と思うわ」

「ほう」

リラックスを装って下ろしていた師匠の指が、次の刹那、かすか に震えたのだ。

オルガマリーは、まるで古い魔術のように、こう口にしたのである。

「なにしろ、聖杯戦争のことだもの」

\*

化野菱理は、法政科に属する魔術師である。

時計塔には、メインとなる学術方針が十二科存在するが、法政科はこのどれとも性質を異にする。なぜならば、法政科が司るのは学

問ではなく、時計塔の運営方針そのものだからだ。

さらに細かく言えば、この運営方針も三つに分けられる。

つまり、魔術世界の保全、魔術師たちの取り締まり、そして社会への橋渡しである。

いずれにせよ、法政科が名実ともに『魔術師を統べる魔術師』であることは間違いない。多くの君主ロードの家系は自らの子供たちを法政科へと送り込むし、法政科もまた惜しみなく帝王学を授ける。たとえ十二家や三大貴族に連なる者でなくても、法政科というだけで誰もが緊張を余儀なくされるのはこのためだ。

そして、今。

「本当に……虹の魔眼が出品される……?」

アニムスフィアの娘が言い出したことに、菱理は形の良い眉をひ そめた。

さすがに、振り袖の女も半信半疑──いや九割九分はありえないと 結論せざるを得なかったのだ。法政科の彼女にしたところで、虹の 位階の魔眼など伝え語りにしか聞いたことのない代物なのである。

しかし、だからといって見過ごせるわけもなかった。

仮に本当だとすれば、ことによったら時計塔のバランスを崩しか ねないほどの衝撃が、虹の魔眼という言葉にはあったから。

「.....いいえ」

と、かぶりを振る。

(問題は、どのような魔術が内に蔵されているか、ね)

ノウブルカラー。

おおよそ『束縛』『強制』『契約』『炎焼』『幻覚』『凶運』などに代表される、他者の運命そのものに介入する特権行為。

しかし、『黄金』以上の魔眼には、現代では失われた大魔術が蔵されていることも稀ではないのだ。まして、それが『宝石』や

『虹』ともなれば、大魔術以上の──古今のあらゆる魔術ですら再現できない神秘が秘められていることすら考えられる。

それこそ、神霊の行う権能といわれる類である。

(もしも、直死の魔眼なんてものがあるなら、バロールの権能に も.....)

そんなものが実在するかどうかは、菱理も知らぬ。

だが、小耳に挟んだ噂が真実ならという仮定で、推測することはできる。

つまり、一睨みで死おわりを確定させる桁外れの異能。万物にはすべて綻びがある。この世に完全な物体などないのだから、みんな壊れて一から作り直されたいという願望がある。そうした綻びを引きずり出させてしまう、古きケルトの神バロールが所持したとされる、越権行為の象徴。

その代限りとはいえ、十二家の源流刻印や至上礼装さえ上回りかねない。

「こうもたてつづけに、関わってくるとはね」

小さく、ため息をつく。

「いかな君主ロードとはいえ、現代に残った神秘を刈り尽くすつもり? ロード・エルメロイII世......?」

\*

部屋の扉を閉めて、師匠はふたりの客にソファをすすめた。

カウレスと自分はさすがに場所がなかったので、ベッドへと腰を下ろす。もともと三人用の部屋だけあって、ひとつの車両を三分割にしたきりの豪勢なつくりなのだが、五人も入るといささかの圧迫感がある。

師匠は、両者の中間に配されたアームチェアへと座り、ことさらゆっくりと尋ねた。

「─なぜ、あなたが聖杯戦争を?」

取り繕ってはいたものの、声音はわずかに硬い。

対して、オルガマリーの代わりに、付き人のトリシャ・フェローズが眼鏡を持ち上げて答えたのである。

「エルメロイの先代は話題になりましたので、アニムスフィアの方でも資料を揃えた時期がございます」

十年前。第四次聖杯戦争のことだ。

先代のロード・エルメロイ──そう、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが命を落とした戦い。あるいは、今代のロード・エルメロイII世──師匠が生き残り、今の彼となりおおせた戦い。

そんな以前から、あるいはもっと昔から、アニムスフィアは師匠たちのことを観察していたのか。もちろん同じ君主ロードである以上、ケイネス師のことを調査していたのは当然のなりゆきでもあるのだろうが、ぞっと背筋を冷たいものが走るのは止められなかった。

時計塔というものの本質に、ほんの少し、触れた気がした。

「ふむ。十二家の中でも、アニムスフィアは星々の動き以外興味を もたず、山にこもっているものかと思っていたが」

「ここだって星のひとつですから」

師匠の言葉に、今度はオルガマリー本人が答えた。

きりりとした琥珀色の瞳が、下から師匠を睨めつけていた。値踏 みするようというよりは、挑みかかるような目つき。

「それに、引きこもってても耳に入るぐらい話題になってるわ。十年前ロード・エルメロイが死んだ聖杯戦争に、こともあろうかII世までも挑みたがっているって。もうニヶ月足らずで開始されるはずの、第五次聖杯戦争の時計塔枠に志願したんでしょう?」

「あいにく、そっちは蹴られたようだがね。今回の時計塔枠はふたつに増やしたようだが、それでもガリアスタと封印指定局が持って 行ったようだ」

もちろん、アトラム・ガリアスタは自分も知っている。

封印指定局は、確か封印指定に選ばれた魔術師を確実に捕縛するための組織だったはずだ。純粋な魔術の技量ではなく、逃げ回る在野の魔術師を狩るための戦闘力によって選ばれるゆえに、聖杯戦争にはもってこいだったのだろう。

「それでも、あなたが志願したのは事実よね。ええ、なんでも願い を叶えるとかいう胡散臭い聖杯に執着があるわけ?」

#### 「.....さて,

「違うわよね。確かに、何かのインチキで英霊を呼び出してはいた みたいだけど、魔術では遅れた極東の儀式よ。そんな超抜級の代物 があるとは思えない」

腕組みして、オルガマリーがとんとんと人差し指を動かす。

自らの二の腕を叩きつつ、薄く目を細めて、こう続けたのである。

「だったら、あなたの目的はあの儀式自体にあると考える方が適切。ええ、三流の新世代ニューエイジであったあなたが、あの戦いを経てどういうわけか別人みたいになって、エルメロイ教室まで取り仕切ったのよね。ばかりか、あれだけ内紛繰り返してたエルメロイ派がおおよそ決着つくやいなや、あなたに君主ロードを押しつけた異常……なんか、先代のロード・エルメロイに恩でも売ったわけ?」

「残念ながら、ケイネス師の最期には立ち会うこともかなわなかったよ。死ぬ直前まで、私のことは度し難い愚か者と思っていたろうね」

# 「.....つ」

自分は、声を押しとどめるので精一杯だった。

ここまで、師匠が注目されていたとは。

あのアトラム・ガリアスタもいろいろ話していたことを考えれば、おそらく時計塔での調査結果は一定以上の位の人間には開示されているのだろう。ライネスも言っていたようなことだから驚くまでもないと、師匠は達観しているようだったが、自分は到底そんな心境にはなれなかった。

「とにかく、あなたはもう一度聖杯戦争に挑もうとしてる。かつて 勝ちきれなかった戦いに、そんなに雪辱を果たしたいの?」

「……そう思いたいなら思ってくれてかまわないが、話とはそんなことかね?」

「いいえ、状況の確認をしてるだけよ。気に入らないなら、独り言 だと思っていて」

ひらひらと手を振って、オルガマリーが言葉を続ける。

「ここまでの検討がおおよそ間違いじゃないんだったら、あなたが 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに来たのは、あくまで聖杯戦争 のための戦力補充じゃないの? 時計塔枠ででないならこっそリフリーで出るしかないし、だったら先代のロード・エルメロイみたい に堂々と魔術礼装を持ち込むわけにいかないでしょう。ええ、呆れたことにケイネス・エルメロイ・アーチボルトってば、当時のエルメロイの貴重な礼装を湯水のように注ぎ込んだんでしょう?

鉱石科キシュアにふさわしい数多の宝石・鉱石はもちろんのこと、降霊科ユリフィスでも迂闊には手をつけぬような悪霊・魍もう 魎りょうの類、あげく君主ロード専用に調整された魔力炉まで三基 運搬していたとか。それがビルごと爆破されたとかいうんだから、聞いただけでぞっとするわ。いくら当時のエルメロイ派だって身代が傾くわよね」

# ( .....)

自分は、そんなふたりを茫然と見つめている。

彼女の用心深いやり方を、自分はどこかで知っている気がした。

# (.....ライネスさんも)

あるいは、かつてのライネスも、同じように時計塔で生きていた のかもしれない。 自分が彼女と会ったのは、師匠との関係も長くなった……ある程度師匠に押しつけられるようになった後だから、はっきりとは分からないけれど。

(.....だから、ライネスさんは師匠を手放したがらない?)

彼女から預かったカードと携帯電話を、密かに押さえた。列車が 出発してから、電波は途切れてしまったが、話通りならオークションの頃には使えるようになってるだろう。

同時に、少しだけ安心できた。

彼女が手放そうとしないなら、まだ大丈夫だと思えたから。

そうでもないと、師匠このひとはどこかに消えてしまいそうな気もしたから。

「……本当に、ずいぶんお詳しいようだ。まさか、アニムスフィアがそこまで俗界に興味がおありとは」

「星の外を見つめることも、表面を見つめることも本義は一緒よ。 ただ、ここまでの考えが間違ってないんだったら、ひょっとしたら 共闘態勢が築けるかと思ったのよ」

「共闘ね。少なくとも聞こえはいいな」

「そうでしょう? もともと、アニムスフィアはエルメロイと同じ 貴族主義だもの」

「貴族主義、か」

師匠が、淡く唇を歪める。

派閥まわりについては、思うところがあるのだろう。そもそもエルメロイ自体は貴族主義だが、師匠自身の出身ややり口を考えると、むしろ民主主義の方がしっくり来る。そんな理由から、バリュエレータなどが引き抜きにかかるのだろうけど。

改めて、オルガマリーが師匠を睨めつけた。

「少なくとも、単に戦力補充が目的だとしたら、あなたは虹の魔眼が欲しいわけじゃないでしょう? だったら、こちらとも利害は一

致するはずよ」

「……どうしてかな? 伝説上にしか存在しない魔眼だ。おそらくはほかの君主ロードも持っていないような逸物だぞ。どんな能力かは分からぬにせよ、手にはいるなら誰だってほしがるだろう」

「だって、能力は分からなくても、虹の魔眼というだけで十分な値段になるはずだもの。今のエルメロイ派に賄うほどの財力があるとは思えないわ」

「ずけずけと言ってくれるな」

苦笑して、師匠は肩をすくめた。

それでも不快そうではないあたり、確かにこういう相手は嫌い じゃないのだろう。少なくとも、いちいち言葉の裏を探らなくても いい分は楽かもしれない。

「つまり、本当にあなたは虹の魔眼が出品されると信じてるわけか。何か、事前に情報を得ていたのかな? 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが外部に情報を漏らすとも思えないが」

Г......

しばし、オルガマリーは沈黙した。

それから、隣の付き人へ目配せし、こう口にしたのである。

「いいわ、トリシャ。それぐらいはこちらの札を晒した方が話もス ムーズでしょ」

「分かりました」

主人の言葉にうなずき、付き人のトリシャ・フェローズはすうと 手を持ち上げた。

「私が、視たからです」

眼鏡を外すと、美しい瞳が露わとなった。

いや、その奥底に潜む鮮やかな輝きこそが、自分たちの意識を吸 い付けたのである。一種異様な煌めきを、ついさきほども自分は目 にしていた気がして......彼女は、至極ゆっくりと申し出た。

「ああ、ちょうどいい。エルメロイII世様、右手をあげていただけますか」

「こうかね?」

椅子に座った師匠が、特にあらがいもせず、真っ直ぐ右手をあげた。

「ええ、できたらもう八秒ほど。七、六、五、四─」

「一わっ」

隣で、カウレスががたんと姿勢を崩した。

緊張のあまり、ベッドからずり落ちたのだ。その拍子に流れた手が枕元に置いていた空の水差しを叩いて、水差しは鮮やかな放物線を描き一まるで何かの実験みたいに、師匠があげていた手へとおさまった。

しばし茫然と水差しを見やってから、師匠はその答えを導き出す。

「魔眼、かね」

「広義にはそうなるでしょう。私の瞳は、予測の未来視です」

「……未来、視?」

茫然とした自分に、師匠が囁く。

「文字通りだよ。未来を視る瞳。今のトリシャの説明通り、広義に とれば魔眼の一種と言われてる」

魔眼。

狭義には、炎焼や魅惑といった術式投射を行うか否かで、感受型の未来視や過去視は除く場合もあるんだがね.....などという細々とした説明は、自分の耳には届いてなかった。

ただ、ここにもひとり、と喉を石のようなものが滑り落ちる感覚があった。

見えざるモノを見る者。

ある意味で、視覚そのものが別の世界とつながった人間。

この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで長い間売り買いされて いるという、異能とくべつ。

「私は三ヶ月ほど前、今回の魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの オークションに、虹の魔眼が出品されるところを視たのです」

「視た、か」

と、師匠が呟いた。

「理屈よりも結果が先にある。未来視らしい言葉だ。だが、予測の 未来視はごく不安定なものだろう。あくまでそうした可能性もある というに留まるはずだ」

「だから、あの場で確認を取りたかったのよ」

オルガマリーが、傲ごう然ぜんと胸を張った。

「そして、これほどの大事をオークショナーは否定しなかった。あ の場の全員がありうると思ったでしょう」

Г......

今度は、師匠が沈思する番だった。

この列車に乗る前、「狙いの魔眼があるのか」と真っ直ぐオルガマリーが訊いてきたことを考えると、こうしたやり口が彼女の常套手段なのだろう。杜ず撰さんにも思える手法だが、陰謀渦巻く時計塔を考えると、案外効果的かもしれない。少なくとも、敵と味方ははっきりしてくるだろう。

「なるほど。それで、もう一度こちらと接触を取りに来たのか。狙いがぶつからないと確信が持てたなら、互いの負担を軽減することもできるとは、私も言ったことだ。……では、私にどのように協力してほしいのかな?」

「虹の魔眼が出てきた場合、ほかに入札するような馬鹿が出てきたら、あなたにも入札してほしいのよ」

「ほう? そんな金はエルメロイにないと断言したのに?」

「だって、ふたつも君主ロードの家系を敵に回そうだなんて馬鹿な魔術師、滅多にいないでしょう? ほかが下りた後、あなたもさっさと下りてくれれば、被害は最小限ですむわ」

つまり、資金よりも権力で押さえ込むつもりらしい。

理屈は自分にも納得できた。師匠の場合ちょっと疑問符もつくが、時計塔に冠たる君主ロードの肩書きは伊達ではない。ひとつずつならまだしも、ふたつの家系から同時に睨まれる愚は誰もが避けたいところだろう。

「できれば、ほかの魔眼でも積極的に入札して、周囲の資金を疲弊させてほしいけれど、そこまでは望まないわ。エルメロイにしてみれば、一銭も出さずにアニムスフィア私たちに恩を売れる機会じゃないの?」

高慢そのものの物言いに、師匠は何らの感情も見せず、唇を動か した。

「ひとまず、話は承った」

言質は与えない。

だが、それでアニムスフィア側は納得したらしかった。

うなずいたオルガマリーが踵を返しかけて、ふと動きを止めた。

「どうしたの、トリシャ?」

「少し、私もエルメロイII世様とお話しして、よろしいでしょうか」

「ふうん。別にいいけど。じゃあ、先に部屋で待ってるわよ」

銀髪をなびかせ、オルガマリーが去っていく。

残されたトリシャが、扉が完全に閉まってから、師匠へと口を開いた。

「ひとつ、尋ねておきたいのですが」

「何かな?」

「主は、あなたが第五次聖杯戦争に参加しようとしているのを、かつての雪辱を果たしたいのだろうと考えてましたが、私は少し違う 考えを持っています」

「……ほう。よろしければ、その考えをお聞かせ願えるかな」

水を向けると、トリシャは淡い笑みとともに、囁いた。

「生死を賭けた戦いを乗り越えた者が、人格を一変させるのは稀ではありません。ですが、それにはきっかけが必要でしょう。もしも先代のロード・エルメロイがそれにあたらないならば、あなたに影響を与えた者は別に必要になります。聖杯戦争の調査結果には目を通しました……十年前の第四次聖杯戦争、あなたと戦った英霊も存じています」

びくり、と師匠の指が動く。

自分とカウレスも、これには息を止めざるを得なかった。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗り込んだまさにその本題を、トリシャは口にしていたからだ。

付き人は、ただ淡々と言葉を紡ぐ。

「ええ……人類史に刻まれた英霊などは、ひとりの人生や人格を塗り替えるに十分な強度を持っているでしょうとも」

ぞくり、と背筋から刺された気分だった。

未来視の魔眼と、彼女は言った。その力も示した。

だが、それ以上の洞察力がこの付き人には眠っているような気がして。

「なかなか面白い推察だな、レディ」

と、師匠は返した。

「だが、あくまで、それは推測だ。何かしら証拠があったわけじゃない」

「もちろんです」

トリシャも認めた。

「ですので、これもただの推察と思って、お聞き流しください」 そう前置きしてから、続けたのだ。

「もしも、もう一度英霊を──サーヴァントを呼びだしたとして、かのサーヴァントにはあなたと駆けた記憶などないのでは?」

「え」

間抜けな声は、自分のものだった。

ずっと我慢していたのが、不意打ちに耐えられず、こぼれてしまったのである。

そんな自分をちらりと見やり、トリシャはさらに言葉を続けた。

「英霊については、ある程度降霊術での知識がございます。ええ、本体たる英霊の座にはあなたとの記録も蒐集されているでしょう。座では時間も空間も確定せず、そこにおわす本体は膨大な記録を蓄える。……ですが、だからこそ、現世に召喚されるサーヴァントはいちいちあなたとの記録など保持しないはずです。サーヴァントが記憶するのは生前デフォルトの知識と、世界が付与する現代に必要な事柄。後は幾分の調整事項のみ。英霊の座が時空を無視して情報を集積する以上、そうでもないと知識に矛盾が生じてしまいますからね」

ああ、こんなのはあくまで仮説ですけれど、と鮫のように笑う。

「仮説.....?」

ひどく、足下がふわふわしていた。

何かを為そうとしていたのに、根幹から間違っていたと知らされた感覚。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの絨毯が引き裂けて、

奈落の底まで堕ちていってしまいそう。気を確かに持とうとしなければ、今にも膝からくずおれてしまうだろう。

「そうです。仮説ですとも。でも、もしもこの仮説に例外があると すれば」

前置きして、トリシャが語る。

「たとえば、あらゆる時系列から切り離された特異点ときのはてや、世界から隔離されたある種の固有結界。そんな状況でもない限り……あなたの夢は果たせないのでは」

Г......

師匠は、何も言わない。

ただ、強い風でも受けるように、ほんの少し目を細めただけ。

「ああ、それとも、基になる召喚形式からごっそりと変えてしまいますか? そうなると、術式の基点となる大聖杯をもうひとつつくることになるでしょう。実に君主ロードにふさわしい大事業ですね。いやいや、いっそのこと冬木から奪うなどいかがです。実に魔術師らしいではありませんか」

「……アニムスフィアが、そのような興味を持っていたとは驚き だ」

あくまで、師匠の声音は静かだった。

だからこそ、自分は辛かった。

驚いてほしかった。苦しんでほしかった。そんなことがあってたまるかと、泣き叫んでほしかった。なのに、師匠の様子は、トリシャの言葉などとっくの昔に承知していることだと、嫌でも分からされるだけの平静さを保っていた。

「改めて訊いておこう。虹の魔眼と一口にいっても、さまざまな『力』があり得るだろう。あなたがたは、どのような虹の魔眼が出品されると視たのかな」

Г......

一瞬、トリシャは眼鏡の奥の目を細めた。

それから、かぶりを振った。

「そこまでお伝えする必要はないかと思います。いかな魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンといえども、一度にふたつも『虹』の位階の魔眼を用意できるとは思えません」

「なるほど。それは道理だ」

苦笑して、師匠も踏み込むことはしなかった。

どこか困ったような、いつもの笑みだった。案外、その苦笑に何かを感じたのかもしれない。

「一エルメロイII世様」

と、彼女が呼びかけたのだ。

「人間は情報に依存して生きて、情報に縛られて死ぬものです。中でも、視覚は最大の情報量を有します。ゆえ、魔眼を持つということは、魔眼に縛られるのを受け容れることです。もしも、私どもと違う魔眼をお買い求めになるなら、そのことは重々お考えになられるがよいかと」

「ご忠告痛み入る」

丁重に、師匠が頭を下げた。

それきりで、付き人も去っていった。

ぱたん、と扉が閉じてから、

「......師匠」

自分の震えた声に、師匠は少し間をおいて振り返った。

こらえたつもりでいたけど、ひょっとすると泣きかけていたかも しれない。あの付き人が残した言葉は、それだけの破壊の爪痕を残 していた。

そんな自分に、師匠はなんとも複雑な顔で問うたのだ。

「ひょっとして、私と聖杯戦争について、何かライネスに吹き込まれていたのかね」

「いいえ」

と、自分はかぶりを振った。

「いいえ、いいえ。でも、そんな.....」

「サーヴァントは前の召喚の記憶を持ち合わせない、か」

どこか歌うように、師匠が口にする。

「これでも君主ロードだ。それに聖杯戦争のことはずっと調べていたからな。さっきの話など、ずっと前から心得ている。君は、そんなことを気にしなくていい」

#### 「だけど」

初めて、二度も師匠に抗弁した。いや、以前にもあるかもしれなかったが、こんなすがるような言葉じゃなかったと思う。

とにかく、それだけは絶対受け容れられないのだと、言いたかった。

# 「まったく」

と、師匠は葉巻を手に取った。

微苦笑を浮かべたまま、ナイフで先端を切り落とし、いつものようにマッチの火を擦り付ける。一連の儀式めいた行為でも、今回だけは心が落ち着かない。葉巻の独特な香りが部屋に満ちても、自分は泣いてしまいそうなままだった。

「─あの、先生」

### 「カウレス」

歩みでたのは、先までずっと黙って話を聞いていた少年だった。

「俺、聖杯戦争については詳しくないです。それに、事情もよく知らないから、全然見当違いのことを言ってるかもしれませんが」

と、前置きして、少年はこう続けたのだ。

「思い入れた相手がいるなら、その相手に覚えていてほしいと思うのは、当然じゃないでしょうか。まわりの方だって、そうあってほ しいと思うのが、普通じゃないでしょうか」

とても真っ直ぐに、カウレスは踏み込んだ。

対する師匠は、淡く唇をほころばせた。

「そうだな。別に私も、忘れられてもかまわないとか思ってるわけ じゃないとも」

煙をくゆらせ、その視線が天井近くを彷徨う。

「ただ、それでも会いたい相手はいる。確かめたいことはある。この十年のその先へ歩くために、終わらせておきたいけじめがある。……うん、少なくとも聖杯戦争については、ただそれだけの、ちっぱけなこだわりなんだ。互いの記憶に残っていて、互いに思い出を嚙みしめられるなんて、そんな幸せはいくら後払いでも報われすぎだろう。私の人生じゃ払いきれないさ」

しみじみと、師匠は言う。

葉巻をくわえ、独特の香りの煙を纏い、何でもないことのよう に。

## 一自分は。

かぶりを振りたくて。

そんなことはないと否定したくて。

でも、師匠があまり困ったように笑うものだから、何も言葉 にならなかった。

「どう、思いますか」

と、改めてカウレスが尋ねた。

「さっきのオルガマリーさんが、あの招待状を残した相手だと思い ますか」

「さて。普通に考えれば、こんな回りくどい手は打たないが。聖遺物の話まで振っておいて、盗まれたことを知らないふりをする意味 もなかろうし」

ただ、魔術師に限っては「回りくどすぎる」とか「意味がない」とかの発想は、一定までしか役に立たぬ。可能性としては低いが、 それ自体何らかの魔術の一環ということもあるからだ。

「ひとまず、この手紙だ」

と、さきほどカウレスが見つけた封筒を持ち上げた。

続きに目を通し、結論を短く口にする。

「夕方に最後部車両に来い、とさ」

「……じゃあ」

「ああ」

と、師匠はうなずいた。

「ここまで来たんだ。お招きに応じようじゃないか」

**一**しかし。

はたして、夕方より前に異変が生じた。

三人であれこれ話や準備をしている間に、突然、魔眼蒐集列車 レール・ツェッペリンが停止したのである。

「列車が.....?」

意味が分からず、頭を巡らせていると、車内アナウンスがこだました。

「車掌のロダンでございます。当列車はこの地に二時間ほど停止した後、再び出発いたします。皆様におかれましては車内で滞在されるも、車外を散策されるもご自由にお過ごしくださいませ」

「……どうやら、定期的に停まるようだな」

と、師匠が口にした。

それも、オークションまでのスケジュールの内なのかもしれない。

「ひとまず、降りてみるか」

「あ、はいっ!」

「じゃあ、俺も」

師匠の言葉に、自分たちも部屋を出て、タラップを降りていった。

到底、駅と呼べるようなものではなかった。

そもそも線路が走っているのが不思議なぐらいの、鬱蒼と茂った 森のただ中である。列車の前後のみ樹木が見られないのが奇跡的な ぐらいだ。草むらに埋まった線路は赤錆びていて、ほとんど森と同 化しているように見えた。

頰を、涼やかな風が撫でる。

森の外は窺えなかったが、それでも清涼な風だけは気分をよくしてくれた。

「はっはー! いい空気ではあるな!」

我先に降りていたらしい伊達男が、両手を広げて、息を吸う。

「ジャンマリオと言ったか」

「おお。時計塔の君主ロードに覚えていただけるとは、光栄」

くるくると帽子を外しながら回し、白いジャケットの男が一礼する。

テレビに出ているせいか、この男の仕草はとにかく大仰でわざとらしい。気障な顔に貼り付いたような笑顔は、師匠のそれよりもずっと朗らかなのだけど、自分はあまりなじめなかった。

「いやいや、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは初めてですが、何かとサービスも行き届いてますな! 車窓が霧ばかりなのはいささか退屈と思ってましたが、このように車外も楽しませてくれるのは悪くない。もう少し、華やかな場所で降ろしてくれればなおよいんだがね」

声高な台詞は、半分本気、半分あてつけと言ったところだ。

自分としては、こういう野外の方がいろいろ落ち着くのだが、嫌がる向きもあるのが自然とは思う。

「まあ、それでもサンドイッチの味はさすがですが」

と、ジャンマリオは設置された椅子に座り、瑞々しいフルーツサンドをぱくついている。

ほかにも、何人かの魔術師が列車を降りていた。ジャンマリオが楽しんでいるように、近くにはいくつかのテーブルが置かれ、サンドイッチなどの軽食も用意されて、きちんとした体裁を保ってい

る。

「法政科の女狐は出てこず。アニムスフィアの娘はちらとだけ確認 して、車内に戻ったようですな」

師匠の興味を汲み取ってか、ジャンマリオがぺらぺらと喋る。このあたり、テレビで芸人をしているだけあってか、空気を読みとるのに長けているらしい。

もうひとり。

聖堂教会の老人──カラボーはほかと距離をとって、紅茶を飲んでいた。

さっきの下見会のようなことがなければ、誰に歩調を合わせることもなく好きにしているのは、大変魔術師らしいとも言えたかもしれない。

そこで、ふと隣を振り向いた。

「......師匠?」

配置されたテーブルの先。

森の狭間に、師匠は歩み寄っていった。

茂った枝葉をそっと手で払いのけると、むっと草を蒸したような臭いがした。折り重なった緑の向こうは少し開けた空間になっており、群生した茸が、綺麗な輪を描いて傘を伸ばしていたのだ。

「妖精の輪フェアリィサークル、か」

「──お、いつものですねえ!」

ひょこっと首を伸ばしてきて、イヴェットが言った。こちらの少女も、自分たちと同様に車両から降りていたらしい。

ピンクの髪に眼帯の級友へ、カウレスが尋ね返す。

「知ってるのか? イヴェット」

「この列車は霊脈レイラインに線路を形成してるみたいなんです よ。多分、魔力の維持に活用してるんじゃないですかね。で、時々 停まる場所もある種のパワースポットになってるわけです。んふふ、妖精紀行とかいうとちょっと格好いいですが、ハネムーンとかどうですか先生!」

「……ああ、なるほど。英国で霊脈レイラインを辿れば、妖精絡みになるのは当然か。観光というよりは補給という方が正確だな」

ごく自然にイヴェットの発言の最後は無視しつつ、師匠が感想を口にした。

停止した列車を、ちらりと見やる。

「当たり前だが、この列車もこの列車なりのルールで動いているわけだ」

師匠の言葉が、妙に腑に落ちた。

死徒がつくったとかいうだけあって、常識外れという点において は、あの剝ア離ド城ラや双貌塔イゼルマをも大きく超えている魔眼 蒐集列車レール・ツェッペリンだが、それでもこの列車なりのルー ルは存在するということ。

多分、この世界のすべてに、そうしたルールは存在するんじゃな いだろうか。

人には人なりの。魔術師には魔術師なりの。

死者には死者なりのルールが。

思考を振り切ろうとかぶりを振ったところで、自分は瞬きした。

「グレイ?」

「……いえ。何か、見えた気がして」

と、自分は目を細めた。

木々の向こうだった。

これまで、列車内では見た覚えのない白い女が、霧の狭間に佇んでいた。ばかりか、女の周囲には色鮮やかな花弁が波打ち、まるで別世界のごとく飾っていた。

薔薇である。

その白い女の佇むところ、真紅の薔薇が何十と咲き誇っていたのだ。周囲だけでなく、美しく巻かれた金髪にも絢けん爛らんたる薔薇の冠が掲げられ、まるで花の化身かなにかのようにさえ映った。

すう、と女の顔があがる。

研ぎ澄まされた緋色の瞳が、自分のそれと合って......

(.....え?)

次の瞬間、女は消えていた。

どころか、

「んんん、内弟子ちゃん?」

「どうかしたか?」

隣のイヴェットと師匠が、そろって眉を顰めたのだ。

どう考えても、見落とすような相手じゃなかっただけに、自分も 狼狽えてしまった。

「え、でも、今、赤い薔薇と白い女ひ性とが……」

「それは、当列車の支配人代行でございますね」

しどろもどろに指さすと、意外なところから助け船がよこされた のだ。

列車に乗り込んだとき挨拶された、瘦せぎすの車掌であった。確 か、名前はロダンといったはずだ。

「支配人代行?」

猛烈な勢いで、師匠が振り向いた。

そうだ。もともとの招待状には、そのように署名されていた。だからこそ、乗り込んですぐ、師匠がその存在を確認しようとしたのだから。

「ええ。支配人が立ち去られてから、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを守っていらっしゃいます」

しみじみと、車掌が言う。

「我らも滅多に会える方ではないのですが、あなたはただの魔術師 とは異なる感受性をお持ちのようですな」

感受性。その意味は、なんとなく分かった。

たとえば、それは土地の奥底に染み渡った──ほとんどの魔術師で も感知できぬほど薄まった思念を感じ取る能力。自分があの故郷に いられなくなった理由。

「……支配人が立ち去られたというのは?」

師匠が、こちらの疑問を先回りして訊いた。

「もともと当オークションは支配人の発案だったのですが、一度トラブルがございまして。それ以来支配人は列車を離れて、代行に委ねられております」

「トラブルですか」

(それは、ひょっとして、来る前に聞いた橙子さんの.....)

熱のこもりかけた師匠の表情とともに、ぼんやりと考えたとき だ。

穏やかな森の空気を切り裂くかのように、少女の声が響きわたったのだ。

\*

叫び声に、すぐさま師匠が反応した。

「グレイ」

「.....はい!」

硬い声に、自分は全速で駆ける。

地面を三歩で跳ね、入り口のバーを摑んで半回転。 ほとんど空中 制動の要領で着地して、そのまま列車内をひた走った。

声の発生源は摑んでいた。

自分の耳なら、このぐらいの距離感は容易に判断できる。

しかし、扉を開いたところで、ぴたりと硬直してしまった。

「わっちゃあ」

「.....おいおいおい」

と、背後から追いかけてきたイヴェットとジャンマリオも低く呻いた。

続けて到着したほかの魔術師たちも、息を吞み込む。それだけ現場の状況は凄せい惨さんで、ある種の人外たる魔術師の精神にも、 一時硬直するだけの衝撃を与えていた。

ぴちゃぴちゃ。

ぴちゃぴちゃ。

びちゃびちゃ、と水音がする。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの豪奢な絨毯を汚して、今も アカイロは広がっていく。

その中心に椅子が倒れ、ひとりのヒトガタが横たわっていた。

トリシャ・フェローズ。

血だまりの中で、彼女は倒れていた。

どう考えても、生存できるとは思えぬ出血量であり、ばかりか彼 女の死体からはあまりにも重大なものが失われていた。

死体から、頭部が欠けていたのだ。

それでもトリシャと分かったのは、生前の彼女と同じ紫のコート

を着ていたからだ。しなやかな肢体と似合う素材が、今は無惨な緋 色に染まり果てていた。

「トリシャ……!」

そのすぐそばで、オルガマリーが膝をついていた。

さきほどの叫び声は彼女のものだろう。いや、そもそも今のトリシャには叫びをあげるべき部位も存在しないのだが。

「れ、列車で……ちょっと酔ってたから……離れて……森の空気を 吸ってたの……」

虚ろな声が、車内を彷徨う。

「そ、それからロビーでお茶して……戻ってきたら、トリシャが……トリシャが……」

呟きに、誰も答えられなかった。

胴体に残っていた血液が、未練がましくまだ零れ落ちて、びちゃびちゃと音を立てていた──



それにとって、世界は泡のように見えていた。

ヒトも、モノも、変わらない。泡の固まりがいくつもいくつも重なって、なんとなくそれっぽいカタチを取っているかのように、彼の瞳には映っていたのだ。消えては弾け、弾けては生まれ、総体としてこの世界は何も変わらないように取り繕っている。

ある意味では、永遠かもしれない。

儚はかない泡の集合体こそが世界なら、儚さの連鎖はいっそ無限に等しい。どれほどに分割しようが、薄れることはあっても消えることはない。プランク時間せつなこそが一生で、同じ数だけの宇宙が弾けて溶けていく。

だから。

いつからなのか、それは覚えていなかった。

ただ、所詮は泡なのだから、触れれば弾けるし、境界をなぞれば 簡単に切り離せてしまう。大小は関係なく、ましてや生物非生物な どなおさらに問題外。それの瞳にとってみれば、何の意味もないこ とだった。

魔眼という名を知ったのは、ずいぶん後のことだ。

ああ。

きっと、それは極限に位置する魔眼なのだろう。

つまり、『虹』の位階の魔眼として―

オルガマリーの横顔は、もはや色を失っていた。

わなわなと震える指が、死体のコートに触れる。血がつくことも かまわず、首なしの死体を揺さぶって、唇が動いた。

「.....トリシャ?」

と、もう一度名を呼んだ。

「トリシャ? トリシャ? 嘘でしょ? なんで」

なんで、と言ったところで、声を詰まらせる。

かは、と息がこぼれた。機能不全になった肺が、それでもかろう じて最低限の役目を果たしたかのように。

「……いつも偉そうだったじゃない。私が問題解けなかったら、嬉しそうに手のひらに鞭打ってたじゃない。なんで、こんなところで寝てるのよ! いつもみたいに人のことを叱りつけなさいよ!」

「オルガマリーさん.....」

思わず、自分も声をかけようとして。

しかし、少女はこちらを振り向きざま、痛烈な勢いで指弾したの だ。

「おまえらが、犯人なの!」

と、叫んだ。

その言葉に気を吞まれた自分たちが二の句も継げぬ内に、

「ふざけないで! トリシャを返して!」

悲痛な叫びが、車両にこだまする。

いかな君主ロードの家系とて、まだ十一歳かそこら。こんな凄惨な現場を前にして、冷静さを保っていられる者などまずいまい。まして、もっと幼い頃から従ってくれた付き人の死ならばなおさら。

だが。

さらに続く言葉に、ただならぬ緊張が漲った。

「お、おまえね! おまえなんでしょ! 聖堂教会!」

少女が叫んだ相手は、寡黙な黒人の老人──カラボー・フランプトンであったのだ。

何人もの視線が集中する中、

「.....あいにくだが」

と、老人はゆっくりとかぶりを振った。

そのまま、彼は別のことを申し出たのだ。

「俺に、検死させてもらってもかまわんかね」

「検死?」

「ああ。専門家ではないが、この手の死体には慣れてる。何か分かるかもしれない。いかがかな車掌殿?」

老人が問いかけたのは、自分たちに少し遅れて駆けつけた列車の 車掌だった。

痩せぎすはこんな惨事にあっても、さして表情を変えていなかった。それとも魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのオークションならば、この程度は当たり前とでもいうのだろうか。オークションが始まる前からライバルを殺し合うのだって、ごく普通の出来事だと。

銀の懐中時計を取り出し、小さくうなずいた。

「……こちらはかまいませぬ。ただ部屋の清掃もございます。発車時刻も考慮いたしますと、一時間の内に終わらせていただきたく存じます」

本当に、当たり前のように言ったのだ。一流のスタッフとして疑いようのない真摯さはあれども、まるで料理をこぼしてしまったぐらいの、あまりにも穏やかな態度で。

だからこそ、少女の反応はむしろ救いに思えた。

「ふざけないで!」

突き出されたオルガマリーの手から、不可視の何かが迸ほとば しったのだ。

魔弾。純粋に魔力を凝集させた──素人の自分の目から見ても、以前のライネスのそれよりも遥かに高密度な──さすがは君主ロードの次期後継者と、納得せざるを得ない威力の魔術だった。

刹那、カラボーが携えた刃が、その魔弾をあっさりと弾いた。

剣と形容するにはあまりにも柄が短いそれが、俗に黒鍵と呼ばれる、聖堂教会でも一部の代行者が偏愛している品だとは、後で師匠から教えられたものだ。

### (.....だけど)

そんな武器を出す瞬間を、自分には認識できなかった。もしも、この老人がその気になれば、にこやかに談笑をかわしながら相手の心臓を一突きにすることだってたやすいだろう。胸に走る痛みのわけさえ理解できぬまま、犠牲者は死に至るかもしれない。

「お、おまえ―!」

「失礼」

老人の手が、すうと横に流れた。

黒鍵の柄にこめかみをゆるく打たれ、失神したオルガマリーが傾ぐ。その身体を受け止め、老人は血だまりの外のソファに優しく横たわらせた。

「見ていてもらってかまわないかね? 目を覚ましたときこの部屋ではショックがあるだろうから、できればロビー車両にでも連れていってほしい」

と、こちらに向かって語りかけてきた。

「あ、は、はい。俺で良かったら」

動揺していた自分の代わりに、カウレスが買って出てくれた。こういう状況で案外落ち着いているように見えるのは、姉が魔術師をやめた状況というのがそれだけ過酷だったからだろうか。身内に命を狙われたとも言っていたが、そうした経験が彼の芯を鍛え上げたのかもしれない。

カウレスがオルガマリーを抱き上げて去り、カラボーが周囲を観察し始めた後、新たな気配が生じた。

「こんなことになってたの?」

と、入り口から声がしたのだ。

「よくよく、あなたは魔術師の事件に縁があるみたいね。ロード・ エルメロイII世」

「あなただって同じだろう」

振り向かず、師匠が言う。

相手が化野菱理であることは、見ずとも分かっていたらしかった。

「気分じゃなかったから、さっきは野外には出なかったのだけど、 そうすると私にはアリバイがないことになるかしら」

「そもそも、そんなものが魔術師に通用しないのは、あなたが一番 ご存じでしょう」

「ならよかった」

わざとらしく、女が笑う。

彼女もまた、この程度の死体には動揺ひとつ露わにしない。それ とも自分がおかしいのだろうか。あの故郷にせよ、剝離城や双貌塔 にせよ、いくつも怪異な事件を見てきたのだから、麻痺しているべ きなのだろうか。

......考えたくもなかった。

胃の底でぐるぐるしている吐き気を紛らわせたくて、俯いている内にまた声がした。

「……死亡時刻が、数十分以内なのはまず間違いないだろう。死因もまず頸部切断によるショック死と見ていいはずだ。争いの跡はないから、犯人が彼女を殺すまでは一瞬だったはずだ」

カラボーの声だった。

現代社会なら写真を撮ったりするのだろうが、そんな手順は省いている。細かな記録なら魔術回路でも可能だし、そもそも現代科学による証拠など、いくらでも偽造捏造ができるものだと、魔術師は信頼してないからだ。

「……だが、なぜ犯人は頭部を? 何か、魔術の触媒にでもするのか?」

「彼女は未来視の魔眼だったそうです」

「ほう?」

老人が、顔の皺を深くする。

もう一度死体を見やったところで、さらに師匠は付け加えたのである。

「犯人は、彼女の眼球を奪うつもりで、頭部ごと持ち去ったんじゃ ないでしょうか」

隣で聞いていた自分が、戦慄に固まった。

それだけ、師匠の考えは恐るべき思考を射貫いていた。あまりに も魔術師らしすぎる、そしてこの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリ ンにふさわしすぎる動機。

ホワイダニット。

「眼球目的で頭部ごと、か」

カラボーが顎のあたりを撫でる。

「そんなことが可能なのかな? 持ち去った頭部から魔眼を摘出するなど」

「こちらのスタッフのご意見も伺いたい」

と、師匠が背後に待機していたもうひとりのスタッフ──眼帯の オークショナー・レアンドラへと問いかける。

小さな会釈とともに、彼女は師匠の言葉を肯定した。

「私どもの技術をもってすれば、きちんとした保存ができていると いう前提付きで、頭部からの魔眼摘出は容易です」

オークショナーが、冷ややかに説明する。

「付け加えれば、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン以外でも、魔 眼の移植自体は不可能ではありません。無論、確実性は著しく落ち るでしょうが」

最後の言葉は、魔眼の専門家としての誇りでもあったろうか。

その証言を受けて、

「ならば、改めて私も検死したい。それから、少し、このご老人と 話させてもらってもいいかな?」

と、師匠が持ちかけたのであった。

\*

特に、抗うこともなく、ほかの魔術師たちは退出していった。

彼らにしてみれば、従者のひとりが殺された程度は気にならないらしい。

それとも、これでオークションの競り相手が折れるなら儲けものだと思っているのだろうか。以前の事件でも味わわなかった異質な感覚が、まだ身体の底で渦巻いていた。部屋にしみた血臭もあいまって、なおさら違和感は強くなるようだった。

ぎゅっと胸元を摑んでいると、

「ひとつ、伺ってもかまいませんか」

と、師匠は老人に話しかけた。

絨毯に膝をつき、いつものルーペを持ち出して、あちこち調査しながらである。血液に薬物を垂らしたり、こまめにメモを取ったりする姿は、魔術師などというよりも一世紀も前の探偵じみている。 そんな師匠だからこそ、なんとなく安心してしまうこともあるのだけれど。

対して、近くの椅子に腰掛けたまま、カラボーは口を開いた。

「なんだね」

「あなたは、魔術師が憎くないんですか?」

聖堂教会と魔術協会は相容れない。それは単に勢力や歴史的なものではなく、もっと思想的なものだ。神秘を秘匿して守ろうとする者と、自分たち以外の神秘を否定する者との決定的な隔たり。

すると、老人は小さく舌打ちしたのである。

「ああ。正直に言えば、この列車にいるすべての魔術師は神に救いを乞うた後、ことごとくが煉獄に魂を焼かれればよいと思っているさ」

煉獄と言った分だけ、神父は良心的かもしれない。

そこは天国に至れぬ者が魂を浄化するための場だからだ。苦しみ こそあれ、地獄と違って真の罪人が行く場ではない。

「だが、それとこれとは別だ。俺が預かった黒鍵は、亡くなった同 胞を悼んでいる娘を貫くためのものじゃない」

簡潔だが、信念を感じられる言葉であった。

その台詞を吟味して、師匠はゆっくりと尋ねたのである。

「カラボー・フランプトン。あなたは、感受型の魔眼を持っている のでは?」

老人はすぐ答えなかった。

ゆっくりと視線をあげて、錆びた鉄がこすれるような声で訊き返した。

「.....どうしてだね?」

「あなたの年齢を考えると、この列車にやってきた理由は魔眼の購入よりも売却と考える方が普通でしょう。そもそも聖堂教会は洗礼 詠唱以外は認めていないはずです。検死を買ってでたのは、自分の 魔眼が有用だと思ったからじゃないですか」

そうだ。似たことをイヴェットも言っていた。師匠がその場に やってきたのはイヴェットの説明が終わった後だったが、おおよそ 同じ結論に辿り着いていたらしい。

しばらくして、

「……隠せなそうだな、君主ロード」

と、黒い肌の老人は重く囁いた。

眉のあたりの古傷にそっと指を這わせて、こう続けたのである。

「俺の目は、過去視の魔眼だ」

「過去視」

未来視の逆。

オルガマリーたちが言っていた、『虹』の位階の魔眼ではないの だろうか?

「ああ。大したものじゃないさ。一応魔術師のいうノウブルカラーとやらにはひっかかるのかもしれないが、少なくとも『黄金』の位階だとか騒がれるようなものじゃない。でも、そうだな......お嬢ちゃんは、今朝、君主ロードの髪をセットしたね?」

「.....あ、はい」

「ずいぶん手慣れてる。もう五分寝かせてくれとか君主ロードは 言ってたけれど、結局さっきのカウレスくんに支えさせて、やり終 えたね。ん、何か調査してるようだが事件とは関係ないか」 「.....フェ

一瞬、息を吞む。

カラボーが言いかけたのが、奪われた聖遺物の調査だったからだ。

寝ぼけた師匠との細かなやりとりは自分でも忘れているぐらいの 事柄だったが、だからこそ過去視という言葉の信憑性は確認でき た。

「そのぐらいのことは視える。もっとも、希望の時間と場所をいつ でも指定できるような都合のよいものでもないがね」

「つまり、あなたよりも魔眼の方に主導権があるのですか」

「発動はある程度制御できるさ。とりわけ魔術や神秘の濃い時間には引きつけられやすいから、役に立たないわけじゃない。とはいえ、この歳になると魔眼に引きずられることも多くなってきた。もともとはこれを売り払うつもりで、オークショナーにも話していたんだ。明日のカタログには載るはずだとも」

つまり、イヴェットの予想はほとんどあたっていたわけだ。さすがは魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの常連というべきか。

しばし何事かを考えるように手を止めてから、師匠は言葉を続けた。

「では、犯人が視えましたか?」

「……いいや視えなかった」

と、カラボーは告白した。

「視えない?」

「何らかのプロテクトをしていたのかもしれん。彼女がこの椅子に座っていたことまでは視てとれたが、首が落ちた前後の状況は曖昧としてはっきりと視えない」

Г......

しばらく黙り込んでから、師匠はこう返した。

「だったら、未来視の魔眼を持つトリシャ・フェローズ自身にとっても、そうだったかもしれません」

「.....何?」

老人が、ぎこちなく目を見開く。

血ち塗まみれに汚れた部屋で、師匠の声は淡々と響いた。

「もしも気づいていたならば、何らかの措置を施していたでしょう。少なくとも、主人であるオルガマリーに警告ぐらいはしていたはずです。つまり、彼女の死とその犯人は、未来視にも過去視にも 一過去からも未来からも視えなかったんですよ」

その言葉に、カラボーは沈黙した。

やがて、結論づけるように、師匠はこう囁いたのである。

「まるで、時間の透明人間です」

ひどく詩的な表現だったけど、この場合にはふさわしいように思えた。過去からも未来からも透明で、彼女の死はただ現在だけにあるのだと。

「……だが、そもそも、俺が本当のことを言ってる保証もあるまい。過去視などというのは最初から出鱈目かもしれんぞ。さっきの朝の話だって、誰かに聞いていれば済むことだろう」

「ええ」

と、師匠はうなずいた。

「それでも、あなたのように誰かを守ろうとしている人を、私は信じたい」

一瞬、老人が口ごもる。

それから、ゆるくかぶりを振った。

「時計塔の君主ロードとも思えぬ台詞だ」

「未熟ですが、人を見る目は持っているつもりです。なによりも、 魔眼という現象は技術ではなく体質です。人間にとって最古の魔術 であり、術式でも学問でもなく、脳を揺さぶり続けるものです。だ とすれば、それは生き方をも規定するはずでしょう」

「……前も、魔眼の持ち主に会ったことがあるのか」

「生前トリシャが話してくれました。──魔眼を持つということは、 魔眼に縛られることを受け容れることだと」

ちら、と首を奪われた死体へ視線をやる。

「だが、それだけじゃあるまい。ああ、時計塔の君主ロードならば、魔眼の持ち主ぐらいいくらでも会っていて当然だが……ずいぶん真面目に受け取っているものだな」

最後は、苦笑交じりだった。

しかつめらしい顔をずっとしていた老人が、こんな風に笑うのだ と初めて知った。

「俺にとっての過去視とは、もっと乱暴なものだよ」

と、話す。

「たとえば、脳髄だけを引きずり出して、古い白黒フィルムと一緒に溶液にでも漬けられるようなもんだ。その世界には眼球なんてないのに、情報だけは好き勝手に侵略してくる。そうだな。フィルムの中の登場人物に乗り移るような感じか。その視点の情報を一気に流し込まれてる俺と、あくまで外い部まからフィルムを見ている俺が、同時に存在してる。わけがわからないかもしれないが、実感としてはそんなもんだ」

「人間は見るものに囚われる。ふたつのものを一度に集中して見られないように、脳ができあがってるからな。今と過去の俺がそれぞれにいても、見られるものはひとつだけ。ああ、つまり過去を視るということは、現在に生きられないということだ。俺はこの目を意識してから、一度だって今を生きたことはない」

その言葉は、ひどく胸を叩いた。

トリシャも似たようなことを言っていた。それは、人と違う世界 を視る魔眼──師匠が言うところの感受型の魔眼を持つ者にとって、 宿命的なことなのだろうか。

たとえばそれは、十年前から、自分が自分だけの身体で生きられなくなったように。

ふと、カラボーが入り口を向いた。

カウレスが、扉を開いたのだ。

「先生。オルガマリーさんが目を覚ましました」

「……ひとまず、俺にできることはここまでだな」

と、老人が踵を返した。

「アニムスフィアのお嬢さんによろしく」

そう言い残して、カラボーは現場から去っていったのであった。

ロビー車両は、しんと静寂に満たされていた。

最初乗り込んだときのままにも見えたが、フルーツなどはそっと 補充されている。ここにはスタッフが常駐しているようで、自分た ちが戻るまではオルガマリーのそばで紅茶をサーブしており、師匠 が会釈すると場を辞していった。

後には、オルガマリーと自分たちだけが残された。

さっきまで介抱していたカウレスは居心地悪そうにしていたが、 やがて少女の方から口を開いた。

「……大したことないわよ」

と、オルガマリーは鼻を鳴らしたのだ。

ソファに座って、軽く背伸びするように、重ねた両手を伸ばす。

「ふん。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンだものね。この程度の ことは想定していたわ」

明らかな強がりだった。その証拠に白い膝はかすかに震え、目も 充血したままだ。いくら少女が時計塔の君主ロードの家系だとして も、こんなところで孤独に残された体験などあるはずもない。

## (.....ライネスさんは)

ひょっとして、彼女ならあるのだろうか。エルメロイ派の残された権力を掌握するまで、彼女は食事のたびに毒を気にしなければならず、常に非常食を持ち歩く生活を送っていたそうだ。だとしても、オルガマリーにとっては何の救いにもなるまいが。

師匠は、ただいつもと同じ穏やかな声で、口を開いた。

「それでも、オークションから何らかの成果を持ち帰りたいなら、 もう少し休んでいたまえ。スタッフに聞いたが、部屋は空いてる別 の場所を用意してくれるそうだ」

「いらないわよ。清掃はしてくれるんでしょ」

気丈に、少女がかぶりを振る。

だが、だったら彼女は幼い頃から一緒だったはずの従者が死んだ 部屋で、今夜は眠りにつくというのだろうか。

「だいたい、こんなのでエルメロイはアニムスフィアに貸しをつくるつもりなわけ? ええ、一応は同じ貴族主義だし、感謝してあげないこともないけど」

一息に言って、オルガマリーは師匠を睨めつけた。

対する師匠は、ただそっとかぶりを振った。

「いいや、そういう意図はない。単に、私の気まぐれで結構。どう せ魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの出来事など、時計塔では 重視されまい」

「あなた、本当に君主ロードなの?」

きつい口調で、少女が問うたのだ。

眦まなじりをつりあげ、むしろ怒気を孕んだ声音で、オルガマリーは突きつける。

「もう少し、弱みにつけこんでもいいはずよ。いくらアニムスフィアが政治闘争にかかわらず山に引きこもった家系でも、君主ロードは君主ロード。十二家中十二位まで零落したエルメロイの立場からすれば、ひとつでも確実な貸しを押しつけたいところじゃないの」

「ご教授いただけてありがたい。レディ」

と、丁重に師匠は一礼した。けして嫌みなそぶりではなかった。 少女の言葉を本当に尊重した上で、師匠は至極ゆっくりと言葉を続 けた。

「だが、これは私にとって信条のようなものだ」

「信条?」

「かつて、私が未熟だったとき、その未熟さこそが覇道の兆しだと言ってくれた相手がいた。自分の手におさまらない埒らち外がいを目指しているからこそ、足掻いているのだと。ああ、彼が言うには『彼方にこそ栄え在りト・フィロティモ』なんて馬鹿げた方向性を、人生の基本則にしていた時代があったそうだ』

近くのテーブルにあった林檎をとりあげ、師匠が見上げる。

なぜか、その林檎が地球儀のように見えた。古代の王は大地が丸いことさえ知らずに、彼方を目指していたのだろう。巡り巡れば一周するなんて夢想だにせず、だからこそ人生の価値はどこまで遠くに行けたかだと、無邪気に信じ込んだのではなかろうか。

なぜか、頭を幅跳びの選手がよぎった。

命の限りを尽くして走る選手は、その最後に高く高く空を跳ぶ。 はたしてどこに着地できたかだけが生涯の価値だと、おおよそはそ んな意味なのではないだろうか。

「いずれ、否が応でも自分の方向を見いだしてしまうと、ヤツは話してた。そのために戦わねばならないときがいずれやってくる。……だったら、まだそんな方向も見出してない相手が、無駄に命を散らすのは私にとって許せることではない。その思想は時計塔の権力抗争などよりも上位にあるものだ」

「......覇道の兆し?」

まじまじと師匠を見つめ、オルガマリーはこう返したのだ。

「あなたは──聖杯戦争で、そんなことを言われたの? ひょっとして、あなたが喚びだしたサーヴァントに?」

「ああ」

「馬鹿馬鹿しい」

と、少女は一蹴した。

「サーヴァントなんて、本体の英霊の似姿よ。すぐに消し飛ぶ影のようなもの。そりゃあ人類史に刻まれるだけの相手なんだから含蓄のあることも言うでしょうけど、行使する側の魔術師がそんなのにいちいち影響されてるなんて本末転倒じゃない」

「そんな……っ!」

自分は、抗弁しようとした。その思い出は、師匠にとって不可侵であるはずだ。馬鹿馬鹿しいなどと蔑む権利が誰にあるだろう。

だけど、

「かもしれないな」

と、師匠は微笑して、林檎をテーブルに戻したきりだった。自分の大切なものは胸にあるのだから、それだけでよいのだと言うよう に。

「一応、部屋は替えるように伝えておく。幸い、私たちの隣の部屋が空いていたはずだ。何か困ったことがあれば伝えてくれ。──カウレス」

「あ、はい!」

師匠の言葉に、カウレスがうなずく。

「彼女が部屋に戻る気になるまで、一緒にいてもらえるか」

「いいですよ。このまま放っておくのも気が引けますし」

眼鏡の少年が了解すると、はたしてオルガマリーは歯を剝き出して抗弁したそうにしていたが、ここでつっぱねても何の得もないと判断したのか、ぷいと視線をそらして親指の爪を嚙んだ。

見届けた師匠が踵を返し、自分も追って、客車へと歩いていく。

その背中に、

「変なヤツ」

と、少女の声が届いた。

ひどく苛立たしそうで──どこか寂しげな声だった。

「.....変なヤツ」

と、ロビー車両に残ったオルガマリーの声が、もう一度自分の耳 みみ朶たぶを叩いた。 事件の後、列車は奇妙なまでの沈黙に浸されていた。

おおよその招待客たちは自分の部屋に閉じこもり、安全を確保する手に出たからだ。もとより魔術師の能力上、攻めよりも守りの方が得意であり、万が一魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに殺人鬼が交じっていると考えた場合、まずは個室の魔術的防御を強化するのが大前提だったからである。

もっとも、では部屋の中で皆が怯えているのかというと、答えは 否だ。

そのひとり、ジャンマリオ・スピネッラは、姿見の前で服を整えていた。白いソフト帽の埃を払い、胸元のネクタイを締め直し、スーツの皺も念入りに伸ばしながら、上機嫌そうに鼻歌を口ずさんでいる。

すぐ、理由は分かった。

ゆっくりと部屋の扉が開いたのだ。

「ごきげんよう」

「やあ良かった! ひょっとしたら来てくれないんじゃないかと、 ハラハラしていたところだったよ!」

「ジャンマリオ・スピネッラ」

と、改めて化野菱理はその名を呼んだ。

「さきほど、事件の手がかりについて話したい、と仰られていた件 についてですが」

「ああ、そうそう!」

ぴしゃん、と伊達男が手を打つ。

「とはいえ話を急がなくても! まずはワインの一杯でもいかが。

さすが魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンだけあって、なかなかの ビンテージで上物を揃えてますよ。このマルゴーとか以前飲みそこ ねたやつでして。せっかく乗り合わせたのだから、少しぐらい思い 出作りをしてもいいんじゃないかな!」

「では」

「ちょっ! 早いな早すぎるな?!」

大げさに非難するジャンマリオだが、そこは菱理の不動の笑みである。いかなメディアで鍛えられたごり押しとはいえ、一切の駆け引きを拒絶した笑顔を前にしては根負けするしかない。

「あーあー分かった分かった! もう本題入るから!」

と、両手をあげたのだ。

用意していた赤ワインを自分で注ぎ、くるくるとグラスを回転させてから、囁く。

「たとえば、あの殺し方、ちっと覚えがあるって言ったら?」

ジャンマリオの言葉に、菱理が寸瞬目を細めた。

「手短かに、概要をお聞かせ願えますか?」

「七年ほど前、あちこちで話題になってたのさ。ああ、金品は奪わない癖に、被害者の頭部だけを持っていく殺人鬼ってのがね」

いかにも猟奇的な犯行であった。

滑らかな眉び宇うを寄せて、菱理が至極当然の質問を返す。

「そんな事件があったなら、それこそメディアが放っておくとは思 えませんが」

「時計塔が情報統制をしたからだよ」

と、ジャンマリオが肩をすくめた。

「えーと東洋じゃ釈迦に説法とか言うんだっけか? 当たり前だが、時計塔でも法政科は表の社会に対する影響力じゃ抜群だ。で、時計塔が情報統制したってことは、その殺人鬼が神秘に関係してい

たんだろうって目星はつく。なんせ神秘は隠匿すべし。揺るぎなき時計塔の第一原則だ。うん、もとから神秘絡みだったのなら、俺たちとはだいぶ近しい関係だったんじゃないかな?」

「──つまり、いま、この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに、過去の殺人鬼がやってきたのだと」

冷ややかな声で、菱理が言った。

そんなのは、ほとんど都市伝説だろう。たまたま同じ列車に乗り合わせたなど、出来の悪いB級ホラーとしか思えない。だが、それを言い出せば、そもそも魔術師も魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンもおとぎ話の存在ではないか。

「ひょっとして、あんたなら何か知ってるんじゃないかと思ったんだけどな? なんせ法政科の別名は第一原則執行局ってぐらいだる?」

ジャンマリオの瞳が、鋭い光を宿す。

しかし、菱理は一拍の間をおいてかぶりを振ったのである。

「あいにく七年前ですと、私が法政科に入るより前ですわ。法政科をどうお考えか分かりませんが、自分の担当以外の情報が簡単に閲覧できるほど緩くもありません」

「ありゃ残念」

と、ジャンマリオが天井を仰ぐ。

そのままワイングラスを持ち上げ、一口含んでから、新たに言った。

「何を隠そう。思い切り情報隠蔽を食らったときのアナウンサーが 俺の友達でさ。うまくいけば、あのときの真相を一気に教えてもら えるかと思ったんだけど」

「何が、目的なんです? 好奇心だけじゃないでしょう」

直ちょく截せつに、女が尋ねた。法政科らしいと言えたかもしれない。魔術師たちを統べる者として情報を切り取るために、余計な情緒を必要としない。

「ははは、三割ぐらいは好奇心なんだがね」

だから、ジャンマリオもふざけた口調でありつつ、素直に言葉を 紡いだ。

「テレビはさ。案外楽しかったぜ。なんせさんざん儲かったしな。 ゾンビー発で一万ドルってなもんだ。俺のとこみたいな二流の家系 が、呪体や触媒にいくらかかるかとか考えずにすむようになったの は、間違いなくメディアの恩恵さ」

夢見るように、ジャンマリオは瞳を潤ませる。

その手首に、傾いたグラスから糸のように赤ワインが零れていった。そして、スーツの袖から、黒い影が滴る酒に群がっていったのだ。

蜘く蛛もである。

うぞうぞと男の手の上を、何匹かの蜘蛛が這い回っていたのである。

しかし、菱理には一切動揺の気配が感じられなかった。そんな使い魔は見慣れてるというようだった。ある種の黒魔術には虫や小動物を使い魔とするものも多い。ジャンマリオもそうしたひとりなのだろう。

「だけど、もういいんだ」

と、伊達男は口にした。這い回る蜘蛛は次々と現れ、グラスから こぼれる酒を一滴たりともスーツには染みつかせなかった。

「俺は、魔術師でありたい」

ジャンマリオは、その願望を吐露する。

「テレビや表の社会で実績をつくったのも、ほかの魔術師がやりそうにないからさ。同じ才能で同じことやっても結果が大して変わるわけないだろ? だったら、利用できるものはとことん利用して突き詰めればいい」

伊達男の考え方は、ある種の新世代ニューエイジに共通するものだった。魔術回路や魔術刻印が先祖に依存する以上、少々の才能で

は魔術師として高い階かい梯ていには上がれない。ならば、旧態依然とした古い家系が手を出さないようなもの──たとえば現代科学やそこに乗っかったメディアで、アドバンテージを取っていくのが効果的な戦術である。

もっとも、これとてけして確実ではない。

十二の君主ロードでも、アーシェロットの当主などは流行ものに目がないことで有名だし、もちろんさきほど話していたように法政科も古くから王族や政府機関を通じてメディアへの影響力を維持しているからだ。

これらの前提の上で、ジャンマリオは優雅に残ったワインを回 し、そっと飲み干す。

「法政科にコネをつくって、黄金や宝石の魔眼で華麗にデビュー。 おっとどうだい完璧なプランじゃね?」

「悪くはないですね」

あくまで穏やかに、菱理が言う。

すると、ジャンマリオは満面の笑みを浮かべ、最高のカモを前に した詐欺師みたいに、こう話しかけたのであった。

「どうだい? ここはひとつ、オークションまで協力態勢を敷くってのは?」

霧の森の中でも、空の向こうが赤々と染まりつつあることだけは 分かった。

夕暮の色だ。鬱蒼と茂った枝葉の隙間を通して、じわじわと狭さ霧ぎりを浸食していくそれに、数時間前見てしまった血の色を重ねてしまい、自分は胸元を押さえた。いつもそうなのだけど、心臓の鼓動だけが、ほんのわずか自分を現実に引き戻してくれる気がする。

カウレスはまだオルガマリーと一緒にいた。

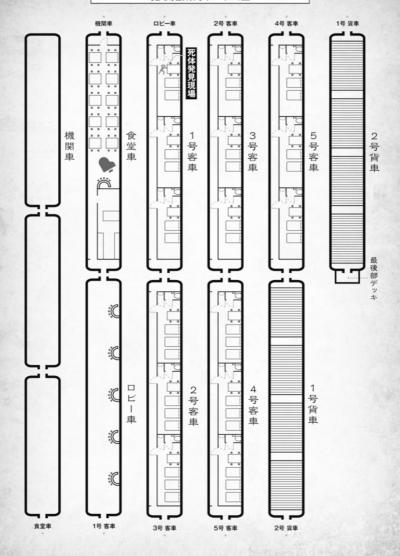
自分と師匠だけが、最後部車両のデッキに来ていたのだ。

「ここが、待ち合わせの指定ですか」

と、周囲を見回しながら、口にする。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの車両は、機関車とそれに次 ぐ二両の車両の後、食堂車、ロビー車両、五両ほどの客車と続き、 最後がまた二両つなぎの貨車となっている。

この貨車の部分にも、一応入れるようにはなっていた。



中身はほとんど空で、いくつか木箱や麻袋が置かれたきりだった。ほかの車両に比べると、驚くほど素っ気ないが、もともと招待客が入る場所でもない。あるいは、それこそ支配人の趣味で、かつての三等車両を模したものだったのかもしれない。

手紙で指定されたのが、この最後部だったのだ。

デッキに出て、ひんやりとした風を浴びながら、師匠は次々と遠ざかっていく線路を見つめていた。現在のところ、手紙の相手が近づいてくる様子はない。油断ないよう注意を張り巡らせつつ、自分は小さな声で尋ねた。

「オルガマリーさんは、大丈夫でしょうか?」

「謀殺は時計塔ではよくあることだ、君主ロードにまつわる家系ならなおさらな。といっても、こんな風に運命がやってくるとは思ってなかったろう」

苦い声で、師匠が言う。

「時間をつくってやることはできても、受け止められるかどうかは 本人の問題だ」

多分そんな風に話す師匠は、魔術師としては相当甘いのだろう。

オルガマリーが言っていた通り、これは貸しにすべき案件だ。それだけのリスクを払っているのだから、むしろ受け取る相手を安心させるためにも、当然の対価だと胸を張るべきだろう。師匠だって分かっているだろうにそうしない理由は……単に信条というよりも、もっと深いところまでつながっている気がした。

魔術師と一般人と、双方の倫理を知る師匠。

双方の思想と論理をもって、いつも師匠は犯人を断罪し、事件を 解決してきた。

だけど、やっぱり師匠にも師匠だけの、特別なルールがある。ホワイダニット。どうしてそれを行うのか。多分、一番近いのがあの 聖遺物で、第四次聖杯戦争という時間が師匠の人格の核を形成している。 でも。

それだけではないと思うのだ。

師匠のルールにも、師匠のホワイダニットにも、まだ窺い知れない底があるように思えるのだ。それが何かと言われれば、やっぱり曖昧なままなのだけど。

「……これだと、外部への脱出は不可能か」

ふと、師匠が呟いた。

「何のことです?」

「場所の問題だ」

霧に包まれた森を見ながら、師匠が指を持ち上げる。

「さっき停まったところもそうだったが、この霧の中は半ば異界化している。外部から侵入することも、脱出することも難しいだろう。正式な招待者を乗せるか降ろすかするとき以外では、いくら魔術師でも出入りは困難だ」

「たとえば、飛んで、逃げたりはできないんですか」

「不可能とまでは言わないがね。ヒト単体での飛行はただでさえ困 難だ」

師匠の言葉に、自分は淡く眉宇を寄せる。

けして魔術師ではない自分だが、一応時計塔の講義は受けている。その中でひっかかる記憶が明滅したのである。

「……でも、浮遊や飛空の術式は簡単なものだと、全体基礎の講義で聞きましたが」

「ふむ。講義をしたのはクレイグ教授だな。当たり前すぎて、細かいところを省いたんだろう。確かに術式だけなら極めて単純だ。だが、魔力が続くならという前提付きで」

「魔力が?」

「小石を短時間浮遊させるぐらいなら、そこらの見習いだってやっ

てのける。だが、質量が増えるほどに魔力消費は桁違いに上昇するので、人間並みとくれば相当に難しいのさ。一応、いくつかの例外はあるあたりも、魔術らしい奇妙なところだがね」

「例外ですか」

聞き返すと、師匠は小さくうなずいた。

「それこそ、箒ほうきで空を飛ぶ魔女のおとぎ話なんか、君も聞いたことがあるだろう? あれは古くから人類が信じてきた魔術基盤:黒魔術の一種でね。これに魔女の軟膏を加えれば、文字通り、地面に足がつかなくなる」

魔術基盤というのは、確か人の信仰や類する論理が土地に刻まれた状態のはずだ。

その土地の内側であれば、特定の魔術の威力が増強するが逆もありえるとかどうとか、時計塔の授業で聞いた気がする。

「ええと、つまり、女性の魔術師なら飛べるんですか?」

「一応ね。もっとも、この場合でも鮮明な意識を保ちながら飛行するのは困難だ。なんせ魔女の軟膏は一種の麻薬だからな。普通の空ならいざしらず、こんな異界化した空間をトリップしたまま長距離飛行し続けるなんて自殺行為だろう」

「……なるほど。だから、ここでは無理だ……と」

この霧を抜けるほどになると、確かにずいぶんな長距離になるだろう。

師匠の言うことが、ようやっと実感できてくる。魔術は万能であっても、それを操る人間は限界だらけだとは、やはり時計塔の講座で習った言葉だったか。

「ごく短時間の浮遊だけなら専用の礼装もある。召喚した低級霊でも滑空ぐらいはさせられるだろう。だが、長距離を確実に飛ぶとなると現代では至難というのが結論だ。それを押してとなると、色位ブランドレベルの魔術師が自分の土地とか魔力確保の条件をひたすら揃えるぐらいは必要になる。たとえ霊脈レイラインに沿ってはいても、ほぼ人間向きに調整されてない代物じゃ、これほどの魔力を供給する役には立たんよ」

……まあ、それこそトーコ・トラベルなんて反則技もあるが、とかぶつくさ言ってたが、きちんと説明しないということはこの場で話すほどの合理性はないと判断したのだろう。魔術の可能性がひたすら多岐にわたる以上、あらゆる情報をたたきつけられたら、自分では眼を回すしかない。

師匠らしい思いやりに苦笑したところで、ふと自分は空を見上げた。

「……雲が、出てきましたね」

霧で分かりにくかったが、上空に黒雲がたちこめつつあった。

さきほど世界を染めつつあった緋色が、今度はどす黒く染まっていく。その様子もやはり血と紛まがった。人間の内側にあるときはあんなにも鮮やかなのに、外に零れた途端、あっという間に酸素と結合して黒ずんでしまう。命の欠片が空気に溶けていくかのように、赤は黒に塗り替えられていく。

一まさか。

と、呟きそうになった。

何の気なしに流れる風景を見つめていた自分の瞳に、とある光が 映り込んだのだ。

「.....あれ、は.....?!」

「グレイ?」

「師匠。こっちに、何か近づいてきます......!」

おそらく、この最後部でなければ列車からは発見できまい。

それでも遠い。いや、位置が悪い。どこかもっといい場所がない かと忙しく周囲を見やったとき、轟音がこだましたのだ。

## 「一雷?!」

だが、こんな突然の雷撃が自然にあるものか。

双貌塔イゼルマでの、アトラム・ガリアスタの天候魔術を思っ

た。だが、あれだって何十人がかりでずっと以前から準備して、もともと雷雨の起きやすい天候をほんの少し後押ししただけのものではなかったか。いくら優れた魔術師だろうが、こんな―師匠いわく半ば異界化した場所で、再現できるはずもない。

「こっちに!」

飛び上がった身体が梯子を摑んで、列車の屋上に登る。

師匠もついてきた。揺れる車両の屋上で、なんとか安定を確保してるのは、師匠の半端な魔術なりに足腰を『強化』しているためだろう。

また、稲妻が落ちた。

こちらの視界を残らず奪うほどの近さ。身体を余さず麻痺させる 衝撃。師匠を庇い、本能的に耳を押さえて口を開いた。

さきほど師匠は言った。

魔術師とはいえ、人が単体で空を飛ぶことは難しいと。自分もその言説に納得した。



ならば、その相手はどこからやってきたのか。

間をおいて、うつむいていた顔をあげると、

「―ああ、本当に来たんだ」

と、ようよう聴力を取り戻しつつある鼓膜に、凜々しい声が届い たのだ。

綺麗な女ひ性とだった。

年齢は二十かそこらだろうか。

すっと背が高い。単純に身長だけの問題ではなく、走行中の列車の屋上だというのにまったく力みのない姿勢が、女を一回り大きく見せているのだ。美しく切りそろえられた、ゆるいウェーブの黒髪をなびかせ、その目は左右で色の異なる金銀妖瞳へテロクロミア。しなやかな身体に簡素な革と金属の鎧を纏い、腰には短くも使いやすそうな直剣を帯びていた。

「罠かもしれないのに飛び込んできたのを愚行と蔑むべきか。蹴散らすだけの実力を伴った豪毅と讃えるべきか。さて、君たちは自分をどちらだと思っているんだ?」

こちらを見据え、鎧の女はつらつらと語る。

きっぱりとした口調は好感が持てるといっていいのだが、異相の 瞳はこちらの底を見定めるように、ぴしりと据えられたままだ。

何より、幾十の魔術師を見てきた自分にも、到底現代の人間とは 思えない出で立ち。

(まるで.....)

まるで、おとぎ話から抜け出てきたかのような......

「ん、どうした? 言葉は通じてると思うんだが、ひょっとして現代じゃ使わない語句でも交じってたか?」

۲ ..... ی

かぶりを振って、余計な考え事を追い払う。

今必要なのは、そんな思考じゃない。もっと明快に問題をつきつける行動だ。

「……あなたが、師匠から盗んだ犯人ですか」

聖遺物を、とは言わなかった。当人であれば通じるし、そうでなければ余計な情報を渡す必要はない。そんな思考を悟ったのかどうか、女はこちらの返答に破顔した。

「ははは、なるほど間違いじゃない。その盗賊の郎党ではある」

快活に、笑う。

およそ美しい女が笑えば、花や宝石に喩えられるものだろう。は たまた果実や芸術に託す者もいるかもしれない。

この女からは、鉄の香りがした。まだしも、鉄錆びたであれば血 と紛う。しかし、鉄そのものの匂いを纏う女は稀だ。それは剣であ り鎧であり盾であり、戦にあって覇を競う者の纏う香りであった。

「じゃあ、返して──!」

踏み込み、右肩のあたりを意識する。いつでも自分の友を、武器 を抜けるように。

「グレイ」

その自分を、背後から師匠が呼び止めたのだ。

いつもなら、慎重に相手の様子を見定めるところだろう。自分が どれだけ暴走しようが、師匠はいつも正しいストッパーとして、こ ちらを引き留めてくれた。

だけど、今の師匠はどこかおかしかった。

ほんのかすかだが声は上擦り、呼吸が乱れている。

女の姿を見たときからだ。一瞬見覚えのある相手なのかとも思ったが、そうじゃないのは次の言葉で分かった。

「お前は、誰だ?」

と、尋ねたのだ。

「ふうん」

と、鎧の女は呟いた。

「……気に入らない顔だな」

その指が、ついとあがった。よく鞣なめされた革の小手は指一本ずつの動作を妨げず、続けざまに彼女は叩きつける。

「ケチ。せせこましい。暗くて偏屈。寝起きが悪い。黴かびた書物ばかり読んでる。卑屈なくせに傲慢。さも苦労人でございって顔をしてるくせに、終わってみれば一番事態を掻き回してる。どうだ、全部当たってるだろう」

「つ.....」

ぐうの音も出ない。まるで、師匠の生活を逐一表現されているみ たいだ。

指摘はひたすらに正しく、それでいて非難した女の側が煩わしそうに舌打ちする。

「気に入らない。まったく気に入らない。そんな偏屈な顔はエウメ ネスで見飽きてるというのに、この時代でも見せられるのか」

「エウメネス?」

その名を、師匠が繰り返した。

いや、この場合硬直したという方が正しいかもしれない。

「仮にも彼を従えていたなどというから、どのような魔術師かと思えば、こんなろくでなしとはな。いやエウメネスに比べてすらまるで足りない。欠片も足りない。アモンの神官やアリストテレスの叡智などもちろん期待してなかったが、これじゃあいっそ半端な脳味噌くりぬいて、猿に食わせた方がマシだろう」

茫然と、師匠は立ちすくんだままだった。

雷に打たれた方がよほどマシというぐらいに、悲愴な顔をしていた。気づかなければ幸せだった真実に、ついに辿り着いてしまったみたいにも見えた。

喉が、動く。

「お前……っ!」

「やっと気づいたか? マスターとしてのステータス透視能力なんぞとうに失ってるとはいえ、いささか勘が鈍いのでは? お前を呼び寄せたのは、単に私の興味を優先してもらったからだ。だが、その甲斐はまるでなかったな。ああ、もう沢山だうんざりだこんなのは食傷にもほどがある」

ひどく、一方的な物言いだった。

だが、腹を立てた自分が抗議するより先に、結果が生じた。

「だから死ね」

と、女が列車の屋上を蹴ったのだ。

こちらの斜め後ろまで出てきた師匠へと、たった一歩。驚くべき 一魔力を吸収した自分さえ超えるほどの身体能力で間合いを詰め、 抜剣!

「師匠っ!」

こちらも斜め後ろ─師匠の方向へ飛びながら、右手を振った。

「イッヒヒヒヒ! まさかの展開過ぎるだろうこれは!」

刹那、右肩の固フ定ッ具クが外れ、アッドが広がる。ルービックキューブのように高速で回転と分解を繰り返し、自分の手元で死神の鎌グリム・リーパーの形状に変化した。

硬い音が、響きわたった。

変型しきった鎌が、かろうじて女の剣を受け止めたのだ。

「ほう」

と、形のよい唇がこぼした。

「大したものだ。真っ向から受け止めたか。ペルシャの雑兵よりは マシらしい」

「あ、なたは……っ!」

ぎりぎり、と死神の鎌グリム・リーパーが悲鳴をあげている。

女の剣は業物でこそあれ、それ以上の宝具や概念礼装ではないら しい。しかし、女の手で振るわれると、武器は単なる武器以上の何 かに変ずるのだ。

「覚えておけ。戦闘技術があるからといって、戦士たりうるわけで はない。戦士たるとは肉体と意志と魂のすべての問題だ」

列車の屋上という事実さえ、自分は忘れかけていた。

この女の在り方が、あまりに現実とかけ離れていて、古代の戦場に立っているような気分にさせられた。魔術師も魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンもこれでもかというほどの非日常なのに、それでも圧倒的なまでに、この女は隔絶して魔的であった。

(これは、何─?!)

脳裏で、危険信号がけたたましくかき鳴らされる。

触れてはならない。近づいてはならない。関わってはならない。 ただ興味を示すことすら死線と知れ。あの冠位グランドの魔術師・ 蒼崎橙子と対峙したときですら控えめだった警報が、全力で自分を 遠ざけようとしている。

だけど、退くことなんてできない。

振りかざされた女の剣が、もう一度死神の鎌グリム・リーパーと 激突する。

(重、い.....!)

凄まじいまでに速く、鋭い。だがそれ以上に、一撃一撃が異様な ほどの重みを備えている。受け止めたこちらの手が痺れ、骨まで響 く。必ず殺すのだと、そういう強い意志の込められた剣であった。

戦士と言った。

単に戦闘技術を修めたものではなく、肉体と意志と魂の問題だと。

ならば、彼女は......

「……サーヴァントだ!」

答えが、背後から聞こえた。

内臓を捧ささげるかのごとき、痛切な響きのこもった叫びであった。

「グレイ! 彼女は境界記録帯ゴーストライナー──人類史に刻まれた英霊の具現化だ!」

「はは、ちょっと忠告遅いだろ、お前の師匠」

女が、笑う。

笑ったまま、横薙ぎに剣が吹き抜けた。

今度こそ、周囲の魔力を全開で吸収しながら、強く屋上を蹴った。列車のかすかな揺れと合わせ、ほんの少し鈍った剣の間を縫って、後方に宙返りする。

着地で、たたらを踏んだ。

それでも、女の剣が太ももを掠めたのである。

「ふん? 面白い芸当をするな。今こっちの魔力を吸っただろう」 軽く剣を見やって、鎧の女は愉しそうに肩をそびやかした。

「今の私からすれば天敵のような能力だが、哀しいかな、規模が小さすぎる。いくら猫でも鼠の百分の一の大きさでは意味がない。そこらの亡霊ぐらいなら、今のだけで消滅するだろうに」

亡霊、と聞いただけで、背筋に冷たいものが走った。

だが、今ばかりは目の前の相手への恐怖が勝っていた。ギリと奥歯を嚙んで冷や汗に耐え、膝に力を込める。そうでもしなければ、失神してしまいそうだったからだ。ほんの少し気を抜いただけで、内臓ごと裏返ってしまいそうな錯覚が、瞼をちらついている。

実際、彼女の剣をもってすれば、臓腑どころか自分を両断するの もたやすいことだろう。

「ああ、師匠は愚図でも、弟子は悪くないな。重圧に耐えきれず首を差し出すヤツもいるんだが、どうしてどうして粘るじゃないか。 こんな出会いじゃなければ、手元で育てたくなってくるが、まあこれも一興だ」

女が、唇を歪ませる。

「褒美に、ひとついいものを見せてやろう」

動きはなかった。

ただ、彼女はこちらを視ただけ。

金銀妖瞳へテロクロミア。その右目は夜空の暗黒を、その左目は 青空の色を抱いていることを、初めて自分は意識した。意識すると 同時に、吸い込まれるような蒼い輝きが、自分の脳裏に吸いつい た。

余計な動作も生じぬ、一工程シングルアクション。

それだけで、ぎこちなく身体が横合いへと向いたのだ。ゆっくりと持ち上げられた死神の鎌グリム・リーパーが、自分のあらゆる意思と反して、師匠へと突きつけられたことに、茫然と目を見開くしかなかった。

「魔.....眼.....?!」

「お前たちは強制のノウブルカラーとか呼ぶのだったか。この場に 似合いの決着だろう」

蒼く滲んだ瞳が、愉しげに笑っていた。

「我が神は狂気を尊ぶ。陶酔と酩酊がもたらす喜劇も悲劇もいと楽しんだ。師弟が殺し合う図など実にふさわしいと思ったのだが…… ふむ、そちらには余計なものがついてるようだな。今の時代の魔術師はずいぶん用意がいいらしい」

「.....お前<sub>1</sub>

眼鏡を押さえたまま、師匠がたたらを踏んだ。

この魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに備えた礼装が、かろう じて女の強制を防いだらしかった。

だが、安堵できるはずもない。自分の身体は完全に操られてしまっている。最初はぎこちなかった動きが徐々にこなれていき、師匠との間合いを詰めていく。

「おいおいおいがレイ! マジかマジか! ちょっとお前!」

ぶん、と鎌が打ち振られた。

列車の屋上で、アカイロが夜闇に飛し沫ぶいた。

皮一枚、師匠の肩口だけを切り裂いて、弧を描いた鎌は女の喉元で停止していた。

「──ほう、その鎌はそんな芸もするのか」

と、剣で鎌を受け止めたまま、女はこちらの内実を看破してのけ た。

死神の鎌グリム・リーパーから放出された魔力が、半ば強引にこちらの魔術回路を洗い流して、魔眼の効果を払拭したのだ。とはいえギリギリの措置であり、自由を取り戻すのが数瞬遅れていれば、自分の手で師匠の首を刎はねることになっていただろう。

「なら、仕方あるまい。お前たちが自分らで決着できる程度には、 マシであることを望んでいたのだが」

大きく後ずさり、女は小さく息をついた。

その剣が、ぐいと暗雲に突きつけられたのだ。まるで天空を切り 裂かんとするような傲慢そのものの姿だが、けして冗談ではなく、 その刃に尋常ならざる魔力が満ち満ちていることにも、否応なく気 づかされた。 咄嗟に、屋上を蹴る。

「させない―!」

「いや、もう遅い」

絶大なる魔力を込めて、剣が振り落とされる。

豁かつ然ぜん、虚空より何かが現出した。

空間が引き裂けたのだと、自分は知った。いやそう見えただけで、実態は霊体の実体化かもっと別の現象だったのかもしれない。いずれにせよ、突然現出した物体が空気を押しのけ、凄まじい衝撃の余波を生み、こちらを跳ね飛ばしたことだけは事実であった。

ひりひりと、肌が痛んだ。

それも初めてのことだった。あまりにも膨大な魔力を吸収しかね て、自分の身体が拒絶反応を起こしているのだ。

「イヒヒヒヒ! まずいまずいまずい! グレイあれはない! あれだけはないぞ! いくら俺とお前でもあれの相手だけはまずす ぎるぞ! 」

アッドが叫ぶ。

再び、雷が落ちた。

暗雲からたなびく稲妻が、幾重にも鎧の女の傍らに激突し、祝福 する。

それは、紫電を纏う二頭立ての戦車であった。現代兵器ではない。古代、馬などに牽ひかせて戦場を駆け回った蹂躙の象徴だった。

「<del>--</del>な、に?」

茫然と、声が聞こえた。

それも当然だろう。戦車を牽いているのは真っ白な骨であった。 骨格だけだが、逞しい翼を生やした蜥蜴とかげ。いや小型の竜か。 前脚と翼の一体化した形態は、確かずっと昔に滅びたはずのワイ バーンと呼ばれる幻想種を想起させた。

その骨竜が牽く戦車に、みるみる師匠の表情が変わっていったのだ。

「.....そん、な.....」

「師匠?」

だが、自分にも分かっていた。

これは宝具だ。アッドの内側に秘された神槍と同じ類の、人智を 超えた武具。しかも、極めて性質の悪いことに、自分もその宝具の 正体に予想がついてしまった。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの話をした際、ライネスが 言っていた。

- ― 『なんでも、彼の宝具はふたつあったらしくてね』
- ──『ひとつは、かのゴルディオンの神殿に奉納されていたという 戦車・神威の車輪ゴルディアス・ホイール』

「我が名はヘファイスティオン!」

猛々しく、女が吼えた。

「史上最も偉大なる征服王、イスカンダル第一の腹心なり!」

女─へファイスティオンが飛び乗り、手綱を取るや、戦車が何もない空中を走る。

神話のごとき勇姿は、大きく弧を描いて、こちらへと突撃してきた。戦車を牽く骨竜の一蹴りごとに稲妻が炸裂する。さきほどの落雷に匹敵する威力が、その度に迸る。人間ごときが撃たれれば、間違いなく即死となる紫電の飛沫。

「師匠!」

その身体に抱きつき、出鱈目に跳躍する。

ふたりして列車の屋上を転がると、凄絶なエネルギーの塊が背中を吹き抜けた。雷風が世界を蹂躙する。背後を通り過ぎた戦車は破壊そのものの化身となり、森の樹木を鉛筆か何かのように薙ぎ倒していく。

(止まらない--!)

こんなものが、止められるはずもない。

もしも手段があるとしたら、たったひとつ。

ぐるりと、もう一度戦車が弧を描くのを見やり、膝立ちになった 自分はアッドをゆっくりと持ち上げる。死神の鎌グリム・リーパー からいくつもの眼球が開く。周囲の魔力なら十分。とにかく回路を 回せ。本来の機構システムへと成り果てるべきは今。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……Crave望んで……Deprave堕落 させて……」

「駄目だグレイ!」

師匠が、抗った。

「こんな不安定な足場で使えば、こっちもただじゃすまない。だい たい、あれでも向こうは真名解放すらしていないんだ」

「でも!」

ますます速度をあげて、戦車が迫る。

もはや─いや、これではもともと解放は間に合わない。

ゆっくりと、師匠が立ち上がった。いつも葉巻の先端を切り落としているナイフを取り出していた。まさかそんな刃物で英霊に立ち向かおうというのではあるまいが、硬直したまま自分は目を剝いた。

「ははは、自殺か!」

「……まさか」

歩き出した師匠の手から、ごくごく小さな刃が閃ひらめいた。

痩せた身体が、戦車と稲妻に吞み込まれる。昼夜すら逆転させる 眩まばゆい雷光。そして落雷すら圧するほどの、猛々しき野蛮な咆 哮。

「AAAALaLaLaLaLeアアアアララララライッ!」 運命は決した。

空中を真横に駆け抜ける雷気の疾走は絶対。骨竜に踏みつぶされ、車輪に砕かれた肉体は原形すら残るまい。あの威力はもはや対人宝具ではなく対軍宝具の域にある。たとえ現代兵器で武装した軍隊であろうが、一度蹂躙されれば壊滅は免れぬ。

耳を聾ろうする轟音。破壊などという言葉さえ生ぬるい、神威の 暴走。

次の瞬間、衝撃が自分たちを吹き飛ばした。

(.....つ?!)

極限まで集中した視界は、スローモーションのようにゆるやかだった。

逆しまに、貨車の扉が開いている。それでやっと、吹き飛ばされた自分たちが列車の傍らを落下していることに気づいた。

「先生! グレイさん!」

「カウ、レスさ―!」

その扉から、少年が手を伸ばしている。

落下しながら、師匠と一緒に、必死にその手を捕まえた。『強化』された手が一瞬だけこちらの体重を支えてくれたところで、とにかく師匠の身体を押し込む。こちらも一瞬遅れて半回転しつつ、 貨車の内側へと飛び込んだ。

猛烈な勢いで窓の外を振り向いたが、そのときには女と戦車の姿は遠ざかっていた。

「……追って……こない……?」

「……あんなものをぶつければ、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンそのものと争うことになるからな……。理由は分からんが……少なくとも、あれのマスターにはそんなつもりはないんだろう。だから、あの場所を指定したんだろうしな」

壁に背中をついたまま、尻餅をついた師匠が、弱々しく答える。

それから、顔を上げて微笑した。

「よく来てくれた、カウレス」

「慌てましたよ。なんか、さっきから雷に魔力を感じて、様子を見に来てみたら先生がバケモノみたいな戦車と向き合ってるんですから」

「あ」

その言葉で、気づいた。

原始電池の魔術の修練で、カウレスは電気の流れに敏感になっていたのだろう。まさか、こんな結果につながるとは師匠も夢想だにしなかったろうが。

「……こちらも、おかげで助かった」

と、細々と師匠が息をつく。

その足下に、小さな陶器の壺が転がった。最初からひびが入っていたらしく、少し転がると、蜘蛛の巣状に亀裂が走り、ぱらぱらと砕けていった。

「……原始電池用の制御術式だが……直撃でなければ……耐えてくれたか」

大きく、ため息をつく。

それで、カウレスが瞬きした。

「髪を、切ったんですか?」

ほんの一房だが、師匠の髪が断ち切れていたのだ。

さきほどのナイフは敵に使ったのではなく、その髪を切るのに使用したのだと、やっと自分も気がついた。

「……本当は女性魔術師がよく使う切り札なんだがね。髪は魔力を留めるのにも儀式の触媒としても都合がいい。……ふん、なにしろ非才の身だ。じゃらじゃら礼装をつけたところで意味はないが、それでも奥の手のひとつふたつぐらいは用意しておきたかった」

ひょっとすると。

髪を伸ばしていたのは、そのためだったのだろうか。

原始電池用の魔術を増幅させ、避雷針のように威力を逃がしたのだ。しかし、いくら威力を削減したところで、あの戦車との差は絶大。激突以前に風圧だけで自分と師匠は吹き飛ばされたのだろう。

それでも生き残ったのは、なお奇蹟に等しい確率だったはずだ。 骨竜の一蹴りでも浴びていれば、師匠も自分も命はなかったのだか ら。

「……手心を加えられてたな。本当に殺す気なら、こんな小細工じゃどうにも。……いやそもそも……どうやってあれを召喚した……? どうして……私が見たこともない……王の腹心が……?」

「先生一?」

助け起こそうとしたカウレスが、息を止めた。

壁についたコートの背中が、半ば炭化していた。おそらく吹き飛ばされたときのものだろう。自分と同様、師匠だって全身を『強化』していたはずだが、その効果には必然の差がある。まして、同時に避雷用の術式を行使していたなら、師匠の腕や魔術回路で効果を十全に保てるはずもない。

「ほかのスタッフには……隠しておけ……」

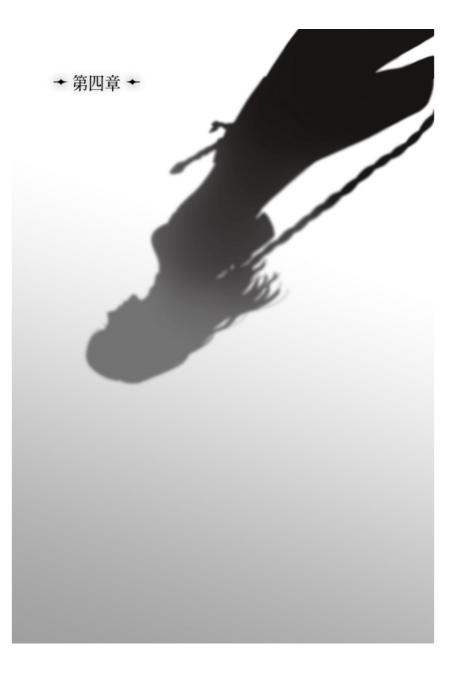
虚ろな呻きとともに、その身体が傾ぐ。

「師匠!」

「先生!」

自分たちの叫びも届かず。

揺れた師匠の身体が、そのまま前のめりに頽れたのだ。



客車へと駆け戻る間は、幸い人の目に触れなかった。

例の殺人事件もあって、ほかの招待客も外出を控えていたのだろう。自分たちの個室の扉を開くと、はっと銀色の髪が振り向いた。

「ひ、人を放っておけないとか言っておいて、なんで勝手に出て行 くのよ!」

この部屋に案内されていたオルガマリーが涙目になって文句をつけたところで、抱えられた師匠の姿に硬直した。

「ちょ、何それ、どういうことよ!」

「すいません。どいてください!」

急いでベッドを確保して、師匠をおろす。

上半身の服を脱がすと、肉の焼ける嫌な臭いが鼻についた。吐き気をこらえ、癒着しかけたところはナイフで切り裂く。本来なら列車のスタッフに医療用品を貰うところなのだろうが、師匠に口止めされている今では手の施しようがなかった。

「……カウレスさん」

「分かってます。俺の治癒魔術なんか、たかがしれてますが」

すぐ、少年にバトンタッチした。

背中がベッドに触れぬよう、横に寝かす。カウレスが近くに陶器 の壺をおいて手をかざすと、淡い紫電が走った。

「それって……」

「原始電池の応用です。先生と一緒に研究していたところだったん ですけど」 と、カウレスが唇を嚙む。

「生体電流を調整して、先生自身の治癒能力を高め、可能なかぎり 精才気ドも賦ふ活かつしています。でも、これだけじゃどれだけ足 しになるか。強大な魔術刻印でもあれば全然話が違うんですけど」

とりわけ古い魔術刻印と一流の魔術師の組み合わせとなれば、た とえ致命傷を受けてもその持ち主を無理やりでも生かすという。残 念ながら、師匠にそのどちらも備わっていないのは明らかだった。

息が荒く、短い。

どれほどの痛撃がその身を襲ったのか、イヤでも分からされる吐息だった。こんなとき何ひとつできない自分の無力さが、みしみしと心臓を拉ひしぐようにさえ思えた。

「……犯人にやられたわけ?」

と、オルガマリーが訊いた。

「分かりません」

「どういうこと?」

「襲われたのは事実です。ですが、あくまで私たちの事情です。トリシャさんを襲った犯人と同じグループなのかは、判断できません」

正直に答えると、オルガマリーはかすかに眉宇を寄せた。

ただ、カウレスだけが懸命に治癒魔術を維持している。暗い部屋 に時々煌めく紫電の小ささが、今にも途絶えそうな師匠の命のよう に思えてならなかった。

そばに膝をつく。

強く、心臓が鳴った。冷や汗が止まらなかった。

自分の芯が直接揺さぶられているようで、どうしようもなく涙が こぼれた。一体いつ以来か分からない涙であった。

「そんなに大切な相手なの? あなたは別に魔術師でもなんでもな

いんでしょう?」

オルガマリーが問う。

自分が魔術師でないというのは、カウレスから説明を受けていた のかもしれない。

「内弟子です」

と、うつむいたまま自分は口にした。

「たとえ魔術師でなくても、拙は師匠の内弟子です」

「.....ふうん」

納得したのかどうか、オルガマリーは離れた。

少しして、部屋に置いていたバッグから何かを取り出してきた。

「だったら、これでも使ったら?」

美しい小瓶を、少女が差し出したのだ。典雅な意匠を見ずとも、 その内側に何か古い魔力が宿っていることは感じられた。

「これ、は?」

「ドルイドの霊薬よ。念のためってトリシャに渡されたものだけ ど、私は使いようなかったから。いくらなんでも頭が生えてくると は思えないものね。だいたい万能らしいから、適当に塗っておけば いいんじゃないの?」

いともたやすげな少女の言葉に、カウレスが振り返った。

「ドルイドの霊薬?!って、つまり、『プリニウス』に載ってた純 正のパナケア?!」

「いいわね。これで、アニムスフィアにはエルメロイからの借りなんてないから。そいつが死なずにすんだら、よく言い聞かせておくのよ」

小瓶を押しつけるようにして、少女は踵を返した。

ひとつあくびをして、

「じゃあ、おやすみ」

手を振って、ベッドのひとつでオルガマリーは横になった。

しばらくしても寝息が聞こえることはなかったが、自分は押しつけられた小瓶でいっぱいいっぱいな気持ちだった。おそるおそる薬を手の平に出して、師匠の背中に塗る。ついで近くのシーツを引き裂いて、煮沸消毒してから巻き付けた。

どれだけ足しになったかは分からない。

だけど、さらに時間が経つと、呼吸だけは安定したように思えた。

「カウレスさん.....」

「……分からない。だけど、こっちの魔術は通りやすくなった気がする」

少年の横顔も、徐々に青ざめつつあった。

ずっと魔術を行使し続けることで、単に集中力だけでなく体力も 削られているのだ。それがどのような苦痛かは分からなくても、尋 常ならざる代償が要求されていることだけは理解できた。

(.....神様、お願いします)

そんなものに祈るのはいつ以来だろう。

ヘファイスティオンと名乗ったあの英霊の正体を知ったときの、 師匠の悲愴な顔が脳裏にこびりついていた。一体、どんな気持ちな んだろう。ずっと再会しようとしていた相手の腹心と、あんな風に 戦いあうことになるなんて。

だから、

(......こんな風に哀しい死を......師匠に与えないでください)

ただ一心に、それだけを祈ったのだった。

個室の窓から、斜めに陽が射していた。

霧越しとはいえ、清涼感のある朝陽の色は見間違いようもなく、 そこでやっと肩に毛布がかけられていることに気づいた。

## 「―師匠!」

「まだ、先生は起きてないよ」

カウレスが、弱々しく笑う。

こちらは自分より早く起きたためか、眠そうに目を擦っていた。

「でも、峠は越したみたいだ。さすがドルイドの秘薬は大したものだよ。とりあえず治療魔術も一旦終了。重態には違いないから、まだ起こせないけどね」

「.....あ、ありがとうございます!」

思わず、頭を下げてしまった。

瘦せこけた少年の顔が、天使に見えた。

ついで、

「おはよう」

と、オルガマリーもベッドから伸びをして、上半身をもたげたのだ。ちらと師匠の方を見て、「どうやら死に損ねたのね」なんて嘯うそぶいて、軽く髪の毛をまとめなおしてから、視線をカウレスの方へやる。

「霊薬ぐらいじゃどうにもならないだろうし、ここじゃ施しようがないと思ってたんだけど、案外いい腕してたのねあなた。何、治療 魔術は得意分野だったの?」 「得意ってわけじゃないです。電気魔術は先生に数週間前教わった ばかりですし」

「は、数週間?」

素っ頓狂な声が、少女の口から流れた。

「何、見かけによらず天才かなんか?」

「いや、その、本当に、前の魔術は何年もやってもここまで馴染まなかったんです。降霊系とかいろいろやってたんですけど、まるで 手応えがなくて」

「はん。エルメロイ教室の噂は聞いてたけど……」

目を細めて、オルガマリーが難しい顔になる。

ため息をついてから、渋々といった感じでこちらに向かって切り 出す。

「詳しく、事情を聞かせてもらえる?」

「それは……」

口ごもった自分を少し見て、カウレスが言葉を添えた。

「いいんじゃないかな、グレイさん」

「......そうでしょうか」

「もう、事情と関わりすぎてるし……彼女はアニムスフィアとして 聖杯戦争の知識も持っていたでしょう。現状の魔眼蒐集列車レー ル・ツェッペリンの置かれた状況を思えば、俺たちは互いのために 協力し合うべきだ。先生が目覚めていても、同じ結論を出すと思い ます」

きっぱりと言ったカウレスを、自分はまじまじと見つめてしまった。

ちょっと前まで時計塔向きじゃないと思っていたが、勘違いだったかもしれない。むしろ、必要に迫られればいつでも豹変しうる人格は、魔術師として理想的だ。より才能のあった姉をさしおいて魔

術師の家系を引き継いだという彼は、ひょっとするとその性質においては姉を凌駕していたのではあるまいか。

「そうそう、薬のことも恩に着てほしいわね」

「貸し借りなしって言ったのに?」

こちらも冷静につっこまれて、うっとオルガマリーが息を詰める。

ともあれ、それで自分も腹が決まった。これまでの事件をかいつ まみつつ、聖遺物のあたりだけは省いて話したところ、

「サーヴァント?」

と、少女の語尾があがった。

「本当に? 生前の人格を持った英霊をそのまま召喚する現象なんて、冬木市の聖杯戦争以外にはありえないわよ。イギリスに出るわけないでしょう? 仮に術式として存在しても、あそこの大聖杯でなければ、そんな術式受け容れられないわよ」

いわく、英霊や神霊の力をごく部分的に借りる術式はあるらしい。 降霊科ユリフィスでは、そうした魔術も教えているのだと、講義で聞いたことがある。

しかし、英霊そのものを呼び出す儀式など、普通にはありえない と。

「……いえ、ひょっとして術式はともかく、召喚自体は冬木でなくてもできる? でも、だとしても御三家並の特権になるはず」

ぶつぶつと呟いて、少女が片目をつむる。

師匠もたまにやるのだが、人に話さず考え込むのは魔術師共通の癖らしい。神秘は秘匿するものだっていう第一原則ゆえだろうか。よく探偵小説とかでは、仮説の段階では人に話したくないって言い訳してるのだが、そういうのとは違う何かを感じた。

改めて、オルガマリーがこちらへと問う。

「本当に、サーヴァントだったわけ?」

「え、と、宝具は間違いなく本物だったと思います。同じイスカンダルの宝具を知ってる師匠も見覚えがある感じでしたし……何より、あれは間違いなく、人間の範疇におさまるものじゃありませんでした」

そう。人間の魔術師ごときでは、宝具を真似るのは不可能だ。

先月師匠が見せた投影なんて魔術もあるが、あれだって外見をほんの短時間真似るのが精一杯。宝具そのものを模倣するなんて...... 少なくとも、自分が時計塔の授業で聞いた範囲ではありえない。

こちらの表情をしばらく窺ってから、

「だったら、確かに私に関係ないってことはないわね」

と、少女は結論づけた。

「どういうことです?」

「サーヴァントには、マスターがついてるものよ。しかも、半ば異界化した空間を彷徨ってるこの魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを、そのサーヴァントは宝具で追跡してきたんでしょう? だったら、列車の中にサーヴァントのマスターがいる可能性が極めて高いわ」

「....っ!」

その事実に、息を吞む。確かに、聖遺物を盗んだ犯人を捜しに来 たのだから、そうした状況も当然考えてしかるべきだったのかもし れない。

「いよいよ面倒くさくなってきたわね。.....で、どんなサーヴァントだったのよ」

「……ヘファイスティオンって言ってました」

「ん、イスカンダルの部下の?」

「知ってるんですか」

「知らないわけないでしょ。ヘファイスティオンは、イスカンダル の居並ぶ部下の中でも最も有名なひとりよ」 断言して、オルガマリーは鼻を鳴らす。

「こと腹心という意味では、図抜けてトップよね。なにしろ、ともにミエザの学舎に通い、ともに大学者アリストテレスから教えを受け、ともにアキレウスとパトロクロスの墓に花を捧げ、最後には同じ男―ダレイオス三世のふたりの娘を娶めとったぐらいだもの」

「娘を、娶った?」

奇怪な言葉を聞いた気がして、思わず鸚鵡返しに喋ってしまった。

「そうよ。このへんは間違いない部分だけど」

「え、でも、さっきの......ヘファイスティオンは女性で......」

「女性だったの? ああ、じゃあ軍隊の体裁として女性だと問題があったんじゃないの。イスカンダルの行状からすれば、性別詐称させて将軍に据えるぐらいはマシな方よ。うん、そういう理由ならかえって納得がいくかしら。信用のおける幼なじみを出世させただけっていうには度を超えてたんだけど、書類に残せなかった戦功とかありそうね」

ひらひらと、オルガマリーが手を振る。

自分もイスカンダルのあらましぐらいは知っているが、さすがに 部下の名前や細かい逸話までは範疇外だった。とはいえ、いくら魔 術師といっても十一歳ほどの少女に知識で負けているのは、ちょっ と傷つく。

同時に、女性だったら性別を偽って軍隊にいれるぐらいはやってのけただろうという英雄—イスカンダルとはどんな人間だったのだろうとも興味が湧いたのだけど。

「とにかく、本当にヘファイスティオンだったら、イスカンダルと 同じ宝具を使ったのも当然でしょうね」

「そう、なんですか」

つい前のめりになった自分に、

「──彼もまたイスカンダルなのだから」

短く、オルガマリーが告げた。

「これも有名な話よ。かつてイスカンダルとヘファイスティオンが訪れたとき、ダレイオス三世の母はどちらが王か分からず、ヘファイスティオンの前に跪いてしまった。当時の王の権威からすれば何らかの刑に処されてもおかしくないぐらいなんだけど、対してイスカンダルは『彼もまたイスカンダルなのだから』って笑ってすませたそうよ。

ヘファイスティオンが女性だったのなら単純に間違えたとは思いにくいし、裏もありそうだけど、同じ逸話が宝具に昇華されれば──たとえばイスカンダルの宝具をヘファイスティオンも使える──という風に、置き換えられてもおかしくないわ」

絶句する。

宝具とは、英霊の象徴ともいえる『力』だ。単なる武器や兵器ではなく、英霊を英霊として成立させる伝説や伝承をカタチと成した概念。ある意味において、名前以上に深く刻みつけられた英霊そのものと言ってもいい。その宝具を無条件で使える相手など、文字通りの一心同体ではないか。

そんな相手に、「気に入らない」と師匠が否定された事実に、胸が詰まった。

どのような気持ちで、師匠はその言葉を聞いたのだろう。

「で、こっちも聞いておきたいんだけど」

と前置きしてから、オルガマリーが尋ねた。

「あなたたち、イスカンダルの聖遺物でも盗まれたわけ?」

再び、硬直せざるを得なかった。

こちらの表情の変化を見てとったのか、少女は仕方なさそうに腕 組みする。

「そりゃあ分かるわよ」

と、つまらなそうに言う。

「第四次聖杯戦争で、そこの君主ロードが喚びだしたのはイスカンダルだったんでしょ。イスカンダルの聖遺物がどんなものだったかは知らないけれど、イスカンダルに縁が深いものならほぼ確実にヘファイスティオンにも縁が深いわ。幾多の英霊から偶然へファイスティオンが召喚されたと思うよりは、同じ聖遺物を媒体に使ったと考える方が自然でしょ」

少女の予想は、見事にこちらの油断を穿うがっていた。

なるほど君主ロードの家系というものは、常々から思考を張り巡らせているのが当然らしい。ライネスがああいう性質になったのも、いまならなんとなく納得できる。あれは必ずしも彼女だけの個性というわけではなく、環境があってこそ磨かれた類の才能なのだ。

「つまり、聖遺物を盗んだ相手がマスターとなって、ヘファイス ティオンを召喚した……しかも、そのマスターはこの列車に乗って いるということですか?」

「可能性は高いわね。なんでイスカンダルじゃなくて、ヘファイス ティオンなのかとか、どうしてこの魔眼蒐集列車レール・ツェッペ リンに喚びだしたのかとかは分からないけれど」

そこまで話した上で、

「でも、ヘファイスティオンについては、普通と逆ね」

と、オルガマリーは呟いた。

「何が、逆なんです?」

「聖杯戦争の歴史はひととおり洗ったって話したでしょう? 普通、サーヴァントは弱点がバレるからって理由で、なるべく真名は秘匿するものらしいのよ。代わりに、英霊があてはめられたクラスを指して、剣セのイ英バ霊ーだとか槍ラのン英サ霊ーだとか呼んでいたそうだけど」

ここで区切って、少女は考え込むように、顎先に指をおいた。

「だけど、そのサーヴァントは真名は分かっても、クラスは分から

ない。同じ宝具を使ったイスカンダルは騎ラのイ英ダ霊ーだし、状況を見る限り騎ラのイ英ダ霊ーに近しい特性を持ってるんじゃないかとは思うのだけど」

「同じだと、思いますか」

「さあ」

と、オルガマリーはかぶりを振った。

「もともと、あなたたちの言うことをまるまま信じたわけでもないわよ。ただ、もしも信じるとしたら、このへんは不思議だなと思っただけ。.....で、残った問題はひとつよね」

列車の揺れに身を任せつつ、人差し指をあげる。

その問題を、カウレスが引き取った。

「殺人事件の犯人がヘファイスティオンのマスターかどうか、ですか」

「案外、よく分かってるじゃない」

「ただ、判断するには材料が少ないです。手がかりになるとすれば、頭部を持ち去ったことぐらいでしょうけど」

少年の言葉を最後に、ふたりともが押し黙る。

ここまでが、現状考えられるラインらしい。自分の頭ではついていくのもいっぱいいっぱいで、ひとまず大量に押し込まれた情報を消化することに躍起になっていた。

- ──盗まれたイスカンダルの聖遺物。
- ─サーヴァント・ヘファイスティオン。
- ──魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの殺人事件。
- 一奪い去られた頭部。
- 一虹の魔眼。

もっとイスカンダルについて詳しく聞いておけば良かった、と密やかに思った。師匠に後ろめたさをもたず、尋ねておくべきだった。こんなところで必要になるなんて想像もできなかったけど、それでも何かできることはあったのではないか。

横たわった師匠を見る。

師匠なら、どう考えただろう。あのサーヴァントや、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで起きた殺人をどう結びつけて、どう分析して、どう解体するだろう。

(たとえば.....)

必死に、記憶を辿る。

- ― 『見ることは、人間の歴史で最初の魔術だ』
- ──『それは、人間の五感でも、視覚が最も多くの情報を処理する からだ』

ここに来る前、師匠が話していたこと。

魔眼が魔術の歴史において、どのような位置を占めていたか。

いつもの師匠ならそんなことから、事件の解決法を見つけ出してしまうのだろう。自分には到底及ばないけれど、カウレスやオルガマリーもそばにいるのだから、せめて糸口だけでも発見できないかと思考を回転し続ける。

ぐるぐると、ぐるぐると。

ぐるぐると、ぐるぐると。

ただひたすら、記憶に潜っていく。いつしか再開しだしたふたり の会話も耳に入らず、呼び覚まされる映像と音に没頭する。

ふと、口から疑問がこぼれでていた。

「……そういえば……予測ってどういうことなんでしょう」

「何のことです?」

「いえ、あの、トリシャさんが自分は予測の未来視だって言ってた から」

訊き返したカウレスに、思い出しながら答える。

──『まるで、時間の透明人間です』

カラボーとの検死の際、師匠が囁いた言葉が棘のように引っか かっていたのだ。

曖昧な自分の言葉を受けて、カウレスはしばし瞼を閉じた。

「……ううん。人間の機能のみに依ったものに限定しますが、未来 視と過去視には、双方、予測と測定の二種類があるそうです」

言って、少年は二本の指を立てた。

「予測は名前の通りです。俺たちもやってるような、坂にボールを置いたら転がっていくとかそういう演算の延長上。その能力を持った人間が途轍もない記憶力と計算能力を保持しているがゆえに起きる現象ですね。ただ、これらの工程を意識すると、たいていは人間としての人格を毀き損そんしてしまうため、おおよそは無意識下でやっているそうです」

「……ええと……つまり、普通の想像なんですか」

「理屈はごく普通です。だけど、この場合、無意識下で行われている記憶量と演算量は、ほとんど人間に許される領域を超えているでしょう。俺たちは進化の過程で最適化してここにいます。魔術師は過去へのベクトルを持った人間ですが、それでも肉体はおおよそ現代の人間としてのフォーマットを得ている。そこに別次元の記憶量や演算能力を載せたなら、理屈は普通でも過程の異常さに耐えられない。

たとえば、俺たちはこの場をおおよその『印象』で捉えてます。 三人の名前や表情。豪華な列車の個室。ベッドやテーブルとか定期 的な列車の揺れとか、そういう大雑把さです。でも、予測の未来視 を行う人間は、細かな光の色、一音ずつの声の抑揚、コンマー秒ず つの瞳の動き、はては体臭の変化や窓を通りすぎた霧の濃淡までも 記憶して、環境や人の絡み合いからひとつの世界を演算しているん です......こんなの無意識下でだって、脳が焼け付きかねません」

「……記憶と、演算……」

カウレスの言葉を、なんとか吟味する。

自分の悪い頭では明らかに吞み込みきれない情報なのだが、それ でもなんとなく違和感があった。しばらく考え込んで、ようやっと 違和感の理由に辿りつく。

「でも、それって……眼球というよりも脳の分野なんじゃ?」

「場合によりますが、魔術的な見方だと眼球がある種の魔術回路と して働いて、これらの記憶や演算をしてるそうです」

そういえば、魔術回路はある種のコンピュータみたいな記録保存 もできるそうだった。この場合、予測の未来視というのも似た事象 なのだろうか。

「対して、測定はより異常です。同じように記憶力と演算能力を前提にはしてますが、予測が受動的・防衛的な能力であるのに対して、測定は積極的──攻撃的と言ってすらいいと思います」

「積極的、ですか?」

「ええ。積極的に、未来に働きかける異能なんですよ。つまり……」

考えながら、カウレスが周囲を見やった。

テーブルの上のメモを手に取って、さらさらと図形を描いてのける。

「何ですかこれは?」

「時間の模式図です。未来は幾多に広がっているというのは分かり

やすいですよね」

カウレスの言葉と図形に、自分も小さくうなずいた。

つまるところ、選択肢だ。目の前のコップを右手で取るか左手で取るか、そうした無数の選択肢から未来という概念は成り立っている。同じように、カウレスの図では現在の一点から、無数の経路が放射状に未来へつながっている。

「さっき、予測は過去から現在までのあらゆるデータを記憶し、未 来の可能性を演算するものだと話しました。対して、測定はどの未 来のルートに行くか、ひとまず自分が決めてしまうんです。決める ことによって、他人の選択肢を限定するわけです」

コップを右手で取るか左手で取るか、自分で決める。

結果として、周囲の反応や行動まで縛りつけてしまう。測定という意味は、自分から手を出して未来を決定──測定してしまうからか。なるほど、これは予測とは全然違う行為だ。同じ未来視といっても、ベクトルは火と水ほども異なっている。

「この理屈の違いから、測定は精度において予測を大きく超えるそうです。システム上、自分が居合わせる場所の未来しか視えないそうですが、一度測定が決定してしまえば、その未来は固定されてしまうと。未来を限定する効果はそれだけ決定的とも言えるでしょう」

ぞくり、と冷たい何かが脳に刺さった気がした。

未来を、固定する。

その言葉の持つ本質的な恐怖に触れた気がして。

もしも、そんな瞳を持った人がいたら、どんな人生を過ごすのだろう。数日前には通り過ぎた未来を、お役所仕事みたいにこなし続ける妄動。皆無となる自由意思。自分が視てしまった未来の奴隷。

はたして眼球と本人と、未来を選んでいるのはどちらなのか。

勝手な想像をこらえて、小さくうなずいた。

「……なんとなく、分かりました。過去視も同じなんですか?」

「はい」

と、カウレスが肯定する。

「もっとも、未来視と違って、過去視においては予測と測定の違いは無いようなものだとか。本人も判別がつかない場合がほとんどみたいです」

「そうなんですか」

「そっちも、ちょっと描いてみましょう。……無限に広がった未来 に対して、過去とは砂の山のようなものだそうです」

未来に向けた無数の道の逆に、カウレスは小さな砂の山を描き足した。

離れてみると、まるで漏ろう斗とのようだった。未来からいろんな経路を辿ってやってきた砂の粒が、現在で一粒ずつに絞られ、過去という砂の山へと落ちていく。

時間とは、こういうことなのだろうか。

「一粒ずつ、未来から現代に滑り落ちた砂粒が、過去の山へ落ちていく。こうして図にすると、三次元空間におけるエントロピーと同様、時間もある種のベクトルを帯びているのが分かりやすいでしょう」

時間の流れ。エントロピー。

まるで砂時計のように、刻一刻と未来は現在になり、現在は過去になってしまう。誰にも留められない──留めようもない、この宇宙に定められた一方通行。

「統合した結果を予測するとしても、自分の行動を起点として測定するとしても、過去である以上その過程は大して変わらない。あえていえば、自分の行動を起点にする分、測定の方がいくらか狭く、精度が上がるぐらいですね」

測定の未来視の脅威が『未来を固定してしまう』ことにあるなら、とっくに固定されている過去はそのような現象と関係ないわけだ。

そこまで話してから、申し訳なさそうにカウレスが付け足した。

「ただ、過去そのものを見たものはいないんで、一部の現代魔術や量子論では、過去さえも実は未確定なのだ……なんて言う人もいるそうですけどね。俺たちが過去だと思ってるのはただの記憶と記録にすぎないのだとか。……すいません、このへんまだ履修が終わってなくて……」

「い、いえ、十分です」

一瞬、師匠に講義されてるような気分になってしまった。

ベッドに横たわっている師匠を、ちらと見る。たとえ倒れてしまっても、この人が培ったものは失われていないのだと、少しだけ安心してしまう。

ひとまず話が終わったと見たのか、放置されていた形のオルガマ リーがつまらなげに鼻を鳴らす。

「で、それがどうかしたわけ?」

「いえ、師匠が言ってたんです。犯人は、過去視からも未来視から も見つからない──まるで時間の透明人間だって」

そういえば、その話が出たとき、オルガマリーは気絶させられていたのだった。

「時間の、透明人間.....」

呟いてから、銀髪の少女が顔をあげる。

「それ、もう少し分かる人いる?」

「えっと、魔眼だと、イヴェットならもう少し詳しいかもしれない けど......」

カウレスが言ったときだった。

とある放送が、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンにこだました のだ。

### 「一ロダン卿」

と、オークショナーが口を開いた。

周囲には低い音がこだまし、車両全体を響かせている。いくつも の圧力計や加減弁ハンドル、はたまたブレーキ弁ハンドルと注水器 の向こうからは、鉄と石炭が互いを焼く鈍い音がどよもしていた。

ここばかりは招待客も入れぬ、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの機関室である。

実のところ、列車の大半の動力は魔力に依存しているのだが、この機関車両はむしろ古い蒸気機関車を模している部分が多かった。 かつての支配人がそうした趣向を好む人柄だったためだ。

あるいは、死徒が、かもしれない。

超越した魔術や能力が人の域を超えても、どこか人の名残を好む のがオークショナーの知っている死徒の性質であった。

「準備は終わったか、レアンドラ」

振り返らず、いくつもの計器を睨んだまま、車掌はオークショナーの名を呼んだ。

「はい。万魔眼球庫パンデモリウムにて、所定の魔眼を確認しました。今回も滞りなくオークションをすすめられそうです」

「それは幸い。今回のメインは?」

「分かりません」

と、オークショナーは答えた。

「いつもと同じく、どなたがそうなのかは、支配人代行しか知らぬ ゆえ」 かつて支配人がいた頃と同じく、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンのスタッフも、誰がオークションの目玉商品Eye Catcherたる魔眼の主なのかは知らされていない。

例外として、狙った相手がオークションが始まる直前にも自分から出てこない──もしくは招待状を受け取りながらこの列車に乗り込もうとしない場合のみ、支配人代行は相手を教えるのだ。彼女が自分たちにその相手を教えないということは、すでに列車に乗り込んでいるか、本日追加の招待客として乗り込んでくるのが確実なのだろう。

奇怪な風習だが、少なくともロダンやレアンドラは納得していた。

彼らにとって大切なのは、かつての支配人が残した魔眼のオークションを滞りなく進行することのみ。そのための機構システムたる自分たちを、誇ることこそあれ、疑問に思うことなどあるはずもない。

今も、彼らの胸には支配人の面影が宿っている。おそらく彼らが 死に絶え、列車の最後の歯車が風化するまで色褪せない薔薇の花 が。

彼らが仕えたのは、そうした相手だったのだ。

ふと、オークショナーが尋ねた。

「殺人は、どう思われますか?」

「客には残念だったが、この程度の諍いさかいはいつもだろう」

「そうですね。五年に一度ほどは」

と、オークショナーも認める。

自前の資金ではオークションに勝利しがたい場合、厄介な競争相手をあらかじめ殺しておくという強硬手段は、この列車ではよく見られた光景だ。今回もそのひとつと思えば何の不思議もない。頭部を奪うという奇怪な殺し方も、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに限ってはけして驚くほどのことではない。

「殺された相手は未来視の魔眼だったそうですが、もしも頭部から

魔眼を移植してくれと頼まれればどうしましょうか」

「招待客であるなら、無論アフターケアとして受け容れよう」

「いつもどおりですね」

「いつもどおりだ」

と、ロダンはうなずいた。

死も生も、そのように受け容れてきたのだった。かつて支配人が 愉楽のために始めたオークションである。支配人に終われと言われ ぬ以上は、たかだか人間社会の善悪の判断など差し挟む余地などあ りはしない。

至極当然とオークショナーもうなずき、こう付け足した。

「ところで、昨夜はいささか荒れていたようですが」

「招かれぬ客か」

無論、あの雷が通常の気象でないことには、車掌も気づいていた。半ば異界化した空間とはいえ、むしろだからこそ、偶然の要素は排除されていく。

「だが、当列車と事を構えるつもりはなさそうだ。列車の運行に支障が出ない限り、客の内情にかかわるつもりはない。……無論、支配人代行がなんらかの指示をくだされた場合は別だが」

「.....そうですわね」

ロダンが断言し、再びオークショナーが追認する。

グレイに話していたように、今の主は彼らもほとんど出会うことがない。それはたまさか海の果てに見える蜃気楼のようなものだ。ほとんど魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを動かすための機構システムとなりはてた彼らだが、だからこそひどく渇いた寂しさを帯びてもいた。

しばし、蒸気の音だけが機関室を満たした。

やがて、もう一度オークショナーが尋ねたのだ。

「どうなさいました? ロダン卿」

「列車の進路に、異常が生じた」

淡々と、ロダンが口にする。

しかし、長いつきあいとなるオークショナーは察した。痩せぎす の車掌の表情に、常ならざる焦りが滲んでいることを。

「信じがたいが、誰か、線路に細工をしたな。......我らの行く先は、どうやら腑海林アインナッシュの仔を掠めていくぞ」

圧力計を厳しく睨みながら、車掌は放送用の送話器を手に取った。

\*

化野菱理は食堂車に行かず、ルームサービスを頼んでいた。

本日の下見会が、追加の招待客を乗せた後になることは確認している。ああした殺人事件が起きた以上、無駄に交流を増やす必要もない。

前菜などで、最低限の栄養だけ補給しつつ、

「……本当に、以前の支配人は性格が悪かったのね」

と、彼女は口にする。

もともと蒐集コレクションした魔眼を自慢するためのオークションとは聞いているが、そのためにわざわざ密室空間に魔術師たちを閉じこめるのはやりすぎだ。最低でもオークション当日と翌日はこの列車に乗り込まなくてはならぬ以上、資金で勝てぬなら殺人をと考えるのは、魔術師にとって当然だろう。

つまり、魔眼自慢のついでに人間の殺し合いを愉しもうと、おおよそそういう意図によってこのオークションは形成されている。 たった数日間を欲望の坩る堝つぼとして凝縮しようとする思想を、 菱理は強く感じていた。

「そう考えると、アニムスフィアの従者の殺害は順当かしら?」

いくら密室空間で、後から犯人を指摘しがたいとはいえ、君主 ロードの血族──次期後継者を殺してしまうのはやりすぎだろう。た かだか十一歳の娘を脅すには従者を殺してやれば十分。そう犯人は 考えたのかもしれない。

ホワイダニット。

もとより菱理は犯人探しをするつもりなどないのだから、これ以上の思索は必要ない。単に彼女の日常として、条件反射的に状況を整理しているだけだ。足し算の式を見て、つい答えを思い浮かべるぐらい当然に、法政科の人間ならやるだろうことをやってしまってるだけ。

Г......

すう、と指が自らの首を撫でた。

切り離された頭部。未来視のトリシャにも覗けなかった死の未来。どちらかは聞いてなかったが、予測の未来視なら唐突な事故などは見抜けない。しかし......

しばしの時間とともに、菱理が天井を見上げた。

「──お客様にご連絡申し上げます」

と、放送が流れたのだ。

\*

「特番! ジャ〜ンマリオ! スピネッラの! ゾンビクッキング 列車叙情編! 今日はジャンマリオと一緒にゾンビ丸焦げ料理を楽 しみましょう!」

高らかに、ナレーションが食堂車に響き渡った。

白い帽子が宙を舞い、これまた白いスーツが小粋に躍る。パフォーマーが手を打ち振ると、ないはずのショットガンさえくっきりと観客の脳内に投射させて、テロリストよろしく車内に乱射し始めた。

「さて、今回はクッキングじゃなくて喰うだけだから、楽でいいな! まずはこのいかにもやばげなカルパッチョだ! うむアンチョビとバルサミコ酢のソースがあざといぐらいにパンチを利かせてるなこりゃ! おうおうロゼワインも絶品だ。ショットガンものだぞこれ! いいから悲鳴をあげとけよ観客ども!!

ぐるんとターンしつつ、牛ヒレのカルパッチョをすくって、美味 に打ち震える。

料理自体はごく単純なものなのだが、なにしろ素材がいい。ロゼワインに至ってはここが天国かと錯覚させる爽やかさと芳醇さで、舌と喉を潤わせる。

「おらAD、早く追加のゾンビをよこせ! 美味いものを食べたら ゾンビの頭を殴ってひとつ星、もっと美味いものを食べたら心臓に ショットガンいれて三つ星、不味かったら両方シェフにぶちこんで 確殺だろうが!」

「はいジャンマリオさんこちらをどうぞ!」

さっ、と横合いからゾンビ人形が差し出される。

鉈に見立てた手刀を人形の頭にいれて、さらに投げ上げたソフト帽を指鉄砲で受け止めるまでが、一連の動作。

「脳髄ぶちまけ生首ポロリ、おまけに心臓もらいうけ候! ゾンビクッキング列車叙情編これにて閉幕!」

だだん、と椅子の上で、器用にタップダンスまでこなして見栄を切る。

約一名の拍手喝采が、食堂車に巻き起こった。

「いや光栄ですよ! 生ゾンビクッキングが観られるなんて!」

「ハハハ、こちらこそ今度オファーかけるから収録時にも来てくれよ! ぜってーいけるって眼帯ピンク髪助手ゾンビ!」

ばちんと音がしそうなウィンクをかまして、ジャンマリオがテーブルを挟んだ眼帯少女を褒めそやす。

イヴェット・L□レーマンである。

「出演料はたっぷりお願いしますよ?」

「ボンクラプロデューサーどもを魔眼でだまくらかしてくれたら な!」

くす、と少女が微笑する。

こちらも席に座って、手前の皿から朝食をいただきつつ、話題を 切り替える。

「で、ジャンマリオさんは狙いの魔眼はあったりします? 昨日の 炎焼と掠取もなかなかでしたが」

そう。

結局、最終地点はオークションだ。たかが従者が殺されたごときで、このゴールが揺らぐはずもない。今日になって追加の招待客が来る可能性も高い以上、初日から本気で来ている相手の思惑は摑んでいたかった。

「知ってどうするわけよ。お互いオークションじゃ敵同士だろ? 魔眼を分け合うとかできないぜ」

「いやいや、ほら、うちの場合は新しい魔眼を移植するつもりはないんですよ。なんせこれなもんですから。──じゃじゃーん! レーマンの加工魔眼ー!」

ずらした眼帯から、宝石が覗いたのだ。

位階としての『宝石』ではなく、真正の鉱石。これらを加工して、高度の魔眼を制作してしまうのがレーマン家の秘儀だった。

ر **(**هٔ ۲

「なんで、あたしが欲しいのはあくまで研究対象としての魔眼。魔 眼蒐集列車レール・ツェッペリンはアフターケアもしてるんで、購 入から移植まで間をおいてくださってもいいですし、移植後にうち に通ってくださってもいいんで、互いに協力できるんじゃないかと 思うんですよね」

この話は化野菱理に持ち込むのは難しい。

個人の魔術師としての取引になるので、おそらく法政科として動いているだろう彼女には、そもそも話し合いの余地がないからだ。

「アニムスフィアだって仮にも君主ロードの家系。ひとりで買い占めに入るかもしれないし......だな」

「はは、ご名答!」

さすがに、財政危機で苦しいエルメロイがそんな行動に出るとは考えにくいが、アニムスフィアと法政科はどちらも膨大な資金にものを言わせる可能性が高い。その際は早急に狙いを変更して、場合によっては複数の魔術師で結託してでも有力な魔眼を確保する必要がある……ということだった。ひとつずつの魔眼が狙いではなく、あくまで研究対象として欲するイヴェットならではの戦略である。

「悪くはない、か」

と、ジャンマリオが顎をひねる。

「そっちの爺もどうよ? 売り主だとしても、買ってほしい相手とかいるんじゃねえの?!」

「.....別に。そんな欲はない」

離れた席の老人に手を振ったが、カラボーは寡黙にかぶりを振ったきりだった。

そして、そのタイミングで、

「**―**ん?」

「一何?」

その放送は、食堂車にも響いたのだ。

「──お客様にご連絡申し上げます」

と、放送は流れた。

「当魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは、所定のコースを外れました。現在の予測では三十分後、腑海林アインナッシュの仔に突入いたします」

淡々と、冷ややかな声で、車掌が告げたのである。

所定のコースを外れたという意味は、続いた放送で知れた。

「ご面倒をおかけするかと思いますが、オークションが始まりますまで、各自の安全はお客様自ら確保くださるようお願いいたします」

「.....な」

思わず、自分の声は裏返った。

つまり、そんな危険な地帯に飛び込むぞ、と放送は言っている。 列車の中にいてすら確実に安全ではないぞ、と警告しているのだ。

突然の内容に、自分だけでなく、カウレスとオルガマリーも目を 丸くしていた。

明らかに不測の事態だった。仮にも、魔眼蒐集列車レール・ ツェッペリン自体が、そんな状況に追い込まれようとは。

「これも、犯人の? それともヘファイスティオンの?」

「分からない。そのふたつが同義なのかどうかも」

硬い声で、カウレスがこぼした。

「だけど……殺人事件どころじゃなくなってきたみたいだ……」

がたん、と大きく揺れた。

ベッドの飾り板に取りすがったオルガマリーが表情を変えて、外を指さした。

#### 「あれ―」

しなやかな指の延長上に、自分とカウレスも息を止めた。

「雪、が.....」

先までの霧に交じって、雪が舞い始めていたのだ。

すぐにそれは、叩きつけるような吹雪と化した。彼方におわす白い神の吐息にも似て、その勢いはただ増すばかり。放送で言っていた腑海林アインナッシュの仔の影響だろうか。もはや誤報でもなんでもなく、事態が急転しつつあることは明らかだった。

ぎり、と部屋に音がしたのだ。

奥歯を嚙む音だった。

「……放送通りなら、オークションが始まるまで凌げばいいのよね」

「オルガマリーさん」

「言っておくけど、私はあなたたちの味方でもなんでもないわよ。 アニムスフィアとして受けた借りだってもう返したんだもの」

きっぱりと、オルガマリーが言った。

立ち上がり、歩き出す。銀色の髪が美しいさざなみのように揺れ た。

「私は私でやる。ひとりだって十分。ううんひとりがいいんだ。トリシャは私がひとりでできるようにきちんと教えてくれたんだから。——それより」

振り返って、銀髪の少女は部屋のベッドを凝視した。

「こんな状況で、あなたたちはその師匠を守りきれるの?」

ر د.....

返事はできなかった。ただ、扉が閉じて少女が立ち去るのを見送るしかなかった。

彼女が残した言葉通りであった。殺人事件も魔眼のオークションも襲撃してきたサーヴァントすらも、すでに意識からは遠い。放送通りなら、後三十分で始まる地獄を前にして、深く傷ついた師匠―ロード・エルメロイII世もいまだ目覚めぬままで。

自分は、ただ無様に立ち尽くしているしかできなかったのだ。

―いささか、時間は巻き戻る。

昨日。

つまりグレイたちが魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗って 二日目のことだ。

現ノ代ー魔リ術ッ科ジはスラーの通り、学術棟のロビーで怒鳴り 声がしたのである。

「いいからどきたまえ! 私が用があるのはライネス・エルメロイ・アーチゾルテただひとりである―おぼぉぉぉぉぉ!」

(.....む、吐血したな)

と、執務室のライネスは眉をひそめる。

あれはちょっと動いただけで吐血する生命体である。立てば吐血、歩けば吐血、走る姿は血塗れゾンビ。見てくれだけはよいのだが、増血剤抜きには一日だって生きていけぬ、どこに出しても恥ずかしい下ゲ手テ物モノだ。

正直に言って、このまま居留守を使いたいのだが、そうはいくまい。

しばらくすると、バイオリンケースをもった青年が扉から現れた のだ。

「レディ! これはどういうことだね! うるぼおおおっ!」

「とりあえず吐いた血は拭いておいてくれるかな、ミスター」

冷たくあしらって、ライネスは目の前の書類を始末していく。

これでも君主ロードの仕事の三割ほどは、彼女が処理しているのである。兄がいない場合、この比率はほぼ十割になるわけで、猫の手も借りたいのが本音だ。それでも応対の時間ぐらいはあるのだが、この相手には正直一秒も使いたくはなかった。

「で、我が兄なら不在だが。伝言なら承ろうか」

「そういうことじゃない! 我が親友のウェイバーが、どうして魔 眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗ったと教えてくれなかったん だ!」

「言う必要ないだろう」

「いいや! 君の源流刻印や彼の担保を預かってる身としても、いやいや親友だという一事だけでも、そのぐらい報告してもらう義理はあるはずだ! だからウェイバーの妙な様子について、君に話したんじゃないか!」

胸を張って、青年は拳で叩き……強すぎたらしく、げほげほとむせかえる。

第四次聖杯戦争のとき、日本行きのチケットを用意したのも君だものね、とは思っていても口に出さない。世間知らずかつ極めて友達の少ない兄の過去を思えば、案外そこは時計塔の歴史を決めた分岐点だったかもしれない。飛行機のチケットが買えるとか買えないとかで、魔術の歴史が変わったとなればお笑い種ぐさだが、表の歴史だって似たようなものではあろう。

そう。

今となっては、兄のことをウェイバーと呼ぶただひとりの人物。 エルメロイ教室を引き継いだ当時、もののついでで周囲に潰されな かったその理由こそが、彼であった。

名を、メルヴィン・ウェインズという。年齢は兄と同じく三十がらみ。アルビノらしく、長い睫も髪もあらゆる色を失った純白。瞳は淡青で、いっそむかつくぐらいに整った顔立ちは銀幕でもさぞ目立つだろう。ついでに名門中の名門たる三大貴族の分家でもある。これで生来の身体の弱ささえなければ、祭位フェスの調律師なんて特殊極まる地位とは別のところに辿り着いたかもしれないが。

ため息とともに、ライネスはゆるくかぶりを振る。

「あいにくだが、私にしても魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに行くとか知らされたのは数日前でね。だいたい、あの列車は一枚の招待状につきふたりしか同行者を許さないだろう。今回はふたりとも弟子から指名されたし、私はこの通り職務で忙しくてね」

「なら、仕方ない。私ひとりで行こう」

と、青年があっさり納得した。

その言葉に、ライネスも首を傾げたのだ。

「は? ひとりで行く……ってそうか君は」

「うむ! あの聖杯戦争でも最近の事件でもこの身体ゆえに不遇をかこっていたが、ここしばらくは調子が良くてね。数日の外出ぐらいは問題ないさ!」

爽やかに、青年は白い歯を煌めかせた。

その青年が、誇らしげに白い封筒を見せびらかしたのである。

「当然、我が家の全力を尽くして、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの招待状を譲り渡してもらったとも! 私ひとりでも、ウェイバーの泣きべそぐらい記録してやらなくてはね!」

そうだ。

確かに、この青年はウェイバーの『親友』だ。しかし、それは自動的にウェイバーの『味方』であることを意味しない。そうだったなら、あんな危険きわまる聖杯戦争に兄を送り出すことなんてしなかったろう。ある意味で、この青年はライネス以上に悪質な知能犯であり、フラット以上に自覚的な愉快犯でもある。

「さあ急ごう! 善Theはsooner,急theげbetter! 始まりのラッパは吹き鳴らされた!」

清々しく、青年──メルヴィンが堂々と宣言すると。

窓の向こうで、彼が呼び寄せたと思しいヘリコプターが、風を巻き上げたのであった。



あとがき

三田 誠

一かの一瞥は毒矢のごとし。

巡りし邪毒は、夜の精髄。

英雄の恋も、大神の死も、ただその瞳が欲するままに。

魔眼。

その魅力的なガジェットは、TYPE-MOON世界の幕開けを華々し く飾ったひとつです。

「生きているなら神様だって殺してみせる」という直死の魔眼は、 『月姫』『空の境界』ともに主人公の異能として採用され、多くの ユーザーをまさしく「魅了」しました。

それは、神話の復活でもあったのでしょう。

人類最古の魔術といっても過言でない邪視イーヴル・アイが、新たな命を得た瞬間です。僕自身、拙作『レンタルマギカ』において十年ほどもつきあってきた魔眼ですが、いまだに心を惹きつけられてやみません。

だからこそ、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンという設定は、いずれ『ロード・エルメロイII世の事件簿』でも取り扱いたいと密やかに思っていました。幸いというか、設定こそあれども今後の物語で使う予定はないとのことで、こうして執筆に至りました。……え? 「誰かほかの人がロード・エルメロイII世について書く予定はない」と一巻のあとがきで言ってたのに、FGOでど真ん中のイベントがなかったかって? 大人は嘘をつくんじゃないのです。ごく稀に間違いをおかすだけなのです。後、予定は多くの場合未定なだけなのです。

さて、ここからは少しネタバレを。

もともと、この事件簿ではTYPE-MOONさんの古い物語と新しい物語の接合を意識してるのですが、今回はそうした部分がより強く出ていたかもしれません。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン自体もそうなのですが、たとえば後半に出てきた『彼女』は、虚淵玄に『Fate/Zero』として託される以前、奈須きのこが漠然と思い描いていた第四次聖杯戦争がモデルになっています。性別はさることながら、乗騎が竜種となっているのも当時のアイディアがもとになったものですね。もちろん、それ以外の必然性もあるわけですが……こちらは今後触れていくことになるかと。

カウレスやオルガマリー、さらに終盤に出てきた──たまにライネスがほのめかしていた友人もいよいよ登場なのですが、このあたり時計塔の設定が重厚すぎて、物語をここまで重ねてもまだ一割も出し切れていないという思いが強くあります。

## -----ネタバレここまで<del>-----</del>

ロード・エルメロイII世という希有なキャラクターにつきあっていくのは、ひどく古くて分厚い魔術書を一ページずつ精査していくような感じです。誰だってひとりで生きているわけではないのですが、とりわけ彼の場合、押しつけられた君主ロードという立場が複雑に絡みついています。

その立場なら当然知りうること、当然知っている相手、ひとつずつを並べていくだけでまるで蜘蛛の巣のようにどこまでも広がっていきます。願わくは、この小説がその謎を魅力的なままに解体できていますよう。

物語は、いよいよシリーズ全体の折り返し地点。

ここより先は、『ロード・エルメロイII世の事件簿』後半戦とあいなります。ロード・エルメロイII世が、はたまたグレイやフラットをはじめとしたエルメロイ教室の生徒たちがいかなるカタチで事件と向き合うことになるのか、どうぞお楽しみに。

最後になりましたが、毎回大量の新規キャラクターデザインをお願いしてしまっている坂本みねぢさん、困難な魔術考証を丁寧にひもといてくださった三輪清宗さん、カウレスやオルガマリーなど複数作品にまたがるキャラクターの整合に協力してくださった東出祐一郎さんや桜井光さん、成田良悟さん、そして奈須きのこさんやOKSGさんをはじめとしたTYPE-MOONのスタッフに感謝を。

次は、冬頃にお会いできるかと思います。

二〇一六年六月

『魔法使いの夜』を遊びながら

PS、TYPE-MOONの濃いファンの方は、魔眼収集列車じゃないのと思うかもしれませんが、こちらは単に小説としての字面ゆえです。日本語訳が変わったんだなぐらいに思っていただければ。

三田 誠

## MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

# イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

4 「case. 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン(上)」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2017年10月11日 発行

ver.002

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 4 「case.魔眼蒐集列車(上)」』

2016年8月12日 初版発行

2017年8月10日 第五版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

**%Japanese** text only

